
詰め合わせギフトパック

たまさ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詰め合わせギフトパック

【Zマーク】

Z98580

【作者名】

たまゆ。

【あらすじ】

色々「いやませ企画」のページです。

まさに闇鍋状態ではあります、何か気に入るものがありましたら宜しいのですが、気分しだいで増えたりへったりするかもしません。

本編とは一切関係がありませんので、まったくおかしな現象が多発します。本編ではありえないあんなことやこんなこともあるかもしれません。

楽しんでいただければ幸いです。

私立魔女猫学園（笑）

私立魔女猫学園 もう企画からして阿呆ですか。開幕。

「役割の変更を要求する！」

律儀にも手をあげて言つ生徒Aロイズ・ロック。もともとが警備隊の隊服姿なので、学生服も良く似合つ。

というか、違和感はないが、学生は確かにある意味アウト。

「オレが生徒でおまえが教師つて、ないだろ？
むむむっ、せつかくエリィフィアから乗馬用ムチを奪つてきたあたしに対する暴言、あたしはびしひしとムチのしなりを楽しみながらにまーんつと口元に笑みを刻んだ。

「あらーん、こんな可愛い教師でいいじゃないの
猫耳猫尻尾は相変わらずついていますが！

今日のあたしは女教師に相応しいツーピース。胸が大きいのは『愛

嬌 上げ底パッド一枚の威力を思い知れ！

女教師はやつぱりほら、ある種色気を撒き散らしたいものです。

「問題は無い」

同じく生徒Bエイル・ベイザッハ。本を繰りながら言葉にしたが、ふつとその灰黒の眼差しをあげてあたしをひたりと見た。

「悪くない」

……何に対しても悪くないのか聞いたら駄目な気がする。あたしは力をつしなってへこんだ耳に活力よ戻れとなぞの元氣をおくりつつ、べしゃべしと机を叩いた。

「ロイズ、あんたに他の役割を振り分けたら確実に用務員よー。チリトリとか篠とかが似合つ」

「くつ。オレ自身も似合つかもと思つてしまつたじやないか。もつと他に……体育の先生とかないのか」

「でもね、そうすると、あんたが用務員、もしくは体育教師。ダーリンが保健室の怪人になつてしまつのよ」

「怪人つてなんだよ」

いや、なんといふか保健室にいそいでしょ。エイルつて……

「そもそも、常々言いたいと思つていたんだが。そろそろそのエイルをダーリンと言つのを止める。少なくともこの企画では絶対に駄目だ。却下！」

激しく言つロイズに、あたしは眉をひそめた。

「なんでよ」

「教師が生徒をダーリンなんて言つたら倫理的に問題だ！」
エイル当人はそ知らぬ顔だ。

あたしは更に笑いを深めた。

「判つた。ダーリンは駄目なのね」

「そう」

「ふふふ。じゃあロイズ、ハーネつて呼んであげる」

ほおら嫌がれ。

あたしはロイズの机の近くまでこつこつと足音をさせて歩み、エリファのムチの先端でロイズの顎先をくんつと持ち上げた。

「ね、ハーネ？」

「あ、あ、う、う」

「却下ー！」

ロイズからではなくエイルから物言いがつきました。

おや？

* * *

「そもそも、あんた達まで教師になつたら生徒がいないじゃないのよ」

魔女猫は年齢が高いのです。

一番年齢が低いのは、見た目だけ14歳程度のティラハール。その実年齢は300歳超えです。

もし授業中にアレに説教かました口には、あの口から炎を吐きそうだしヤダ。

「おまえが生徒でいいじゃないか

「……だから、生徒が少ないのよ。あたしが生徒だとして、アンニアはぎりぎり生徒？ 教師？ カス生徒でいいけど

あたしが指を折りつつ言つと、あたしの肩にふわりと何かが巻きついた。

「あたしは教師！ 音楽教師とか英語教師がいいわー、お色気たっぷりに教えてあげるつ。

ふふふ、Rの発音は舌をうまく使うのよお。もつと他の使い方も教えてあげようかしら、子犬ちゃん」

ふわふわと浮かんだエロ妖怪はそのまま生徒Aのロイズに焦点を合わせた様子。ロイズが完全にびびって腰を引かせた。

「あなたの標的はエイルじゃなかつた？」

あたしは一人の阿呆な様子を見ながら言つが、アンニーナはロイズの顔に豊満な胸を押し付けながら笑つた。

「堅物を飼いならすのは楽しいわよお。それに、そっちのは幼女趣味なんだもの。オトナの女の魅力が理解できないのよ

合唱。

「誰が幼女趣味だ」

冷ややかなエイルはあくまでも一人で個人勉強中。団体行動には向きません。

「ちょっと、ブランツ。助けてつ」

ロイズが泣きそうです。熊涙目。

さすがにちょっと可愛そうだよ、アンニーナ。
だがしかし、ロイズは現在無敵アイテム所持者だった。突然飛来したチビ獣形ティラハールが、その獅子の口をぱっかりとあけてアンニーナにかじりついたのだ。

「きやあああつ」

「ティラハール、そんなの食べたら駄目だつ。病気になる。ペッし
なさいつ」

「あたしは病原菌かつ！」

「そもそも、この話が学園である必要があるのか？」

エイルはあくまでも冷ややかに言う。

「……ない、かな」

「とりあえず、この魔法理論についての見解をお聞かせ願おうか、
ブランマージュ先生」

くいっと顎で呼ばれ、あたしは引きつった。

「ま、まほー、つろん？」

「それくらいは判るのだろうな、ブランマージュ先生？」

エイルの瞳が楽しそうに揺らめく。

あたしは両手を突き出すようにして「生徒でいいです！ 生徒でっ

と役柄をかることにした。駄目だ。教師っていう役柄は面白そうだけれど、人に教えるのは難しい。

「では私が教師で構わないな」

ふつと皮肉に言うエイル。

つて、あんためちゃくちゃ楽しんでない？ この企画。

エイルは首筋のネクタイを緩めながら先ほど自分が読んでいた本をぱたりと閉ざした。

「ブランマージュ、魔法理論と魔導理論の違いについて答へなさい」

「え、えええ？」

エイルの口元が緩く口角をあげる。

「放課後個人講習。逃げるなよ」

突然首の裏、襟の辺りをつままれてあたしは「うなうつ」と鳴きながらじたばたと足を動かした。

「とりつく・おあ・とりい・い」と

うふううと謎の吐息を落としつつ、ぶらりとぶらさげた白猫相手ににんまりと笑ってみせる黒紫の巻き毛のアンニーナに、あたしは思い切り顔をしかめた。

「何してんの、アン？」

「いやあね、ハロウインに決まってるでしょ」

つて、いつもと同じ格好だから決まってるって言われても判る訳がない。しかも、レイリッシュのよう二角帽子をかぶつて黒いドレスを着ている訳でもないアンニーナときたら、一見すればただの娼館のねえちゃんに見える。

ふわふわの巻き毛 魔法でセットするのではなくて、いちいち自宅にいる色男下男にきつちりと巻かせるらしい に胸元を強調する真っ赤なドレス。サイドにはスリットが入り、絹の靴下やら生足かつてくらいのバリエーションのみ。

「どこのハロウイン仕様？」

「馬鹿ねえ。私は魔女なんだから、どんな格好していようと魔女なのよ。それに、あんたは観察眼が駄目ね。そんなんじゃあたしの男にはなれないわよ」

いや、なんであたしがあんたのオトコになんなきやいけないんだよ。

何故か胸を張るアンニーナは片手で自分の耳に下がるピアスを弾いてみせた。

……かぼちや。

金色のかぼちやのトザインのピアス。

言つとくけどね、そのピアスでハロウイーンって氣づくよしの男はあたしの周りには居ないと断言してやつてもいい。絶対に大雑把な口イズは氣づかないだろ？し、エイルなんて氣づいたところで無視するだろ？

「それに、今田のネイルはハロウイーンカラー」

「はいはい」

あたしはげんなりとしつつ、ぶらんつとぶらせられている現状がイヤでぶるりと身震にするようにして人の姿へと変化した。

途端にいつも居るんだかいないんだか判らないうちの蝙蝠が追従するかのように変化し、ぽわんつとあたしの背に張り付いた。

「あら、あんたの蝙蝠つてばまだ魔導師の顔じゃないの。あんたも好きねえ」

「いやいや、好きでその顔させてる訳じやないつてば」

何よりその話題は駄目だ。

魔術を紐解くだけなのだから、本来であれば大元の顔を忘れたところで問題が無い筈だといつのことかなんか微妙に違うのだ。違和感ぱりぱり。

もつとのほーんつとした、もしくはのペーんつとした顔だったと思ふんだけどね。色々いじくっていたら、のつぺらさんになってしまつたのでシユオンは相変わらずエイル仕様だ。

「あ、でもそれっていいわよね」

ふいにアンニーナはにんまりと唇をゆがませ、あたしの背後に張り付く似非エイル 三割増しアホ増量をじろじろと眺め、ぱちりと指を鳴らした。

「いやあん、似合つわ魔導師」

「何するんですかあつ」

シュオンがわたわたと慌てているが、あたしはべつにシュオンを自分から引き剥がし、ふむつとその姿をじつくと観察してしまつた。

はつきりこつて趣味がおかしいアンニーナにしては上出来の部類だらう。

エイル吸血鬼バージョン。

蝶ネクタイに真つ黒いマントといふいかにもわかりやすい感じの吸血鬼。

「つてか、考えてみればシュオンつともとむと蝙蝠じゃないの」「でもぼく血い吸い系じやないですしぃ」

そう、シュオンは蝙蝠だけれど血は吸わない。

フルーツを主な主食としているのだ。魔獣、もしくは使い魔としての自覚が足らん。気合で血ぐらこ吸つてみる。

「マスター、マスター、似合います？」

ばさばさとマントを羽のように広げてみせるシュオンに、あたしはいつもと同じようこ「はいはい」と適当に相槌を返してやつた。

途端にシュオンの顔　＝割り増し残念エイルが破顔する。

「おひ、なんかキシヨイ。

思い切り鳥肌がたつてしまつた。

あああ、早くコレの顔なんとかしないと。わつこつものことそのへんの村人△さんとかを見本にしちゃえばこいつな気がするけどね。

「ブラン、お菓子要らないからや、ちよつとコロ貸してよ。なんなら、うちの鷹貸してあげるから」

「あー、別にいいわよ。でも鷹つてちょっと怖いし、なんなら、うちの蝙蝠永久

「ひどいっ、ひどいですよつ。ぼくは身も心もマスターのものなのにつ。勝手にやりとりしないでくださいよおおお」

びゃんびゃんうるさい蝙蝠をアンーナに押し付け、あたしは「そかー、今日はハロウインだつけ」とにんまりと口元を緩めた。

魔女にとつてはやっぱりハロウインってのは特別なお祝いよね。何より、「悪戯されたくなればお菓子をよこせ!」なんて、なんて素敵なかフレーズ。勿論悪戯だつてやりたいし、お菓子だつて大歓迎だ。

あたしはとんつと床板を蹴つた。

勿論　　じついう時にからかう相手は決まつてこる。

* * *

「つーまーりーなーいーいー」

あたしはがつくりとうなだれた。

現在絶賛仕事中であるロイズ・ロックときたら、あたしが突然その背後に現れ、定番の台詞を口にした途端に菓子をひょいと出した。バスケットひとつ分。

「ほら。ちゃんと座つて食べる。飲み物は果実水がいいか?　紅茶

?　　

「……いや、んー……お菓子は嬉しいんだけどね」

じの反応がつまらんわー。

もっと嫌そうな顔したりさ、追い出すような素振りとかされたら面白このにさあ。じの準備万端待つてましたつていう感じはどうな

?

どつなのせい。

警備隊の隊舎内 ロイズは自分の執務用の机に向かって本日の報告書に一枚一枚目を通していったようで、苦笑しながらあたしの頭をなでた。

まったく、いつまでたってもチビプラン相手にしていのよつた態度つてちよつと腹立つ。

あんまり腹が立つものだから、あたしはぼふりと自分のサイズをチビサイズに切り替え、ロイズの膝に乗つかり嫌がらせ全開で菓子の包みを解き始めた。

「プラン、ちょっと仕事ができない

「しらない」

知るか、ボケ。

「職場なんだぞ、ここのは

「しーらーなーいー」

あたしは言いながら口の中にボンボンを放り込んだ。

熊は苦笑をひとつ落とすと、あたしの体をちょっとだけずらして自分の仕事をやりやすいようにと画策してみるが、当然そんなの許す訳がない。あたしは更に邪魔をしてやろうと、もうひとつ菓子の包みを解いてロイズに差し出した。

「はい、ビーべー」

ほら、どうだ。

こつなつたらとことん邪魔してくれる。

悪い魔女プランマージュを舐めるでないわ。こじり嫌がらせのHキスパートですよ。

当初の　トリック・オア・トリー卜などなんのや。菓子も悪戯もあたしの本領でござりますよ。

親指と人差し指でつまんだボンボンをすくいと口に押し付けてやると、実は甘いものが苦手なロイズが渋々といつ様子で口を開いた。

途端に、あたしはむきゅうと口の中にぽんぽんを詰め込んだ。ちょいと指先舐められたけど構うものか。相手の嫌がることは大好物です！

「くわい、職場で鼻血がでたりじててくれる
ぼそりとつぶやく熊の言葉に、あたしは心の中で高らかに勝利宣言をしていた。

くはせせせせ、ぎまあみるおお。

「あのな、ブラン」

「んー？」

なによ？

機嫌を良くしたあたしがロイズを見上げると、ロイズはふいに眉間に皺を寄せた。

「当たり前でしょ」

「じゃあ、もしかしてエイルのところとかも……いくつもつか？」
なんだか口調が固いが、あたしは顔をしかめた。

「もう行つた」

「行つたのか？」

「それ以上聞かないでくんない？　っこ、あいつってば腹たつうううう」

あたしはきのう怒りながら口の中に菓子を放り込んだ。

トリック・オア・トリック。

あたしが言つより先にあのH口魔導體ときたらやつをH口にした。

トリック・オア・トリック。

本当に本当にほんつとうひ、あのオトロヒセタリヒの斜め上の思考回路をじくせつしてくれてむかつく。

絶対にいつかおやふんと言わせてやる。

「めんなさい」フランマージュ様つて言わせてやるんだから。

覚えてなさこよつ。

「フラン、えつと、エイルと何が

「つーるーせーいにい。御菓子がまづくなる」

あたしは真っ赤になりつつ、ぱりぱりと菓子の包装紙を破り捨てた。

ファティナ&ルティア対談。

企画！ ルティアとファティナを会わせてみた。

二人の名前は実に似ている。そして、一人の性格は正反対。といふことで、お二人を会わせてみることにする。

【あたしの魔法使い。】ルティア。
【陽だまりのキミ】ファティナ。

「こんにちは、ファティナと申します。現在十六歳、夫と義息二人がおります」

蜂蜜色のゆるいウェーブのかかる髪に翡翠の眼差しでほやんつと微笑むのがファティナ。対して、淡いブラウンの髪に同色の瞳の女性はヘッドドレスに侍女服、いわゆるメイドさんのような姿のルティア。

「ルティアですわー、二十四歳独身。婚約者アリですう」

「二人はにこにこと言いながら小首をかしげた。

「名前は似てますけど、外見は随分違いますわねえ。年齢もちがいますしー」

外見ではなく、格好が違うが正解。

「ですわね。ルティアさんは婚約者の方とは仲が宜しいの？」

「ルティとエディ様は相思相愛のらぶらぶですわよお」

あつさりと答えたが、ルティアの婚約者のエルディバルトは少し離れた場所で「ちょっと待て！」と声を荒げているが、完全無視。

「よろしいですわね」

ちょっと寂しそうなファティナは瞳をそっと伏せた。

「ファティナさんは旦那様と仲良しでいらっしゃる？」

「旦那様と仲良し……かはちょっと判りません。ですが、義息とは
とっても仲良しです」

気を取り直すようにファティナが元気に言ひつと、ルティアは小首を
かしげた。

「旦那様との間にお子さんの予定は？」

「ふふ、今度旦那様に授けていただけまわつ」

「まつ、素晴らしいですね」

ルティアは嬉しそうに言い、ファティナの手をぎゅっと握った。

「産み分けの方法とか、私知りますわよー。知ってるだけでいま
のところ役立たずですけどお

「産み分け？あの、子供を産み分けるのですか？」

ファティナの常識の中では未だコウノトリ説が有力です。男女が
同衾すると子供ができるという説はどうやら嘘だと学びました。何
故なら義息と同衾しても子供ができないので、これは嘘なのです。

「そうですね、女性の方が上のほうが

「女性が、うえ？」

ファティナはきょとんと瞳をまたたきました。

「それに一回田と二回田では、一回田の方が新鮮ですから、断然一
回田のほうが良いと思いますのよ。ですから、一回田は、口でし
てさしあげると直しこですわあ　ヒディ様は上のほうも下の

……

「え、あの……？」

「でも一回田の方が濃厚つていう説も捨てがたいのですわあ。ファ
ティさんはどう思いましてえ？」

「あ、あの……？」

……

ルティアの背後からエルディバルトの手が伸び、その口をがしり

とふさぎ、ファティナの背後からは彼女の義息であるヴァルファムがぐいっと力任せにファティナを抱き込んだ。

「よけいなことを吹き込むな！」

「バカなことを言つてるんじゃない！」

ルティア・ファティナ対談失敗……

このまま放置していたらファティナが許容量一杯で寝込む畏れアリ。ファティナには当分今まで通り無垢　　といつおばかさんでいてもらいたいと思います。

【魔法使い】三人娘対談。

「【あたしの魔法使い。】の謎を暴露、対談でーすー。
マイク片手に元気なルティアさん。

あたしはうんざりとしながら彼女を見て、

「謎って、イロイロありそうですがけど暴露しちゃ駄目だしょ」

「そうなのですよー、この話つてAさんは知ってるけどBさんは知らない。AとBさんは知ってるけどCさんは知らないってハナシ実は多いのです」

「半分以上誤解と勘違いでできますわよね?」

「そうなのですわー！私はエティ様が××する時×××な癖を知つてますけれど、皆さんは知りませんものねつ」

「知りなくていいですっ！」

「え、あの、それは……」

「マコーはまだ十四歳なんですよ、へんなこと教えないで下さい

つ

ルティアさんつつ。

どうして何でもかんでも下ネタなんですか。

誰もそんなエルディバルトさんの癖なんて知りたくありません。

「じゃあ、各自これだけはお墓にもつて行こうとこつ秘密暴露大会

！」

「全然墓までもつていってないじゃないですかつ」

「もお、リドリーさんつてば頑固

頑固とかじやないです。

それに、墓まで持つて行きたい秘密なんて……初キス話はすでにアマリージュにはばれていたし、きっとルティアさんにもばれている

に違いない。

「じゃあ、公の秘密をばらしまーす！」

「ちょっと、ルティア様っ」

アマリー・ジエが慌てたが、あたしはその話には俄然興味がわいてしまった。

「公は、十六歳で八歳児に初恋です」

……それは全然ちつとも謎でも秘密でもないです。

「八歳児に臆面もなく口口口口口キスをしましたあ」

だから、それはもう秘密でもなんでもないんですね。

「よく考えれば幼女趣味ですよね^{ロコロコ}」

「よく考えなくても変態ですわよー」

「二人とも元気いいですね。」

「公はもともと色々と制約のある方ですから、遠く離れたりドリーさんにお会いにいけませんでしたのよー」

「基本的に竜峰から長く離れられませんからね」

どんな人間だ。それともお勤めの関係で？

「それを寂しく思った公がナニをしたと思こますかー」

ルティアはまるで本当にナイショ話をする様子でふふふっと口元を緩めた。

なんだかどつてもイヤな予感を覚えたあたしは引きつり、アマリー・ジエは首をかしげた。

「水鏡で時折リドリーの様子は見ていらつしゃいましたわ

なにそれ？ は？

「あまいですう。マリー、公は変態なのですよつ
ちよつ、なにをつ。

「公の屋敷にはリドリーさんの部屋があります！『愛の間』と呼ばれていてその中には公いがい誰も入ることはできませんが、本日はこつそりと内部を教えてさしあげます。」

ナーニーその腐った名称！ 気色悪い。絶対あの男趣味おかしいって。

母があたしに用意した部屋は、お花畠のよひに女チックな部屋でした。

ええ……

そして、あのバカが用意した「^{ハニ}愛の間」は、

あたしの写真とあたしの絵姿とあたしの使つた教科書やあたしの昔の洋服、あたしの……

「なんでこんなものまで！」

見覚えのあるリボンとかつ。

あたしが町の日曜学校で意地悪されて無くしたと思っていた数々の学用品！ 靴つて、えつ、どうしてこんなものまで？

あたしはその商品の数々に卒倒しそうになつた。

「なんといつか、下着はもう完全に駄目ですわよね

「見境いないくらい変態ですからー！」

「いやあああああつ」

つて、なんで？

なんでこれ、ぢづして、えええ？

「変態とか言つ前に犯罪ですつ！」

ああああ、もおヤだ。本当に駄目人間つ。

これが神官長とか絶対にありえない。こんな最大の矛盾を許していいのか！？

【魔法使い】三人娘対談。（後書き）

一人ぼっち寂しい変態…

陽だまりΣ&Πネタ（前書き）

実は以前陽だまりの宣伝を他の作品の web 拍手の中に入れてました
そこから三つ。あと、他に + ……ラストはふちいやんな表示ありなので、駄目な人は見ない！

陽だまりのキミ & ハネタ

「はじめまして、私はファティナと申します。

『宣伝の為に御邪魔させていただきました』

【ハニ】は、この通りと微笑むのは翡翠の瞳と緩いウェーヴのかかる金髪の少女。歳十三歳のファティナ。たまさ。が書いている【陽だまりのキミ】のヒロインです。

「【陽だまりのキミ】は私と田那様との愛を綴つた恋愛物語です」「嘘をついてはいけません」

冷ややかな言葉を発する男の姿に、ファティナはふわりと微笑んだ。夫に良く似た面差し。色素の薄い金髪に冷たい碧玉の瞳のヴァルファムは、ファティナの継子です。

「ヴァルファム様もいらしたの？」

「貴女に宣伝などさせてはどうなるか判りませんからね。案の定、そんな見え透いた嘘をおつきになる」

「嘘なんて」

「【陽だまりのキミ】は私がハツモ年下の義母であるあなたを育てる涙ぐましい育児の物語です」

「……ヴァルファム様」

「なんですか、義母うえ」

「言つて切なくなりませんか？」

「」

「それに私は義母ですよ？　育てるといえば、私がヴァルファム様を育てるのが筋というものではありませんか」

「ハツモ年下の小娘に育てられる覚えはありませんー。そもそも、あなたときたりつ」

陽だまりのキミはハツモの年齢差の義母と継子の日常を書いた物語です。年下の義母に振り回されるヴァルファムの、もしかして禁

断の恋？かもしだれませんが、まあ、基本的には育児かもしだれません。

* * *

自分が何を見ているのか、メアリは正直理解できなかつた。

階下と呼ばれる場所がある。

邸宅・屋敷の半地下を示す言葉で、一般的には厨房や洗濯場、リネン室、使用人の為の部屋がある場所を示し、主筋の人間がそこを訪れることは滅多にない。そこを取り仕切るのは女主ではなく、執事の仕事であるからだ。

だから、その階下の一室で執事を口にすることは何の問題も無い。あるとすれば、その執事の口には細身の葉巻タバコが咥えられ軽く手を添えて火をつけているところの現状だ。

「煙草 吸うんですね」

「すみませんが、嫌いでしたら他をあたつて下さい」

クレオールはほんの少しだけ眉間に皺を刻み、中指と人差し指に煙草を挟むようにして言った。

メアリは逡巡したが、その珍しい光景に思わず退出ではなく留まることを選んでしまつた。

自分はただ、菓子鉢を取りに来ただけなのだが。

「意外です」

「何がでしょ、う」

「煙草ですよ、勿論」

「」

「ファティナ様はご存知……ではないのでしょうか？」

半眼で睨まれ、思わず言葉が小さくなる。

しかし、クレオールは深く煙草を吸い込み、ゆっくりと紫煙をくゆらせながら壁にもたれた。

「問題でも？」

「ありませんけれど。でも、くすりと笑みがこぼれてしまった。

「普段のクレオールさんからはちつとも想像できませんから、時々、ほんの時々 吸うだけですよ。精神安定剤のようなものです」

嘆息するように言われ、ふとメアリは好奇心にかられてしまった。「胃痛にもきます？」

「

「いえ、あの……最近ちょっと、胃が痛くて、ですね」

思わず視線を逸らせば、クレオールは煙草を灰皿に押し付け、自らの上着の内側から小さなピルケースを取り出し、中からいくつかの丸薬を取り出して顎先でメアリに手を出すよ^ウうこと示した。

「胃薬です」

「ありがとうございます」

そう告げながら、メアリは手の中の丸薬をしげしげと見つめてしまった。

クレオールさんもストレスがたまるのね。

そしておそらく、二人の胃痛の種は同じものだうと容易く推察できた。

「お互い苦労しますね」

愛想笑いで言つた途端、クレオールは半眼を伏せてメアリを睨みつけた。

……もう少し打ち解けたいものだ。

メアリは切実にやつ思つのだつた。

* * *

たまさ。が毎週水曜日に更新を（予定）している【陽だまりのキ】は、ハツ年下の義母とハツ年上の継子の物語です。

「義母さま……」

「駄目ですっ、私とあなたは親子なのですよ」

「血だつて繋がつていない。何の障害があるとこりうんだ」

「お辞めになつて、私は日那さまをつ、ああつ」

「という物語ではあつません。

「馬は危ないと何度も言えばいいんですか！　あなたのような体力の無い人間が乗馬などとあつかましい！」

「いいじやないですかっ、ヴァルファーム様の意地悪つ」

「怪我をしてからでは遅いんですよ、ちょっとそこに座りなさい…」

「怒りんぼう。男のヒステリー……」

「聞こえますからね！　今日はおやつ抜きです！」

という　継子であるヴァルファームが義母であるフアナを愈てる涙ぐましい育児日記です。

今のトロロは……まあ、うん？

* * *

「添い寝は平氣ですか？」
「親子ですか？」
「キスは平氣ですか？」
「親子ですか？」

「御風呂は平氣ですか？」

「 どうでしょ?」

翡翠の瞳の少女は小首をかしげてしばらく考え込みました。

どうやら回答が思いつかないようです。

「ヴァルファーム様に聞いてみますね」

についりと微笑んだ少女でしたが、彼女の八つ年上の義息に小首をかしげて尋ねてみました。

「ヴァルファーム様、御風呂は一緒に入れます?」

「親子ですか?」

「……でもちょっと駄目な気がするのですけど」

「義母うえも子供の頃はこの両親と御風呂に入ったりしたでしょう?」

「しなかつたと思います」

それには子供ではないと思います。

「私はしましたよ。義母うえのこの家庭ではそつしなかつただけで、うちでは普通にありました」

絶対に嘘だと思われます。

「普通は一緒に入ったりするものでしょうか?」

「ええ普通は」

だから嘘ですよね。

「恥ずかしい気がしますけど」

「何が恥ずかしいんですか?」

恥ずかしいでしょう。

「……だって」

「 義母うえにとつて私は恥ずかしい存在なのでしょうか? とても悲しいですね」

「そんなこと思つておりません!」

「では何も恥ずかしいことはありませんね」

そんな義理親子の一人を、執事クレオールが生あつたかい眼差しで見つめています。

ほややんなファティナと最近ちょっと「親子」の上に胡坐をかきだした息子の「下らない日常。それが【陽だまりのキミ】です。

毎週水曜日更新【予定】で連載中。

以下は暑中見舞いでweb拍手にして掲載されていたもので、ちょっとぶちいやんな表現があります。

そういうものがダメダメ！な方は下に行かずにおとなしくバッテンクリックが心の平穏の為だと思われます。

白い肌にシーツをまとわらせ、胸元でそれを押さえ込んだ指先。見上げてくる瞳には戸惑いが溢れ、ぬれた唇は誘うように薄く開いていた。

「ヴァルファム……さま？」

問い合わせが、甘い。

いつもは結い上げられた髪がピンや飾りを全て取り払われ、その蜂蜜色の豊かな髪が白い肌の上でさらりと揺れる。

触れとそれは命じているのだ。

きしりと片膝を寝台の上に乗せ、伸ばした指先がみつともなく震えやしないかと口元に笑みが浮かんだ。

「義母うえ……」

伸ばした手に白手があり、直に触れたい欲求にもどかしげにもう片方の手で白手を抜き去りつつとしても、みつともなく白手の上を指が滑る。

緊張と、期待に胸が震えていた。

咄嗟に自分の指に歯を果てて白手に緩みをつくり、今度こそ反対の手で一息に白手を抜き去った。

そのままの勢いに任せ、彼女の細い首筋にふれ、うなじの辺りをなで上げた。

ファティナの瞳が不安にゆれ、じくじと喉が上下する。

わずかに見えるおびえが、ぞくぞくと体内に新たな熱を呼び覚ます。喉が無意識に動き、いつの間にか溜まつた唾液をじくじと飲み干した。

「何を、なさいます」

「黙つて」

逃げないで……

囁きがかすれ、そのままの勢いで唇を押し当てる。

華奢な体をのけぞらせ、その唇をむさぼる。

唾液が、甘い。進入した舌先が相手の舌を捕らえようと奥へ奥へと侵略をしかけても、おびえた相手は必死に逃れるように身をよじり、舌さえ萎縮するように奥へと引き込む。

更に力を込めて抱きしめ、意地悪くあいた手でファティナの鼻をつまんだ。

口付けしながら酸素をむさぼるなどといふことができない小娘は、すぐに苦しさに身を震わせて体をじわばらせた。

力が抜けそうになつたところでもふさこだ鼻を自由にしてやれば、慌てたように身じろぎし、その舌が動く。途端に自らの舌を絡ませて引き出し吸い上げる。

自分の口腔にファティナの舌を招きいれ、ついで彼女の唾液を吸い上げた。腕の中の少女の体温があがる。もつともつと反応を引き出したくて、わざとぴちゃりと音をさせた。

小さな吐息が耳に入り込み、羞恥に身もだえする義母に自身が強く強い欲望を募らせるのを感じた。

「こうすれば良かつたのだ。

笑い顔を護る?

泣いた顔だつて愛しいのだから……もとから、いつもして閉じ込めてしまえばよかつた。

そのまま肩を押して寝台の上に倒せば、ファティナの潤んだ眼差しが不安ばかりをにじませて自分を見上げ、ゆるく首を振った。

「なにをなさいます」

「あなたはそつやつて知らぬふりをして、私を苦しめたいだけなのでしょう？」

首にかかるアスコットタイをしゅるりと引き抜いて、放り出す。

「意地悪で酷い女だ」

「ヴァルファ……」

「無知のフリで私を惑わし、私が慌てふためく様を冷静に観察していたのでしよう？」

意地悪なことを言つているのは自分だ。

言葉を操りながら、どんどんと自分で膨れ上がるのに笑みがこぼれる。

「悪い子には、しおきが必要でしょ」「シーツの下にはつきりと判る胸の膨らみ。その先端をそつとなぞるよつになぞりあげ、きゅっとその形と弾力とを楽しむ為に包み込む。自分の下で息を飲み込む翡翠のことおしい娘を前に　敗北の狼煙をあげよう。

「おはよウジゼロニモア」

「…………」

カーテンが引かれる音で目を覚まし、ヴァルファムは上半身を起こして前髪をかきあげた。

部屋には一人きり。いや、クレオールがいるが自分の隣に愛しい義母はない。

「ふ……ふふ、ふふふふふ」

夢オチ！

夢つー？

……許せんつ。

無意味な怒りに奇妙な含み笑いをする主を前に、クレオールは無表情で持ち込んだ湯桶に水差しの水を足し、温度の調整をしながら不気味な主の様子にそつと吐息を落とした。

なんだか判らないが、とりあえず気持ちが悪い。

* * *

夢オチ！！

石をなげてはいけませんよーつ。

共にして（陽だまり・イラスト）

「おかえりなやこませ」

庭先で犬と戯れている子供のよつたな貴女を抱き上げて腕の中に閉じ込める」とは「なんにも容疑に」となのに。

「今日は何をされたのですか？」

陽だまつの中が誰より似合つあなた。

「毎にセラファイレス兄さまとコールが来てくださいましたの」

あたたかで柔らかで清らかで何よりも愛しいあなた

「とても楽しかったですわ」

暗闇に閉じ込めて私の名だけを呼んで欲しい。

「あなたの義息はのけものですか？」

唇に触れて、あなたの血脉のありかをせぐり。

「のけものだなんて」

甘い責め苦の下で、吐息のうちに身を震わせて。

「ヴァルファーム様ときたら本当に時々幼い子供のよつですわね」

呆れる程の贅沢は夢想に留めて、せひつとたゆたう闇を深い場所に沈めて。

> . 1 1 5 4 9 8 | 1 3 7 0 <

唯一願うはあなたと共に居て欲しい

* * *

【陽だまつのキ】 ファティナとヴァルファムのイラストを頂きました。

描いて下さいましたのは、なんと「シャドウ・ガール」のふんにゃご様でいらっしゃいます。

ご自身の執筆もお忙しい中描いていただけたことに、わたくしは鼻血がでそうな程感激致しました。

小話は後付ですので、イラストのイメージと合わないかもしだれませんが……

純真無垢のファティナと、彼女を抱き上げる義息ヴァルファム。

このイラストを一目見てわたくしが思いましたのは、

「ヴァル！ すかした顔で何を考えてるんだー」 でした。

イラストの著作権はふんにゃご様にございますので、転載や無断使用はご遠慮下さいませ。

そしてふんにゃご様、ヴァルファムとファティナのイラスト、本当にありがとうございました。

陽だまり小話集（web拍手）

品の無いくしゃみが出た。

「ぶわくしゅん」……しかも二発。

無言でクレオールがハンカチと、そして胸元のポケットからピルケースを取り出して薬包紙に包まれたクスリを一つ差し出した。

「風邪は困ります。ファティナ様には近づかないで下さい」

「……わー、クレオールさんて優しいですよね」

ファティナ様にだけ。

思わず棒読みになつたメアリだったが、それでもありがたくクスリは受け取つておいた。

「優しくして欲しいんですか？」

不意に、クレオールが身を低くしてメアリの耳元に囁いた。

あまりのことに硬直し、かあっと体温が上がつたメアリだったが、しかしクレオールはすぐに身を引き離し、

「最近ドレスがきつそうですが、サイズ直しをしてさしあげましょうか？」

それは優しさじゃない！

赤面してしまつた自分が憎いメアリだった。

* * *

「やあ、甥っ子！」

やけに陽気な男とであつた場合、無言で通り過ぎるのが一番好ましい。だがしかし、相手はがしりとヴァルファムの肩口を掴んだ。

「なんだなんだ、つれないじゃないかー」

「生憎と私は暇人に付き合つてゐる暇は無い」

「そうかー、じゃあ仕方ない。ファティのどこにいつて可愛い義息のないことないことに吹き込んで来よーっと」

「つつ、おまえはっ」

「え、やだ？ しょうがないなー。じゃあ、有ること無ことにしておいてあげる。ぼくって優しいよねっ」

最近二人は仲良しです。

一方的に。

* * *

「ヴァルファーム様の大切な方を傷つけてはいけませんっ」

怖さを必死に押さえ込んで義息の将来の嫁（には絶対にならな
い）を守ろうとした奥様は素晴らしい。がんばりました。偉いです。
いくらでも褒めて差し上げたい。

けれどメアリは勿論内心で突つ込みを忘れていた。

「ヴァルファーム様の大切な方、それはあなたです……」

ですので本当におとなしくしていて下さい。もし自分を庇つてファ
ティナに何かあれば、自分があの陰険馬鹿息子にハつ裂きされたり
ヘタをすると屋敷から追い出されますから……

* * *

「よくやりました」

クレオールが懇懃な調子で言つ言葉に、メアリは一瞬判らなかつ

た。

それからじんわりと言葉が漫透し、ファティナを守ったことについて褒められたのだと理解し、思わず嬉しさがこみ上げてきた。

クレオールが人を褒めることが無い訳ではない。彼は執事という立場で階下を網羅していて、人の仕事をきちんと褒めることも知っている。だが、家庭教師である自分が褒められることは滅多に無い。

「まあ、当然ですが」

浮上した途端に落とされました。

そうですね！ 当然ですね！ ええそうですね。

最近ガラまで悪くなってきたメアリだった。

いふうたとえぱこんな物語（陽だまり）

十八という年齢で受爵されたものは騎士 一代限りの爵位は子に受け継がれるものではない。だがそれは、一つの戒めのように、一つの区切りのように胸に深く突き刺さり沈んだ。

「次は結婚市場だな」

ニヤリと口の端に笑みを浮かべる友人に冷たい一瞥をくれて、まだ馴染みの無い爵位の印である徽章に軽く触れて緩く首を振った。

「必要がない」

「独身主義つて訳にもいかないだろ」

「相手はもう、決めてある」

「はあ……また来たんですか」

アパートの管理人であるセレ未亡人が来客を告げに来たことに、メアリは嘆息した。

以前は住み込みで家庭教師をしていたのだが、今は街の中流層の区画にある女性専用のアパートに暮らしている。

このアパートはある慰謝料として某侯爵家に用意された正真正銘メアリ自身の邸宅だ。

元々は集合住宅ではなかつたが、無駄な部屋数と当然管理し続ける為には現金収入も必要ということで、女性専用のアパートとして改良し、今では大事な収入源となつているのだつた。

一階をオープンフロアにしてある為、一階だけは男性を入れるようになつていて、だがしかし、そういうルールを無視する少年はセレ未亡人が待つようにと指示していたのも無視した様子で、メアリの私室の扉に腕を掛けた。

「メアリ」

「エイリク様、頼みますから下でお待ち下さこませ。」
「これは男性禁止区画です」

「婚約者の元に行くのに何の遠慮が必要だ」

冷たく言い切られ、メアリは暗澹たる吐息を落とした。

「そのことは幾度も話しあつたではありませんか。そもそも、私とエイリク様の年齢差ときたら十一ですよ。いつたい私を幾つだと」「二十九だ」

遠慮のえの字もなく言い切られた。

勿論その通りなのが、女性に向かつて年齢を突きつけるのはどうだろう。メアリは口元を引きつらせ、無理矢理上階にあがつてきてしまった相手におろおろとしているセレ未亡人に微笑みかけ「ここはもういいですから」と引き上げさせた。

家主である自分がルールを破っているように見えるが、破つているのは無遠慮なこの子供だ。

メアリはとげとげしい口調で「出入り口に立たれると邪魔です。ここまで来て水をぶちかける気はありませんから、どうぞお入りになつたら?」とソファを示した。

「言つておきますけれど、あんまり不躾なまねばかりはなさるようでしたら、ファティナ様に告げ口しますからね」

釘を差すようにきつく言えば、途端にエイリクは顔を顰めた。
「義母さまに言つるのは卑怯だ」

そんな表情をされると昔と変わらぬ少年の様相を見せてくれる。

何より、この少年ときたら相変わらずファティナ様が大好きだ。
それがまた實に微笑ましい。

しかし、あの頃とは確實に違つことがある。

「本当にご兄弟でそつくりですこと」

メアリが呆れた口調で言えば、エイリクは眉をぴくりと反応させ、

冷たく彼女を睨んだ。

「兄やまとまくは違つ」

そう、姫信的に兄を慕つていた少年は、今や兄と冷たく舌戦を繰り広げられるまでに成長していた。それがよいことなのか悪いことなのか、メアリにも判りかねるが。

「それで、本田はいつたいどうこつたゞ用件ですか。礼服など召されて」

メアリはお茶の準備の為に席を立ち、反対にエイリクに座るよう示そうとしたが、エイリクはつかつかと長靴の音をさせて近づくと、メアリとは一歩離れた場で立ち止まった。

「陛下より騎士の爵位を受爵した

「ああ、それでその立派な身なりですね。おめでとうございます

メアリは瞳を細め、自らの体勢を整えると恭しく一礼し、心からの賛辞を口にした。

小生意気だった少年が、今は正装に身を固めて立っているのだから時流れとは恐ろしいものだ。

肩に房飾り、腕には徽章。

このよつに言えど失礼だが、馬子にも衣装　いや、元々彼は侯爵家の次男だ。正装すればその姿は実に惚れ惚れと世の女性を虜にするだろう。

社交界に出るようになれば注目を集めずにはいられないだらう。そう思えば、ほんの少し寂しい気がするが、それはきっと姉のよつな気持ちだらう。メアリは彼の成長をずっと見てきたのだから。

「メアリ、この日に決めていたんだ

「何をでしょうか？」

まるで弟が立派になつた様子を眺めるようにして、アリは微笑んだ。

「あなたを抱く」

冷水を浴びせるかの如くあまりにも率直すぎる台詞に、アリは思考を飛ばしかけ、ただ幾度も瞳を瞬かせて面前の少年を見た。そう、少年だ。

なんという悪い冗談だらうか。

「あの、エイリク様？」

「エイリクでいい。ぼくはあなたの夫になるのだから」

「 意思の疎通をご存知でいらっしゃいます？ 私にはそんなつもりは……」

「貴女がぼくに結婚を持ちかけたんだ」

びしりと突きつけられた言葉に、アリはとりあえずというように相手がこれ以上近づかないようになると自分の前に手を突きつけた。

「幾度もいいましたけれど、アレは 冗談です」

その昔、彼の家人によつて怪我を負つてしまつたアリが、償いをしたいといつ十一年の少年に「将来自分が独り身だつたらも嫁にして下さい」と確かに言った。言つたが、それはあくまでも冗談だ。それ以上のものではなかつた。

だといつのに、この少年ときたらそんな冗談を未だに本気にしているのか。

「悪いが冗談じゃない」

エイリクは冷たく言いながら、首にふんわりと巻かれているクラヴァットを片手で引き抜き、しゅるりと縄の音をさせた。

どきりとアリは心臓が音をさせるのを感じる。

「責任とか義務とかで結婚なんてするものではありませんでしょう

！」

「責任とか義務のつもりは無い。あれ以来ぼくはずつと貴女を見てきた」

「エイリク様、冷静に」

「ぼくは冷静だ」

そういうながら、上着のボタンを一つ一つはずしていく。その姿がやけに色っぽく見えて、メアリは思わず視線をそらした。

「あなたに時折り男の影があつた時、どれだけぼくが苦しんだとも」

「男つて……そんなものは」

「当然だ。いちいち排除したからな」

ばさりと言い切るその言葉に呆気に取られた。

「排除……」

「あの兄と血は確かにつながっているらしい」

そう鼻を鳴らす相手を咄嗟に見返すと、エイリクは上着をぱさりと椅子へと放り投げた。

「メアリ、愛している。結婚しよう」

手首を強く捕まれ、さらやかれる言葉にふつと　以前、この少年とそつくりな男にされた求婚がぶわりと自分の中によみがえった。

それは求婚とは名ばかりのもので、愛情など微塵もない惨めなもの。

メアリはぐつと腹部に鉛球がねじこまれたような気持ちになりながら、真摯な眼差しで自分を見下ろしている少年を見上げた　ああ、いつの間にこの少年は身長が伸びたのだ。出合った当初は見下していたのは自分だったというのに。

「……愛して」

る？

そんなんのは嘘だ。

そう言葉を続けようとしたのに、ふわりとメアリの唇がエイリクの薄い唇に触れられた。軽く、ただなぞるような口付け。

そのままそっと顔をあげて、瞳を真摯に合わせ、エイリクは囁いた。

「十八になるまではと我慢したんだ。貴女を 愛している。それを証明する為にできることなどないけれど、ぼくの持つ全てを貴女に差出し、貴女が望むならこの心臓すら取り出そう」

掴まれた手首をぐいと引かれ、メアリの手の平がエイリクの胸に触れた。

高い体温と、早鐘を打つ心音。

冷静だと言い切った相手の心音は、冷静さなど微塵も感じさせない鼓動を打つ。

よくよく見れば確かに緊迫した空気をはらんでいたエイリクだったが、やがてふと微笑を湛え「特別に、義母さまを義母さまと呼べるよ」に頼んであげるよ」茶田つゝ氣たつぱりの台詞を口にした。

途端、メアリは思わず笑い出してしまった。

「ファティナ様をお義母さまと呼ぶのは 楽しそうですね」「きっと楽しい。義兄さまは相当怒るだらう。ぼくが義母さまと呼ぶ」とすら怒るから

「私はきっと年若い貴方をたぶらかした悪い女だと言われるわ」「貴女は十一のぼくを確かにたぶらかしたんだ。ぼくの手を無遠慮に掴んで。でも、その後は、貴女をたぶらかす為にぼくが努力したことはちやんと判つているだろう?」

女史とは言わない。メアリでいいな。

今は無理だが、いつか貴女に男爵位を取り戻させる。

あれらをたぶらかすというのがどうも疑問だが。
メアリは肩に入っていた力を抜いた。

もう仕方ない、だつて……こんな求婚を断れる女などいないだろう。

難点があるとすれば、あの馬鹿男との少年の姿ときたら実によく似ていて けれど、けれど。
メアリは優しい眼差しを向けてくる相手に応えた。

「喜んで、お受けいたします」

今もファティナと共にいる暗褐色の髪の男がちらりとよぎったが、
それは淡い想いと共に溶けて消えうせた。

エイリクの吐息交じりの口付けが、全てを押し流す。

自分の中に甘酸っぱいような優しい気持ちが満ちた途端、ふいにエイリクは身を一旦沈めてぐいっとメアリを横抱きに抱き上げた。

「え、ええっ？」

すたすとそのまま隣室になつている寝所に行こうとする相手に
慌てるメアリだったが、エイリクは口の端に笑みを浮かべて肩をすくめた。

「ぼくは求婚しにきたのではなくて、抱きに来たんだと言つたら」「その顔が勝ち誇つているように見えて、メアリは恥ずかしさにエイリクの首に手を回して相手の丹精な横顔を見ながら、弱々しく抵抗の言葉を口にしたが、年若き求婚者はそれを微笑で封じた。

人生相談

「まずははじめに言いたい」

キリシュエータは口元を引きつけ、冷たい瞳で面前のマイクを睨みつけた。

「どうして私が他人の人生相談など聞かなければいけない！」

「まあ、殿下。色々と考察した結果、まともな人が居なかつたんですね」

どうぞうと馬でも抑えるように彼の副官であるティナンは苦笑した。

「なんでしたらぼくがしてもいいんですが

「……おまえは駄目だろ。人間的に欠陥がある」

びしりと付きつけられたティナンは壁になついた。

「人生相談を受けるならそれなりに人間として厚みがあるほうが多いのではないか？」

まだぶつぶつと言うキリシュエータ。

彼は若干往生際が悪い。

「じゃ、ぼくが！」

はいっと元気よく手をあげた明るい髪のルディエラを、キリシュエータは冷たい一瞥で押さえ込んだ。

「黙れにんじん。おまえは人間としての厚みも胸の厚みも無い」

「何わけの判らないこと言うんですかっ！」

「じゃ、じゃあ私が致しましょつか？」

おそるおそる手をあげたのは、ナショリー・ヘイワーズ中尉だった。

咄嗟にキリシュエータは「いや、胸の厚みがあればいい」という話で

は　いや、すまない。忘れてくれ」出でしまつた失言に詫びを入れ、溜息をついた。

「なんでしたらうちの長男を呼んで参りましょうか？」

ティナンがふと思ひ立ち言えば、ルディエラも嬉しそうに瞳をきらと輝かせる。

「クイン兄さまなら適任！」

「呼ぶな！　私はあいつが苦手なんだ　表面上にこやかに応対するくせに、絶対にあいつは私を敬っていない！　内心で激しくこき下ろしているに違いないんだ」

何か激しいトラウマでもありますです。

「いい。判つた。私が聞く」

「どうにか」と、キリシュエータ殿下の人生相談のコーナーです
「ティナン、私が人生につまづいているような説明はいらない。おまえ達は出て行け」

しつしとその場の人間を追い出し、もう幾度目かの深い溜息を吐き出してキリシュエータはぼしりと机を叩いた。

「相談者、前へ」

まるで謁見のように横柄さだった。

退場！

＊＊＊

「……それで私ですか」

某侯爵嫡男の子爵家に仕える執事、クレオールは慄懾に咳き、指定された席についた。

「クレオなら立派にお仕事をこなせますわよ」

「ありがとうございます。奥様」

「だつてクレオは優しくて何でも知っていて素敵ですもの」

心からの称賛の言葉にクレオールの目元が和む。

それを冷たい目で見つめながら、彼の主であるといひの「ヴァルファムは冷やかな調子で言った。

「私が引き受けてもいいのですがね」

「あら、ヴァルファム様は駄目ですね」

あつさりと彼の義母、ファティナは言った。

「だつてヴァルファム様は他人の悩みを聞きながら怒りそうなのですもの」

ぐうの音も出ない事実だった。

「……義母うえには何か悩みがあおりですか？」

「私の悩みは、義息がおこりんぼうで時々ちょっと困ります。ほんのちょっととのお散歩も駄目なんて酷いと思いませんか？ まるでわたくしがちいさな子供みたいに。それに最近ちょっと義息がナマイキです！ もう少しお義母さんを敬つたほうがいいとおもいますわっ」

ラスト辺りにあまりにも熱が入つてしまつたファティナに、ヴァルファムは口の端に笑みを浮かべて腕を組んだ。

「第一に、私を怒らせているのは義母うえの阿呆な行動や発言です。私は問題はありません。あなたを散歩に出すなどとんでもないです。どこの道端で野垂れるか判つたものではない。私がナマイキ？ そんなことはありませんよ。私は十分に義母うえを敬つていてる」

きつぱりと言い切るが、腕を組んで威圧的に義母を見下ろすその姿をみれば明らかに敬つてているというのは嘘くさい。

クレオールは額にそつと手を当てたい気持ちになりながら、

「人生相談に行つてきますので、お一人は仲良くしていて下さい」思わずそう口にしていたが、現在下らない舌戦を繰り広げている人が聞いてくれていたかはどうも不明だつた。

* * *

「どうぞ」

クレオールは穏やかな調子で来客を迎えた。

「はじめまして」

通された男は、クレオールと同年代かそれ以上に見えたが、実際は年下だつたりするロイズ・ロック。

警備隊の隊服に、腰には拳銃を吊り下げた相手は、親しげにクレオールに手を差し出したが、クレオールはそれを受けはせずにただ席を示した。

「それで、どのような相談ですか？」

「いや、初対面の貴方に言うようなことでもないんですが」

「じゃあお帰り下さい。」

内心で思つたところでそれを口にしたりはしない。クレオールの外面はいつも、いつでも爽やかです！

「うちの猫が……」

「猫が？」

「時々喋るんじゃないとか……実は中身が魔女じゃないかとか、いや判つてるんですよ。ただの希望とか妄想だつていうのは、判つてるんだが」

「

クレオールはしばらぐじつとロイズ・ロックが一人でわたわたとしているのを見ていたが、やがて胸のポケットからピルケースを取り出し、中身を幾つか取り出して二つ二つと相手の手に落とし込んだ。

「過労にはお気をつけ下さー」

「いや、あの……」

「では次の人！」

* * *

「うわー」

クレオールは突然自分の面前に現れた真っ白い猫に声をあげ、ついでその猫が女性の姿に変化したことに胸元に手を当てて動搖を鎮めた。

「その猫耳は……オプションですか？」

「悪かったわね！ 気を抜くと出つ放しなのよ。あたしだって好きで猫耳つけてるわけじゃないのよ！」

ばさりと自らの髪を後ろに跳ね上げ、魔女ブランマージュは足を組んで空中に座るようにして浮いた。

「あたしはブランマージュ、悪い魔女よ」

「悪い魔女？ 何か人を呪い殺したり毒薬を作つたりするんですか？」

素で問い合わせたクレオールだが、相手は機嫌を損ねたのか顔をしかめた。

「なんで呪い殺したりすんのよ？ 魔女は非力な人間を守るのよ？」

「毒薬？ そんなもの作つて何か楽しいの？」

「じゃあ何してるんですか？」

問い合わせようかと思ったが、懸命なるクレオールは止めておいた。

「で、あなたはどうしてここに？」

穏やかに問い合わせると、途端に猫耳が伏せた。

「あたしの中に猫がいるのよ」

「……いや、中といわざ外にも出ていらっしゃるよ」ですが

「つるさいー！」の猫耳と尻尾のことまじまじときなさいよつ

がうつと噛み付き、けれどすぐにブランマージュは肩を落とした。

「とにかく。あたしの中に猫がいるの。それで分離しなくちゃいけない訳なんだけど！ やりかたが難しいのよつ」

失敗したら色々危なそうだし。

と切々と語られたところで、執事であるクレオールといえど、魔女の生態などわからない。

「魔女の研究者とかに助力を仰いでみては？」

「それ、もうとっくにした」

「役に立ちませんでしたか？」

「現在進行形で研究対象になってるけど……最近怖いのは、体内で猫の体を再構築して体外に取り出す方法とやらを考え付いたみたいなんだけど、うつかりしてると実践しようとあるのよ」

あの野郎つ。と拳を握り締めるブランマージュに、クレオールは「何か問題ですか？」と問い合わせた。

「問題は大ありよつ！ ようはあたしが妊娠出産してみればいいってこいつのよつ。

信じられる？ 魔女なのよ、あたし？ しかも、妊娠出産つて、一人でできるもんじゃないでしょつ」

「はあ……」

「あのぼけなすの子供なんて生みたいものがあつ！ 悪魔類鬼畜曰なのよつ。てか、あのボケは猫の子でいいのか自分の子がつ」

なんだかやたらややこしい話になり、意味がつかめず困惑したク

レオールの前で部屋の扉が無遠慮に開き、黒髪の青年が顔を出した。

「プラン、こんなところで油を売るな。研究時間が減る」

「今日は休みって言つたでしょーがっ」

言いながら、突然魔女は白い猫へと変化した。

途端に青年の黒灰の瞳が陰り、口元に皮肉な笑みを刻みつける。

「やつやつてこいつまでも猫の姿で逃げていられると思つ程愚かではあるまいに」

「さすがに猫は襲えないもんねー」

「人を変態扱いするな」

猫をつまみあげてさつさと退場する相手を見送り、クレオールは無意識に自分のポケットを撫でた。

なんだろう、煙草吸いたい……

* * *

「あの、いいですか？」

そつと【人生相談】の扉をたたいた少女の姿に、クレオールは表情を改めた。

どうでもいいです。

と内心では思っているが、とりあえず仕事であれば完璧にこなす自信はある。金銭の発生する仕事とは思えないが、少なくとも最後には彼の女主の労いの一つの言葉くらいは受け取ることができるだろ？。

クレオール、時々ちょっと安い男。

「どうぞ」

「はじめまして、リドリー・ナフサーと申します」

ぺこりと頭をさげた相手は十代の後半辺りと思われる「そのへんにいそうな庶民」的な雰囲気をかもしまくった少女だ。

リドリーは示された椅子に座り、じつ口を開こうかと思案している様子がほのぼのしい。クレオールは先ほどまでの疲れを飛ばし、「何か相談ごとがあるのですか?」

と、やんわりと促した。

「相談といつか　あの……」

リドリーは視線をわざとあわせ、けれど意を決するようにやつと口を開いた。

「好きな人が、いるんです」

思わずクレオール自身照れてしまいそうになつた。

リドリーは膝の上においた手をもそもそと組み合せたりつまんだりしながら「好きな人がいるんですけど」と続ける。

なんか可愛い　クレオールが笑いたいような気持ちに浸つていると、彼女は言つた。

「変態なんです」

「……」

「相手が変態なんです。で、相談といつのはですね。明らかに頭のおかしい変態を好きといつのはあたしも変態なんじゃないかという大きな問題に直面してしまつたのです!」

あたしは変態でしょうか?

と、半泣きの顔で訴えられてしまつたクレオールは鎮痛な気持ちになり、一瞬言葉を詰ませた。

「変態といつにも種類があると思いますし……もしかしたら、貴

女が思う程相手の方は変態ではないかもしれませんよ？ 思い込み
じゃないですか？」

それを言ひならクレオールのもう一人の主、ヴァルファムも変態
と言えなくも無い。

だが、ヴァルファムを好きだから自分も変態という方程式は成り立
ちそうには無い。

思ひのままに告げれば、けれどリドリー・ナフサートは少しばか
り納得仕切れない様子で眉根を潛めた。

「せうでしょうか？」

「せうですよ」

「……変態じやないのかな？」

「せうですよ。きっとあなたの強い思い込みです」

リドリーは益々眉を潜めてぶつぶつと口の中で繰り返したが、や
がて息をついて「そうかもしませんね」と無理やり納得した様子
で立ち上がり、ペニリと頭をさげた。

「ありがとうございました」

「いえ。その相手の方とどうぞお幸せに」

クレオールが見送ると、リドリーは更に眉間に皺を寄せまくって
いたが、そのまま退出した。

* * *

がんがんと扉がたたかれ、入室を促すとひょこつと顔を出したの
は黒髪の少女だった。

耳の左右で三つ編みを編み、それをぐるりと後ろに引っ張つて結わ
えてある。

灰黒の透明感のある瞳は光の角度で透明な青灰にも見える。

恐ろしく綺麗になりそうな少女だが、生憎とまだ十一・二といつ年

齡だろう。未だ幼さばかりが目立つ。

「ちょっと聞いてくれる?」

と、少女は言いながら断りもえずにさっそく席についた。

「あたしはファウリー・メイ 未来の大召喚魔導師よ」
魔女だと魔導師だと……クレオールはそっと吐息を落とした
ものの、相手に先を促した。

「何か相談が?」

「相談がなければこんな場所にはいないわよ」

高飛車な物言いにクレオールはびきりと眉間に一瞬皺を刻み込んだ。

小生意気な子供は大の苦手だ。

やはり子供は素直で愛らしいのが一番。
彼の女主のよつこ。

世界は女主を中心に巡っているクレオールは一生独身だろう、おそらく。

「隣のレイシエンをぎやふんといわせたいんだけど、いかんせん十歳も年齢が違うものだからなかなかうまくいかないの。何かいい方法はない?」

しかし相手が真剣な様子で可愛らしいことをいうものだから、クレオールは苦笑を浮かべた。

「そういうことは建設的ではありませんよ。もっと人生を楽しむなければ」

「あたしだってね、いつまでもレイシエンにかかるらつてなんかいられないのよ。なんといってもあたしは未来の大召喚魔導師なんだから。でもレイシエンってばあたしが嫌がってるのに何にでも首を

突っ込むんだもん。」これは一つぎやふんつて言わせてもらうあたしのことには出しありたいの！」

ぐぐっと拳を握り締めるその様子は、微笑ましいといえなくも無い。

「少し距離をとつてみては？」

「できればそうしておきよ！　レイションは隣に住んでるし、レイションの職場は学園の隣だし、毎日毎日あたしの髪を結い上げるしつ。口やかましいし、すぐぱぱにチクるし」

口にすればするほど憎しみがつのるのか、ぐぐっとファウリーはその拳をふるふると震わせ、声を高くした。

「あたしは忙しいの。召喚士としての勉強だつてあるし……それに」ふつとファウリーは声を潜めた。

「……人を探しているの」

「人？」

落とされた声音の響きに、クレオールが問いかけるとファウリーは戸惑うようにその瞳を揺らした。

「あたしと同じ、黒髪に黒い瞳の人。一度だけ会つたの。あたしの国にはこういった色彩が無いから、できればもう一度……会いたい」

切なそうな言い方に、クレオールはファウリーの瞳に呟わせるよう身を沈めた。

「願つて叶えられないことなどありませんよ。貴女はまだ若い。何事もゆつくりとでいいのです。でも、他人に向けるマイナスの感情はあなたにとって良いものではありません。どうぞ、ぎやふんとさせるなどといわずに健やかに日々をお過ごしなさい。他人を妬んだり、嫌つたりなどといつ心にまみれて日々を無駄に過ごすなんてもつたいのことです」

穏やかに諭す言葉に、ファウリーはその透明な眼差しでじつとクレ

オールを見つめ、やがて溜息を吐き出した。

「大人っすぐ」やつこつキレイゴトを言ひのよね」

「

子供なんて嫌いだ。

クレオールは思わず胸元でぐっと拳を握り締め、引きつった微笑を浮かべながら皿らの女主を思い浮かべて自身の平穏を求めた。

* * *

「すみません、よろしいでしょつか？」

控えめなノックと共に入室したのは、色素の薄い青銀かと思わせる金髪の持ち主。長い髪の一筋を後ろに結わえた騎士姿の青年は、物事も柔らかに一礼した。

騎士団所属のどいかの誰かとは違つ穢やかな空氣の持ち主は、クレオールに一つうなずきかけるようにして名乗つた。

「ティナンと申します。王宮騎士、第三騎士団所属の現在は騎士団長として第二王子殿下キリシュエータ様の副官として勤めております」

國が違うと物腰も違う。

クレオールは内心でヴァルファムに爪の垢を煎じて飲ませてしまいたい気持ちになつた。後で実際に爪の垢をいただき、こつそりヴァルファムの茶に入れてしまおうか。

時々普通にこんなことも考へてゐるクレオールだった。

「それで、どのようなご相談でしょうか」

氣をよくしたクレオールがやんわりとうながすと相手は躊躇する

よつに一皿開きかけた口を開き、顔を運らせる。

その様子に、クレオールは安心せしむるよつに言葉を重ねた。

「『安心下を』。受けた相談をよそにもらすな」とはあつませんか
いり

守秘義務とかではなくて、まったく興味ありませんから。

「そうですか」

ティナンは小さく確認するよつに言葉にして、じへつと喉を上げて
せて視線をあげた。

「イモウドが可愛すぎるのです」

「ちは奥様が可愛いですよ。

最近ちよつと大人びてしまつて實に寂しい限りです。

「もお本当に可愛くて。お兄ちゃんは毎日心配なんです。世の中に
は悪い男が山とこゐとこゝのと、あの子ときたら男ばかりのとこ
で生活しているんです。もしあの子に何かあつたらと悪いとお兄ち
やんは気が気じやありません」

「ああ、兄妹愛はとても素晴らしいですね」

「そつなんです。これは兄妹愛なんです。純粹な だところに、
殿下ときたらぼくの思いを邪推するんです。まったく、『自身の心
が汚れているからとこつてぼくの心まで汚れてくるよつに言つのは
間違いです。そう思いませんか?』

「やつですね」

とこづか、その殿下とやらはこの男性の主ではあるまいか。
自分の主を悪く言つのは良くない。

普段からヴァルファムに対しては心の中で色々と思つてはいた
りするが、クレオールは外見上、表面上につでも完璧な執事です。

「そう、そうですよね？　ぼくはいつだつて純粋にルティエラのことを思つてゐるのです。誰かに虐められてやいないか、誰かに泣かされてやいないかと」

実際問題毎日虐めているのも、泣かせているのもティナンであるが、クレオールは勿論そんなことは感知していません。

「ぼくはですね。他に誰かにあの子が虐められたり泣かされたりなんて我慢できないんです」

力説するティナンに、なんだかちょっとびり疲れを覚えるクレオール。

「でもあの子もお年頃です。そのうちに恋人ができたなんてお兄ちゃんに紹介しようとするかもしれないじゃないですか」

「ああ、そういうこともあるかもしれませんね」

「でも、それを想像するとぼくはとても辛いんです。だつて恋人つて、キ……キスとか、してしまつ訳でしょう？」

何故その年齢でキスで照れるのか。

言葉をどもらせた挙句に頬を染めるのはやめて頂きたい。

「キスなんてつ、そんな破廉恥なことは兄として許せない訳ですよ！」

「まあ、それは確かに兄として許せない」ともあるかもしれませんね

「うなんです。ぼくは兄として兄は許してはいけないと思つてます」

「なんて面倒くさい兄。

ちょっとクレオールが呆れると、ティナンはまるで賛同者を得たとばかりに力強くうなずいた。

「可愛いルディの唇をどつかの馬の骨に奪われるくらいであれば、

兄としてぼくが奪つてしまつたほうガルティだつて安心だと思つんです」

「 その兄としての使い方は間違つてます」

「 どうか、認識とかもう諸々全てにおいて駄目だ。」

「 とりあえず「守秘義務」云々よりこれはどこかに通報したほうが良いだろうか。クレオールはにこやかにさくっとそんなことを考えてみた。」

爪の垢を煎じて飲ませる？

さらにタチが悪くなるので却下。

＊＊＊

「 ああ、今の方で最後ですね」

予定されていた相手が全て終わつたことにやれやれと呟いたクレオールだが、実質人生相談として何も解決していないことは気付いていた。

どうでもいい

という理念で彼は他人の行動など気にしない。

片付けをしてしまおうと思つたクレオールの面前に、一人の青年が立つていた。

阿呆な魔術師のような格好で。

「 ……」

思わず言葉を失うクレオールに、相手は頭に乗せてあるトップハットをひょいとつまみあげて礼をした。

「こにちは」

「……こにちは。えっと、あなたは？」

「セフィリトル・レイ、リドリー・ナフサートが来てたでしょ？ どんな相談だつたか教えてくれる？ ぼくのこと言つていた？ ぼくが好きすぎて困つてなかつた？ ぼくのことならぼくに相談してくれればいいのにね？」

ではコレが彼女曰くの変態か？

クレオールは眉間にちょっとばかり皺が寄るのを感じた。

変態というか、変人？

「ついでにぼくの相談も聞く？」

あのね、ぼくつてセフィリトル・レイの為なら三日三晩励める自信があつたんだけど、一晩で三回続けてすると実際は結構体力的に色々大変だということに気付いたんだよ！ ちょっとインテーバルが欲しいし、三日続けてつてちょっときつつい。ぼくも年かな？ それにね、自分で仕方なくすますのと愛するハニーをせつせと抱きながらするのとは色々と違う訳でしょ？

一回づつちやあんとリトル・レイだつて気持ちよくなつて欲しいし。やっぱり鳴かせたいっていうかさ、わかるかなー」

だらだらと相談なのかよく判らない戯言を實に楽しそうに吐き出しこ続ける男を前に、クレオールは内心で呻いた。

「今まで気付かなかつたけど、一つ一つの反応が凄く胸にクルよね。必死に我慢しているのに喉の奥からそれでも漏れちゃう声とか、眉間に寄せた皺とか！ あ、次は目隠しとかどうかなー。ぼくの友人が目隠しされると不安と期待で凄い感覚がイイつて言つんだけど、お兄さんはどう思つ？」

変態というのは思い込み。

思い、込み……？

クレオールは瞳を伏せてとりあえずこの仕事は自分には向かないことを悟った。

少し前に不安そうにしていた少女を思い出し、ちらつと彼女に「すみません」という気持ちを一瞬だけ思い描いてみたものの、今はただ

自分の女主人とまつたりとお茶がしたい、自分の為に。

一 ちやんと嫁（王道）

一見して外国人だと判る容姿をしていた。

外交の父親についてやつてきたというナーナ・トーラといつ変わった名前の娘は、小麦色の健康的な肌にくつきりと大きな瞳。長い睫毛をして国の習慣だといつベールを頭からかぶっていた。

一田ばれなどといつものがあれば、きっとその時の現象がそうなのだろう。

クインザムは異国のその娘の姿に息を飲み込み、軽く瞳を見開いた。
しゃらんと揺れる幾つもの飾りのついたベールは、まるで猫に鈴のように彼女の場所を示す。

それは一種の枷なのだと、確かクインザムは何かの書物で読んだことがある。

女は金銭でやり取りされる商品でしかないのだと。
だからその身はじやらじらとした飾りで飾られ、音をさせることによつて逃げることを難しくさせるのだ。

簡単な挨拶もたどたどしい娘、ナーナは控えめに存在し、そしてその父親は俗物だった。

「伯爵、異国の中は珍しいですか？」

クインザムは微笑んだ。

「異国の中が珍しいのではありませんよ。私の妹に似ているだけです」

港に行けばナーナのような娘は珍しくない。

先に言つたように、彼女の國の女は商品でしかなく、奴隸制度が無

いとわれるこの国にも奴隸まがいに買い取られる娘が多く居る。

当然、あまり褒められたことではないが。

「妹さんに？ 伯爵の妹さんであればさぞお美しいでしょ」「うう」と見え透いた世辞だ。

クインザムは微笑を湛えて「生憎と私とはまったく似ておりません」と粗手が戸惑いつぶつやかな言葉を返す。

じつと見つめていると、男は居心地が悪そうにジワジワと咳をした。

「うちの末の娘が気に入ったのであれば、どうです？ 金一袋程度で構いませんよ？ いや、よければ伯爵の持つ一番小さな所領を譲ってください」

勿論それは決して安い値段ではない。

こそりと潜められた言葉に、クインザムは唇の端を持ち上げた。

「彼女と少し話しがしたいな」

その言葉に気をよくしたように、父親は「ぐぐくと大きくなづいた」。

それに合わせてクインザムは軽く手を払うと、近くを行く給仕を招き一・二耳打ちして、まるで置物のように作り物めいた笑みを浮かべているナーナに手を差し出した。

「うひひく」

クインザムの言葉を理解していないらしい娘は、困ったよつて父親へと視線を向ける。

父親はにこやかに母国の言葉で話しかけ、そしてナーナは田に見えて強張り、戸惑いを見せたが父親の叱責にクインザムの手を取った。

習慣の違いがその手にもみられ、その手には手袋ははめられずに直接染料のようなもので綺麗な模様が記されていた。

クインザムは彼女を庭へと連れ出した。

おそらく、その間にあの男の処理は済む　人間の売買は公に禁じられた大罪だ。何より、他国の所領を望むなどあつてはならぬ。

クインザムがナーナを連れ出し、広く作られた庭園の松明近くへといざなう頃あいに、ホールのほうではあわただしい足音が聞こえていたが、クインザムは無視した。

不安そうに見上げてくる大きな瞳は、漆黒のようにも濃緑にも見える。不安そうな小さな唇は、異国の言葉をつむいだ。

『あの、私は……イヤです』

きちんと気に入られるように振舞つんだ。

先ほど父親から叱責を受けていた娘は、ぎゅっと手を握り哀願するようにクインザムをみあげ首を僅かに振った。

『私は……』

自分が父親に売られようとしていたことは理解しているのだ。そして、男が自分に何をさせようとしているのかを考え、恐怖に身を震わせている。

クインザムは外交の一つとして当然異国の言葉も学んでいたが、彼女はクインザムの言葉を理解してはいない。

『あのつ』

「国に帰つたところで、ろくなことにはならないだろう」
クインザムはあえてその言葉を口にしたりしなかつた。
ナーナがびっくりと身をすくめ、言葉がわからないと訴える。

「つむにおりで」

『何を、言つてゐるの?』

「可愛い異国的小鳥。私の屋敷で**轉だん**るといい」

優しく微笑みかけ、けれど相手の訴えは完全に無視してクインザムはもう一度、その左手を差し出した。

『どこに行くの?』

「君の新しい家に」

『ねえつ、何を言つてゐるのか判らないつ』

「私は判つてゐるから」

『ねえ、ねえつ、あなたが私を買つたといつの? あたしをつ、あ……アイジンに、するのつ?..』

強く突っぱねて逃れようとする娘に、クインザムはクつと喉を鳴らして笑つた。

「クインザムだ」

とんとんと自分を示して言ひつ。

「ク・イ・ン・ザ・ム」

ゆつくりと区切つて告げ、今度はナーナの手を軽くつづくようにして「ナーナ」と言ひ。

すると彼女は少し戸惑つとした様子で『あなた、クインザム?..』と問いかける。

その言葉にクインザムはうなずいて見せた。

『でも! 私、イヤですかりつ』

「さあ帰ろうか」

『ちよつ、ねえつ、ビリに行くのつ』

クインザムはナーナの手を取り、嬉しそうに田代に歸還した

* * *

クイン兄ちゃんは愛妻家ですか.....

「一ちゃん」と嫁2

『「レジデント、私帰りますっ』

ナーナは突然連れてこられた屋敷に戸惑っていた。父親は顔を出さないということは、自分は売られてしまつたに違いない。長女でもないナーナの扱いなどそんなものだと理解してはいたが、だからといって言葉も判らない異国の人間のアイジンになど突然なりたくなかつた。

たとえ相手が綺麗な男でも。

『ひどいわっ』

悲観して言つ言葉に、クインザムは家人にナーナの部屋を用意するようにと告げて、上着を脱ぐと置かれている書棚から一冊の辞書を引き出した。

『ねえ、私をびくする気?』

ぱらぱらと辞書をめぐりながら、クインザムは微笑を浮かべ、「さて、どうしよう?」

『女をお金でやりとりするなんて最低なことだと思わないの?』
『金銭授受は無かつたよ。安心するといい。君は売り賣つされてない』

『なに、何を言つてるの?』

『さて、何かいい単語は……ああ、あつた』

クインザムは指先で辞書の文字を追い、ある単語でとめると、ちよいちよいつと指先でナーナを招いた。

ナーナが眉を潜めてその手元を覗き込む。

『自由』

ナーナはその単語をきいちなく拾い上げ、不信な様子でそつとク

インザムの顔を見た。

『自由、私 自由』

「やうだ」

『……つまり、じゃあ、あなたが買取ってあたしを自由にしたの？ あたしを自由にしてようつて魂胆ねつ』

「いや、なんか微妙に違つんだが、いや、ちがく無いよつな……」

ナーナはふと思いつき、クインザムの手にある辞書を奪い、同じようにぱぱらとめくつてみた。

言葉が通じないことについてはもう本当に厄介だ。

そして何より、ナーナの国では識字率も低い。

自國の言葉だらつて、単語一つ抜き出すのはたいへんな作業だ。からつじて判る単語から『イヤ』を抜き出すると、ずいつとクインザムに示して見せた。

トントンッと示す。

クインザムはその単語をじつと睨つめ、ついでナーナの顔を見た。

トントンッとモウ一度文字を示す。

「愛してゐる」

「アイ、シテ、ル？」

異国の言葉は言こづら。

うそりんとうなずき、ナーナはぱたりと辞書を閉ざした。

「クイン、アイ、シテ、ル！」

よし、せつせつと言つてやつたわ！

『判つた?』

誇らしげに言つて、クインは「ひ」小さく呻いて横を向き、小刻みに肩を震わせたかと思うとがばりとナーナの両肩を引っつかみするりとそのベールを落とした。

「ああ、もう、なんていつか可愛い」

そのまま首筋に顔をうずめてくる男にわたわたと慌てながら逃れようとしたが、クインザムは一向に気にするそぶりを見せず、ナナの腰を引き寄せた。

『な、何するの?』

『何しようかな』

『私の国では、男に肌を見せたら駄目なのよ』

『うちの国でもだいたいそんな感じだよ』

『結婚できなくなる』

『私の妻になればいい』

『アイジンはイヤ』

さすがに愛人では無いとあげようかと思つたものだが、勘違いさせておくのも面白い。

クインザムは一回突き進む手を止めたがすぐに再開した。

異国の衣装は一枚布を巻きつけた形で、それをとくのはもじかい。

差し込んだ手が地肌に到達すると、しつとつとしたその肌触りと共にナーナが涙声でやめて欲しいと訴えてくる。

『ナーナ、欲しいと言つて』

『なに? 何なの?』

『欲しい』

『……ホシ、イ?』

大きな瞳に涙粒を浮かべてたどたどしく呟かれた言葉に、クイン

ザムは笑みを浮かべた。

「欲しい？」

「ホシイ」

ナーナは自分の上にのしかかる男が繰り返す言葉を『止めて欲しい?』という確認なのだと捉えた。

暴れる娘を前に、さすがに理解を示してくれたのだらうと。だから相手の言葉を、嬉しそうに繰り返して見せた。

「クイン、欲しい、アイ、シテル」

「クインザム、ヤメテ、イヤ！」

「ナーナ、クイン、アイ、シ、テル」
必死に訴えるナーナに、ルディエラは、

「もお、判つたつてば。ナーナは本当にクイン好きだよね」と、あてられたようにはたはたと指先で顔をあおいだ。

『人の体を好き勝手するあんな人嫌いなのつ』

一生懸命訴えていますが、なかなか理解は得られません。

魔女猫

* 嘘ではないけど本気にしちゃいけない。

【魔女と白い猫】あらすじ&人物紹介。

魔導師と魔女の下らない喧嘩のあげく、あやうく全殺しになりかけた魔女は魂と体とを引き離して自らを治癒しようとしたのだが、気づけば自分は子猫の中。そして体はいつたいどこに？ そんな猫になってしまった魔女が警備隊長に飼われてしまったり、魔女に虐められたり天敵をからかつたりしてちょっとは心を成長させていくのかもしないドタバタコメディ。

＊＊＊
ブランマージュ

本編の主人公にして思い込みの激しさと性格の悪さで世の中を渡る小娘。猫になってしまい苦手だった警備隊長に飼われ、まさに猫可愛がりされるハメに。

猫になったと思えば猫耳猫尻尾のお子様姿にされ、魔女に下僕のようにこきつかわれ、あげく自分を半殺しにした魔導師とペアにされてしまう。

人生踏んだり蹴つたり。いつか嫁にいきたいと思っているのだが、気づけば自分の周りには猫フェチや幼女趣味、ドMなどの変態しかいないことに気づく。変態を自ら作っていると思われるのだが、どうやら当人は気づいていない。

自称17歳 17までに脱処女。だつたのだが、生憎とそのようなことにならなかつた為にとりあえずそういうコトがない限り自

分は17だと言い張っている。口が悪く他人を虐めるのが好きだが、最近はキレがない。まわりの変態とかに圧倒されている様子。

* * *

ロイズ・ロック

この人をエイルさんより先に書くことで、書き手の命まで危ういのではないかという危惧がなされる。けれどとりあえずこの人が先。本編登場はこの人が先ですよ！

町の警備隊第二隊の隊長。プランには目つきの悪い熊扱いされている。排水溝にはまた馬鹿な猫を飼うことにしたが、それが実はプランマージュであることには未だに気づいていない。猫の目がプランの目に似ていることから「プランマージュ」という名前を付けてしまう。毎日猫と一緒に風呂に入り、毎日一緒に寝台で眠る。プラン曰く猫フェチだが、おそらく他の人間から見ても極度の猫フェチ。猫のプランと魔女のプランを重ねてみていて、猫プランのじぐさに七転八倒する日々。わりと早い段階でプランが好きであることには気づき、精一杯護ろうと動く。

別称 不憫王。

ロイズが好きです という奇特な方も最近は多くいるのだが、その愛はどうやら奇妙な特色があり「不憫でない彼は彼じゃない」「ロイズは不憫でいるからこそ」とまで言われる。いろいろと人生はつらいことが多いようだ。

* * *

エイル・ベイザッハ

悪魔類鬼畜目エイル属

人間だが、どうやらその性質は悪魔に

近いと思われる。少なくともブランはそう思つてゐる。ブランマージュを半殺しにし、今は大魔女に命じられてブランマージュの人生に多大に関与している。魔女猫においてエロ担当筆頭と思われる。

ブランマージュを便利アイテムとして所有したいと思つていたのだが、その感情は今では別方向にいつてしまつたようで、ブランマージュを舐めたりかじつたりやりたい放題してゐる。どうやら手早くさつさと押し倒してしまいたいようだが、ブランマージュの体が本体でないことを熟知してゐるので、とりあえず紛い物を抱くなど矜持が許さずに日々苦惱してゐる。心がせつまい。変態幼女趣味だと思われてゐるが、その実態はただの陰険根暗であつて変態でも幼女趣味でもない……はずである。

＊＊＊
シユオン

ブランマージュの使い魔。正体は蝙蝠。現在の外見はエイル・ベイザッハと酷似してゐる。エイルへの嫌がらせの為に姿を変えられてしまつた可哀想な蝙蝠だが、主への愛は激しい。何をされても許せる。使い魔として使役されてゐるが、その実能力値は低い。得意なのは家事全般。趣味はブランマージュの観察。とくに好きなのは寝てゐるブランを眺めるのは至福。時々ブランの寝台に入り込んで一緒に寝てゐる。ブランマージュの入ったあとのお風呂で入浴とか、ブランマージュの下着を洗うのも大好き……実はやってることは駄目駄目だが、それでも魔女猫の癒し系。

＊＊＊
レイリッシュ

大魔女。ブランマージュの師匠の更に師匠。その年齢は不詳。漆黒のストレートの髪に魔女の三角帽をかぶる美貌の魔女。王宮に仕え

ている 魔女を愛し、魔女の為に人間との間のクッショング材として生きている。キス魔。三体の使い魔を従える最強の魔女。

現在「実験」と「遊戯」に興じているらしい。

* * *

エリイフィア

ブランマージュの師匠。その外見はロッテンマイヤー。手には乗馬用の鞭。目元には薄い眼鏡が標準装備。レイリッシュュという駄目師匠を見て育つた為にやたらと堅実なおばさんになります。使い魔はオウムと他に一体。現在は自分の家とブランマージュの家との往復で暮らしている。すでにブランマージュの家を浸食したと噂あり。

おつかない。

* * *

イーシャス

白髪のやたら背の高い青年姿を持つレイリッシュュの使い魔。ブランマージュには「馬面」といわれている。傲岸不遜、偉そう。その正体は処女大好きな一角獣。工口担当その三。

強大な魔力を持っているが、実は戦闘には向かない。荒事よりも閨事のほうが得意らしい。

そのへんで「うう」と横になつていることが多い。

* * *

アンニーナ

H口担当その一。男好きの美女 赤い髪が嫌いで現在は黒紫に染め上げている。巻き毛。六男四女の長女……ええ、大家族のねえ

ちゃんです。基本的にはエロエロに浸つて生きているが、実は義理人情にあつい。自分の懷にあるものに対して手を振り払うことができないお人よし。魔女の妹であるブランマージュの人生を狂わせたエイルを憎んだ時期もあったが、今はエイルの落ちっぷりをせせら笑つて見学中。使い魔はいがいにも平凡顔の女タイプ。正体は鷹。エロエロだが、馬面の相手はしたくないらしい。

フルカス

アンニーナの弟。通称カス。ブランマージュを使い魔と思い込み、ついで姉からの適当情報に従つてブランマージュの腹に剣を叩き込んだ。その後エイル・ベイザッハに半殺しの刑を幾度か施行され、現在はエイル・ベイザッハの下僕と成り果てている。ついでにロイズ・ロックからまわし蹴りも食らつてる。魔女猫で一番痛い思いをしているのだが、その影は薄い。

クエイド

ロイズ・ロックの部下。程よくさぼり程よく生きるをモットーに呑気にすごしている。最近はロイズの好きな相手が誰だか判つてしまつた様子でからかつて遊ぶようになつてしまつた。魔女猫で一番まつとうな人かもしけない　ただし、まつとうではあるがまじめではない。

ギャンツ・ティラー

Mです。異常　ではなく、以上……

おそらく、ブランマージュさえいなければ、素晴らしい人。ブランマージュに蹴られて何故か天国をみてしまったらしく、いらいブランマージュに虜めて欲しくてしかたなくなってしまった。だが、その様子があまりにも気持ち悪いのでブランマージュに嫌われている。病気にさえならなければおそらくブランマージュの婿第一候補。現在エリイフィアに取り入って婿入りしようと画策しているとかいないとか。

基本的には【魔女猫番外地】にのみ生息。

* * *

老家人

エイル・ベイザッハの家の使用人。名前はまだ無い。セバスチャンとかではないので注意。長くエイルに仕えているが、気苦労が多い。ブランマージュのおやつを運んだりしているが、幾度かエイルが小娘様を襲っているのではないかというシーンに出くわしたり出くわさなかつたりで最近寿命が縮んでいる気がしてしうがない。

* * *

エリサ

ロイズ・ロックの家の使用人。

朗らかで働き者。猫をかわいがっているが、時折うっかりミスをしたりもする。最近の最大のミスは、クエイドに飼い猫の名前をばらしたことだろう。

* * *

おおまかにはこの程度しか人物がいないことに気づく。
誰か足りないだろうか……老家人もエリサもきちんと書いてあるの

で大丈夫。あ、ロイズもいるよね。って、ここでロイズが忘れられるつてまずないだろうにっ。

あ、ティラハールがいない……

* * *

ティラハール

謎の使い魔。その正体は未だ判らず。レイリッシュュに喉を潰され、喋れるのだがだみ声。意思を伝える時はもっぱら接触によつて伝える。言葉を操ると他人の神経をズタズタにする怪電波を垂れ流す。 ファルカスが食べれなかつたことを残念に思い、きかいがあれば食べたいと思つている。

……実はロイズになつてゐる。

* * *

以上、取りこぼしは無いハズ。

なんと最近不憫王のほうが人氣が高いのではないかという事実あり。といったところで、これはロイズ好きさんのほうがその不憫さに声をあげやすいのもしれない……

魔法使い。

* 本編未読の方はスルー推奨、そして本編読んだ人もある意味地雷。
嘘では無いけど本気にしてもいけない、

【あたしの魔法使い。】あらすじ&人物紹介。

家出娘リドリーは婚約者との結婚式三日前に全てを捨ててランナウエイ。

新しい町で新しい自分のスタートを切った筈だったのに、そこは新しいどころか古い自分を知つていて変態な魔術師もどきの巣があった。

女郎蜘蛛よりもタチの悪い魔術師につきまわとれてしまったリドリー、彼女の昨日はおろか明日はどうちだ。

＊＊＊
リドリー・ナフサート

生まれた瞬間におそらく不幸の星に好かれた。子供の頃は物静かで控えめだったが、過去を捨てた彼女は乱暴者になりはてている。ほんのささやかな幸せを求めているのだが、生来の不幸のお星様がなかなか開放してくれる様子が無い。
本編の主人公。

＊＊＊
魔術師。

他にもけつたいな名称は一杯あれど、何故か本名だけは出でこない。人生的にはすでに楽隱居に入っている。一般的には良い人と思われているが、ことリドリーには天敵としかいよいうがない。口を開けば下ネタを繰り広げ、リドリーのスキについては抱きつき匂いをかぎ舐めるという暴挙にでる。

三曰三晩励める自信もあるらしく。その根拠はどこからくるのか不明。

* * *

アマリー・ジエ・スオン

初恋は魔術師だった。おそらく彼女の躊躇はここにある。兄が穏やかなために多少強気のお嬢様になった。リドリーを悪女だと思っていたが、今は考え方改めてリドリーのよき友人としての立場を貫いている。

が、どうも性格の根底はあまりよろしくない。他人の不幸をちょっと控えめに笑っている様子が随所に見られる。

リドリーのこともまつたりと観察しているのかもしぬれない。

* * *
アジス

若干十一歳の男前。頑固で口が悪いが一本気。思い込んだらのめるタイプなので宗教とかにかぶれ易い。家出の拳句に祖母の家についている。作者には常常「へんな名前でごめんね」と思われている。「アルジエスが本名ってコトにしてやろうか?」と裏設定で練られている。「アルジエスなんて名前恥ずかしくていえねえ!」つ

て「トトでどうだ？』

マーヴェル

リドリーの元婚約者。いや、もしかしたら婚約破棄しているわけではないので今も婚約者もしないんだぜセニョール。だがそんなことを魔術師に言つたらかるーくどこか僻地に飛ばされるおそれがあつたりする。現在もリドリーを探しているが、リドリーの妹とやつちまつた為に読者にものすごく嫌われている。

ティナ

リドリーの妹。病弱だったが今は完治。だがまたしても寝台の住人と化しているという噂あり。彼女もある意味不幸を背負つてゐるが、マーヴェル同様読者には激しく嫌われてゐる。自己中。

エルディバルト

28歳。以前に婚約者に婚約を破棄されている。だがその理由は「すがつて引き止めて欲しかった」というのは富廷の娘達には有名。実はエルディバルトは女性関係の浮名がすごい。そのかわり素人娘には手を出しません。そういうところは狡猾な策士かもしれないが、現在の婚約者にハメられて捕まつてゐる。魔術師が大好きすぎて、夜伽を命じられたら素直に脱げると思われる。そういうところが魔

術師に煙たがられているのかもしねり。

* * *
ルティア

エルディバルトの婚約者。エルディバルトの上に乗っかり、あげくその様子を養父に見せるという計略によりエルディバルトをしつかりとモノにしたほえほえ娘。本能のままに生きているため、その実中身は真っ黒です。

エルディバルトをいえば幸せ。ある意味魔術師と一緒に性格。

* * *
マイラ

アジスの祖母にしてリドリーの働くパン屋のご主人。優しくて善人。人々に好かれるよいおばちゃん。だが彼女が時折作る新作パンは人々を絶望に陥れることもできる最終兵器になることもしばしば。魔術師を悶絶させ、アマリージュを死にいざなおつとした経歴がある。

* * *

これでだいたい全部かな、と思い返してアマリージュの兄にして領主様が不在であることに気づく。
まあ、彼はその程度の男です。
なんといっても、上記の説明分は何の資料もなく書き上げられました
が、兄上の名前はぱっと出てこない……ああ、ジエルドだった。
よかつた、本編読み返さなくてはでもできた。
まあ、その程度のキャラクターです。

陽だまり

* 嘘ではないけど信じてもいけない、

【陽だまりのキミ】あらすじ&人物設定

二十一の時にヴァルファムが引き合わされたのは、なんと自分よりも八つも年下の義母。この小娘様を父親におしつけられた息子の涙なくしては語れない切ない育児日記。なぜ二十歳を過ぎて自分の父親の嫁を育てなければいけないのか　いいや育てる必要は無い、無視を決め込もうとした義息だったが、相手は無視できない程に厄介な小娘だった。義息と義母のハートフル・コメディ。

ヴァルファム

陰険、陰湿、粘着質、嘘吐き。あまたの悪評を持つ本編の主人公。誰が何といつても主人公。性格は悪い　侯爵家の跡取り息子。ついでに説教魔、一時間だってノンストップで説教ができる。本気になつた彼は一晩中説教を繰り広げたこともある。キング・オブ・おこりんぼう。当初こそ義理の母となつた小娘様を無視しまくつていたものだが、そのうちに妙な方向に彼女へと愛着を持つ。その感情は日に日におかしな方向に転じている。義母を騙くらかして抱きしめたりキスしたりとやりたい放題である。超絶心が狭い。

ファティナ

13歳で嫁いできた義母。それまでほぼ家庭で放置されていた為、基本的にうすらぼんやりしている。騙されやすい。時々屋敷を抜け出すなど行動的な場面もあるが、たいていの悪事はヴァルファムに発見され、説教されまくっている。神様の前で愛を誓つた旦那様が大好きだが、旦那様と一緒に暮らせないことで時折落ち込む。ついで子供が欲しいという定期的な病があり、これもヴァルファムの怒りをかつている。家族という言葉に弱く、ヴァルファムを義息として大事に思つている。ボケ担当。

翡翠の瞳に蜂蜜色の猫つ毛を持つ。

＊＊＊

クレオール

執事。屋敷の全てを取り仕切つてゐる。たいていの場合静かに控えて物事を見守つてゐる。ファティナを護る会会員一号。ファティナの良き理解者。ファティナが一人で泣いていたとたいてい慰め役をやつてゐる。最近彼の日記がweb拍手上で暴露され、実は腹が黒いのではないかという疑いを持たれてゐる。いいじゃないか、愚痴くらいこぼしても。と、当人が思つてゐるかどうかは不明。実はおまえはヴァルファムが嫌いなのか？と問い合わせたいが、その実ヴァルファムを嫌つてゐる訳ではないらしい。ただちょっと呆れているだけだ。

＊＊＊
エイリック

ヴァルファムの腹違いの弟。ファティナ16の時点で実は11歳。ヴァルファムにものくつそ年齢を把握されていない。ヴァルファムがエイリクの年齢を思うシーンは幾度もあるのだが、実はきちんと合っているものは皆無。兄を尊敬しまくっている。義母のことは嫌つていて、色素の薄い金髪に碧玉の瞳。外見はヴァルファムを小さくした感じ。兄には子犬のように尾を振るタイプ。

＊＊＊

カディル・ソルド

自称・ファティナの家庭教師。ファティナの夫であるヴァルツの部下。ファティナを姫と呼び、どうやら「ファティナの為に生きている」らしいのだが、ヴァルツには「一枚舌」とか「狐」とか思われている。ファティナの婚姻のおりの立会いを勤めている。ヴァルファムのいうことは利かない。

＊＊＊

ディーン・ゼルト

ヴァルファムの直属の上司。騎士団所属の執務担当官　　という名前のがーたら。その仕事の大部分をヴァルファムに押し付け、自分はたいてい「なーなーっ」とヴァルファムに愚痴をこぼす日々を送っている。今のところあまり出番は無い。だが【陽だまりのキミ】が終了した後、続編を書く気持ちが湧けば彼には一応出番がある。今現在はただの女好きの遊び人。

＊＊＊

リルティニア

ファティナの友人。奔放な少女。ファティナが領地にいた頃からの友人。もともとは体が弱く、療養の目的でファティナのいた地に時折訪れていた。ファティナとは仲良しだが、ヴァルファムには嫌われている。

セラフィレス

リルティニアの兄。陽気な性格で、ヴァルファムを「面白い遊びあいて」として認定中。ファティナの兄を自称し、あげくヴァルファムを甥っ子呼ばわりしてからかっている。年齢的にはヴァルファムよりは年下。ファティナのことを気安く「ファティ」と呼んだことにより、ヴァルファムに「敵」認定をされている。

メリ

ファティナの事実上の家庭教師。住み込みで雇われている。ファティナを護る会員一号。心優しい主の為に色々と努力しているが、あまり報われていない。ヴァルファムのことは苦手としている。

ヴァルツ

ヴァルファムとエイリクの父親にして、ファティナの夫。

危険遺伝子の持ち主。女好きでファティナを含めて四人の女性と結

婚した経緯がある。だがさすがに13才の小娘は守備範囲ではなかつたようで、その世話を息子に押し付けた。そのおかげで彼の息子が苦悩の日々を送っているのだが、そんなことはどうでもいい仕事人間。現在は領地にある屋敷で仕事に明け暮れている。ヴァルファムに幾度も呪われ、最近ではすっかり「死んでしまえ」とまで思われている。

ハートフル・コメディ……

のわりに人物紹介がなんだか殺伐とした感じのものもあつたかもしれません。主人公がすでに駄目駄目ちゃん。

たまさ。の書く物語としては珍しく男主人公。

性格の悪い主人公ですが、なにやら最近では「不憫」とか言わ正在る。こんなに悪なのに、「不憫」と言ってもらえるなんて、なんて美味しいヤツめ。

この物語はもともと、たまさ。の書いた一本の話の視点をヴァルファムに強く固定して書きなおされている。最近ファティナ視点でも書かれているが、基本的にはヴァルファムが主役。ベースは書きあがつている為、終わらないなどといつじたいには陥らないもよう。

連載三本のうち一番人気が無いのが悩み(笑)

UIL・ヒギンズの観察記録

七月一日、火曜日

そう書き出し、ナシュリー・ヘイワーズは肺を一杯に膨らませ、ついで一息に押し出した。

日記というかこれはある一人の男の観察記録に他ならない。相手の名はUIL・ヒギンズ そのへんによくありそうな名前の現状二十六歳の青年将校だ。階級で言えば少佐、そしてナシュはそのヒギンズの補佐官という立場だった。

さて、問題はUIL・ヒギンズのことだ。

UIL・ヒギンズは黒髪に湖畔の色の瞳を持っている。あまり見ない組み合わせだ。特徴的といってもいい。そして、彼の特徴の一つに、物忘れがある。この男は昨日起こったことも忘れる かと思えば、一年前のことを見失してしまっている。

「年寄りというものは近くのものは見えなくとも、遠くのものが見えたりするものだ」

などと言葉にした挙句、口の端に笑みを浮かべてみせる。

普段はまったく不機嫌が服を着て歩いているような男だというのに、時々そんな「冗談まがい」のことを口にするものだから、どうにもそのひととなりがつかめない。

はじめて補佐官という職種についたおり、ナシュも相手のことを細部まで知り尽くし、その動き一つで相手の全てを理解できる有能な補佐官になろうと誓つた。

その観察記録もすでに半年以上続いている。その文面を読み返せば、UIL・ヒギンズという男が真面目な男であり、また上層部に覚えもめでたいといふこともよく判る。

ただし、半年以上彼の下で働いていてもはつきりとその生態が理解できない。生真面目な顔をしていたかと思えば、その表情のままおかしなことを言つ。自らの副官を笑わせようと思ったのかかもしれないが、もしかしたらただの独り言かもしない。

さて、昨日のウイル・ヒギンズは黙々と仕事をこなす勤勉さを見せた。新しく西側に作られる砦の警護系統を構築する為に、他砦の現状報告書に目を通し幾つかの要点を纏め上げて他砦への訪問日時を決めていく。

ナシュは補佐官として資料を集めることに奔走し、紅茶を入れ、意見を求められれば口を開いた。

「一度北東砦に出向かねばならない」

「日程を組むのでしたら、今週末が良いと思います。再来週に入れば合同訓練の準備が入りますから」

言わずとも良いことだが、一応そのようにナシュが告げたのだが、ウイルは机の上に両肘をつけて指を組み、中指と人差し指をわずかに動かしながら眉間に皺を刻みこんだ。

「日が悪い」

「の上官は女のように占いなど見ないよつこしている。信じていなか

新聞のコラムにでも「今週末は旅行は厳禁。駄目、駄目、だめ」とか?

生憎とナシュは占いなど見ないよつこしている。信じていなか
ではなく、そんなもので容易く自らの心が浮き立つことがイヤなの
だ。もし「今日は最高。」の日に告白すればどんな異性もあなたに
メーロメロ」などと書かれていたら、一日阿呆な考えに囚われてし
まうかもしれない。

ただし、生憎と恋煩う相手は今のところいない。いないので「損
した」と思つて一日沈むことだろう。
なんの根拠もない「損」の為に。

さて、ウイル・ヒギンズは鎮痛な様子でカレンダーを見ていた。まるで睨みつけていれば口が良くなるとでもいうかのようだ。その根暗とも言つべき性格に合わせず明るい湖畔の色合いの瞳はたつぱり二分ほどはその数字を睨みつけ、ついで観念したように、

「中尉」

と、ナシユを呼んだ。

「君は、どうするつもりだ」

その問いかけの意味がつかめなかつた。

何故ならナシユはこの男の補佐官なのだ。どうするも何もない。ウイル・ヒギンズの口が悪からうが何だらうが関係がない。

「当然お供させて頂きますが」

「判つた。努力しよう」

どんな努力が必要であるのかナシユは突つ込みたい心境だつたが、その時にできる筈がない。

だからこそ、この記録でナシユは刺々しく言葉を連ねた。

努力つて何？

努力すれば口が良くなるのか？ どんなだよ。

とりあえず文字の中とは言え、さすがにナシユは士官学校で覚えた低俗なスラングは入れずにおいた。この記録はそういうことを記録するものでは無い。まったく理解できない上官を理解しようといつ純粋な職業的観察だ。

* * *

ナシユは翌日、ウイル・ヒギンズの記録を書き込む為にノートを開き、昨日より深い溜息を吐き出した。

今日のウィル・ヒギンズは不機嫌だった。

半眼に伏せた瞳で、仕事をこなしていながら時々「死ね」「くたばれ」「ふざけるな」とぼやきと言つのだ。

基本的にウィル・ヒギンズといつ男は寡黙で実直。生真面目な男だ。

ナシユはそんな相手の補佐官に任命された時は喜びと共に「うわ、なんか面倒くさい」と正直思つた。私生活に関わるような付き合いをしなければならない上官も面倒臭いが、四角四面に仕事に向かう人間も付き合つていいくえで気苦労があるものだ。勿論、やたら女性部下をからかうような上官などもつてのほかだが。

「少佐？」

おそらく言葉を落としていることに気が付いていないのではないかとナシユはおそるおそる声を掛けた。すると、ウィル・ヒギンズは手をとめ、一旦息を吸い込むと普段の彼に戻った様子で顔をあげ、しばらくナシユをひとりと見つめてゆっくりと息をついた。

「何だ、中尉」

「いえ 珈琲をお入れしましょうか？」

「そうしてくれ」

即答で言ひながら、ふつとウィル・ヒギンズは眉間に皺を刻みつけた。しばらくの間そうしていたかと思えば、考えをほじくようにな軽く首をふる。

いつたい何が気に触つたのか判らなかつたが、何よりも相手の気持ちが理解しがたいのだからすでにナシユは色々と諦めていた。

相手と自分の間には性別の違いしかないような気がするが、相手はおそらく妖精の取替え子であろう。意思の疎通を図るのも困難なのだから、諦めはむしろ必定だ。

「中尉」

「なんでしょう」

ウィル・ヒギンズは珈琲の香りを楽しんだのち、角砂糖を四つほど

ぱどばと落とし込んで銀色のティ・スプーンでかき回した。

「明後日、私に言って欲しい言葉があるんだが」

「明後日、ですか？」

「私は知つての通り、物忘れが激しい。明日ならともかく明後日に
は忘れてしまいそうだ」

そう口にするウイル・ヒギンズはどこか冷ややかで自嘲的だった。
確かに、自らの欠点を口にするのはとても矜持が許せないことだろ
う。そう思い、ナシユは神妙な表情を作り、決して相手の心を傷つけたりしないように柔らかさを重視して微笑んだ。

「判りました。明後日の朝で宜しいですね」

「ああ。ありがたい」

そう口にしたウイル・ヒギンズは口の端に笑みを浮かべて力強く
うなずいた。

ナシユはその時のことを思い出しながら、田記にてきちんと相手の
言葉を書き記した。

翌日のウイル・ヒギンズは機嫌が良かつた。

いつもと変わらず仕事に励み、そつなく一日を過ごす。そして帰宅
する時に上着に手をかけ、ふいにその眼差しをナシユへと向けた。

「中尉」

「はい、なんでしょうか」

「明日から出張になる。迷惑もかけるだらうが、よろしく頼むよ。
先に謝つておく」

口の端に笑みを浮かべ、ヒギンズは軍帽に軽く触れて角度を直し
た。

その眼差しが、どこか面白がるような色を見せた気がしたがナシユ
はいつも通りにさりげと流した。

* * *

さて、翌日　数日分の下着と替えの軍装を鞄に詰めてウイル・ヒギンズの執務室へと赴けば、すでにウイル・ヒギンズは必要な書類を点検している段階であつた。

上官より遅れたことを恥じたナシュは、顔をしかめてしまわないよう気をつけながら敬礼し、自らの遅れを詫びた。

「いや、君に落ち度は無い。そんなことを気に掛けるな」

言しながら書類に視線を落としている相手に、ナシュはほっとしながら思い出した。

数日前に頼まれていた伝言だ。

「少佐」

「なんだ」

「三番田の引き出しの封書をお忘れになりませんよ」「元う

その言葉に、言われたウイル・ヒギンズは怪訝そうに眉を潜めた。

忘れてるよ、本当に。

半ば呆れながら、だがナシュは勿論そんなことをおぐびにも出さなかつた。

ウイル・ヒギンズは「わかつた」と小さく答えると、書類をぱよさつと机におき、引き出しの三つ田に入れられている封書を引き出し、つこで中身を確認するようにするりと取り出した。

ざつと視線が紙面を走る。

その次の瞬間、ウイル・ヒギンズは一瞬硬直し息を止め、ついでぐしゃりとその紙を丸めた。

「少佐っ」

持つて行く書類ではないのかと慌てたナシュが声を荒げると、ウイル・ヒギンズは誰かを絞め殺しそうな表情で「くたばれっ」という意味合いの酷いスラングを吐き捨てた。それはよく酔っ払った海

軍の人間が陸軍の人間をののしる時に使われるような到底文字にすらのものはばかられるような単語だ。

そしてその次の瞬間には、ひどく真面目な様子で頭を下げるのだ。

「すまない」

「あ、いや……え？」

確かにあまりにも程度の低い言葉を耳にする」となつたが、だからといって上官に真摯に謝意を向けられる程のことでもない。

「君には本当にすまないことをした。謝つてすむことではないが、だが」

「あの、少佐？」

「ああ、本当にどうすれば……そうだ。それがいい。結婚してくれ」

何ですか、とつぜん。

あんたどうとう頭煮えたか？

ぎょっとしたナシユはあまりのことにぎょっと身を引いた。
程度の低い単語を聞かせた程度で結婚を申し込まないといけない事態に陥るとはどういうことだろうか。

それとも真面目すぎる男といつのは、思考が斜めどころかアクロバティックに動くのか。

どちらにしろ、ナシユは上官にするのもイマイチな男を夫にするつもりなどあるわけがない。

「この程度のことでは結婚など考えられません。辞退致します」

「君にとつてはどうといつ」とはないことだといふのか

「当たり前です」

吐き捨てるように言えば、田を見張りウィル・ヒギンズは奥歯をかみ締めた。まるでナシユが平手打ちでもしたかのようだ。

しばらく首でも絞めそうな視線を向けられたナシユは憚いて一步引き下がり、ウィル・ヒギンズは無理やり体を引き剥がすように向

きを変えた。

「荷物の準備を」

「はいっ」

やつと結婚云々などという戯言を忘れてくれたかと安堵し、ナシユは敬礼したがウイル・ヒギンズの瞳はどこか暗いものだった。

その田のウイル・ヒギンズは最悪だった。

昼夜近くまで馬を進め、中継地点で馬を交換し、更に先に進む。ナシユのことを気遣うそぶりを見せるのだが、それを自ら振り払うように更に馬の速度をあげようとする。補佐官という立場であるナシユは唯々諾々と相手の行動に従うが、さすがに夕刻間近にぶちりと切れた。

「馬を潰すおつもりですか」

本来であれば目的の場所までは馬を幾度も交換し、三日掛かる。それを一日で行く勢いだ。

すでに本来であれば今夜の寝床として予定していた中継地点を越えている。

「どこで泊まるつもりだ。」

朝まで馬を走らせるつもりか、この男は。

「すまない」

言われた意味が理解できたのか、ばつの悪い顔をする。

下弦の細い月があがるなか、舗装らしき舗装もされていない道を行くのは困難だ。

ナシユは胡散臭いものを見る視線で上官を見ると、首を振つて馬の首を叩いた。

「川が近い筈です。今日はそこで野宿としまじょう」

「それは駄目だ」

「これ以上移動したところで馬も人間も疲労するだけです。」理解

下さるかと思いますが

刺々しさを含めて言えば、 ウィル・ヒギンズは忌々しそうに顔をしかめたがうなずいた。

ナシュはウィル・ヒギンズについてある疑惑を持っている。

それはつまり 多重人格と呼ばれるものではないのだろうか、 といふものだ。あからさまに違う気はしないのだが、 ウィル・ヒギンズはわずかながら嗜好の違いをみせることがある。珈琲と紅茶、 食堂で出される食事にしても、 よくよく観察すればグリーンピースを残す時と残さないことがある。 口の端に笑みを浮かべる時と、 ただ黙々と仕事を続けるとき。

その二面性を突き止めようと記録をつけはじめたのだが、 半年たつた今も謎は謎のままだった。

森の入り口に手早く火をたき、 持っていた携帯食料で味氣の無い食事を済ませる。 水で腹を下さぬようにと持参した紅茶を飲んで一心地をつけ、 馬の背に乗せていた薄い毛布を体に巻くようにして火から遠くない場で就寝の準備を進める。

ウィル・ヒギンズは不機嫌そうにむつりと押し黙つていたが、 手渡された砂糖なしの紅茶を無言で飲み干した。

「まずは私が起きています」

夜盗や獸が出ないとは言えず、 ナシュは提案したがウィル・ヒギンズはかぶりを振った。

「いいから君は寝なさい」

「いいえ。 私の方が先に」

ナシュは譲らうとしなかつた。 相手のほうがやけに気を張つていて疲れているのは目に見えていたが、 しかしウィル・ヒギンズは厳しい眼差しでそれを押さえ込んだ。

仕方なく、 ナシュは足を抱くよじにして座つたまま額を膝に押し当てた。

ぱちぱちと乾いた薪がはぜる音と、 火の温かさが適度に疲れた体を

包み込んで眠りの淵へと落としていく。記憶の片隅に以前行われた野外訓練のことがよみがえった。下士官であった頃は野外訓練のほう多かつたくらいで、野宿は当然。そしてまた見張りで起きているのも当然だった。

ウイル・ヒキンズの観察記録2

そしてこれは、呪いだらうか。

ナシュは気が付けば温かく大きな手が自分の頭を撫でている現状で目を覚ます羽目に陥つた。

生来の冷静さを総動員し、叫ぶことも体を跳ね上げることもしないですんだことはまさに傑偉。だが、ぶつぶつと落とされる言葉は激しく恐ろしい呪いの呪文だつた。

「すまない、すまなかつた。私が悪い もつと氣をかけてやれば、いいや、きちんとこんなことは断れば良かつた」

……ぼそぼそと落とされる音は、恐怖いがいのなにものでもない。きちんと覚醒していくことを示すべきか。いや、起きていると知れればもつと恐ろしこことになるやもしれぬ。

ナシュは血の氣配を氣取られぬように膝頭に額を押し付けてだらだらと流れる汗と、口の中に無意味に溜まる唾液をじう処理すべきかと苦悩した。

「それとも 君にどうして私はどうでもいい男なのか」

え、なにこれ怖い。

貞操の危機とかいうのか、もしかして。

また、ちょっとまで。何がどうしてそつなる？ ナシュは昼間の突發的な求婚を思い出しそうかあれば本気だったのかと腹部が冷え

る思いがした。

「もつと早い段階で突つぱねていれば、君が傷つくこともなかつた

ふひひ

いやいやいや、今、今ならまだ間に合います。
傷ついてないです。あんなスラングどつてことは無い。ケメから

X突っ込んで、内臓XXXXP とか、そんな品性下劣な暴言ならこの耳はたこ踊りができるそんぐらい聞いてます。鼻先で笑いながら下品な応酬してあげればよかつたですか？ 頼みますからおかしな責任とか感じじないで下さい。

なんならもつと下らない酒場歌をハイ・ソプラノで♪披露してもいい。酔っ払った兵士達が品性下劣に披露する歌の一つや二つ、歌つて進ぜましょうとも。

ナシユは卒倒寸前に陥った。

「責任はどう？」

どんな責任だ、このドアホウ。

さすがに耐え切れなくなつたナシユはぱしりと相手の手を払い落とし、引きついた表情をがばりと向けて、もつれる舌で声を張り上げた。

「一、交代の時間ですか！」

「 中尉、いや……ナシユリー、ナシユ。我々はきちんと話し合つたほうがいいと思つ」

何故突然名前で呼ぶ。

全身に広がる鳥肌に、ナシユは近くにある血ちの細剣をがしつとつかみ、ぐつと立ち上がつた。

「少し見回つて参ります」

「ナシユ、私の誠意が足りないことは理解してくる。だが、だからといって逃げていては何も解決はしない」

「私と貴方の間で解決すべき問題など何一つありません」

今日もにこにこ明朗会計！

「君が私に対して憤りを覚えることはもつともだ。だが、私はこういう問題を無視してはいけないと思う」

「あんなことでいちいち責任を感じていたら、軍人などやつていられませんよ！私の職場は男ばかりが多い軍隊なのですよ」
どれだけ下らぬ言葉をこの耳にいれて生きてきたと思つ。

おそらく、上級仕官であるウイル・ヒギンズよりもずっと数多くの猥談を入れてきたり、下らぬ喧嘩で吐き出されるスラングをにやにやしながら聞いてきたのだ。

「いちいち結婚などと言つていたら、今頃私は二十人以上の男と結婚する羽目になる」

だから気にしてくれるなと思いを込めて怒鳴り、怒鳴ったことに對して冷静さを取り戻した。

上官相手だと思いだし、決まり悪く咳払いをし、「いいですか？」

「理解してくれましたね？」

そう確認するように声を潜めたが、面前の上官は蒼白になつてゐた。

「なんといふことだ」

……信じがたいと首を振り、「軍務は君には向かない。もう止めるんだ」

ナシュは氣を失いそうになつた。

どう考へても、この上官と自分とを比べてどちらが軍隊向きかと問われれば自分のほうが軍務には向いている。人間関係しかり、根回しあり。こんな場所は眞面目ばかりで生きていく場ではない。

「いや、だが……おかしい。君はし」

ふつとウイル・ヒギンズは言葉を濁し視線を伏せた。

「処女だつたではないか」

……セクハラで訴えるぞ、この糞馬鹿野郎。

しかも何故過去形。

「ふざけるのもたいがいにして下さいよ！ 私は正真正銘現在進行形で処女ですよ！」

「いや、話が見えない」

「 ウィル・ヒギンズは呆然と咳き、ナシユは指を突きつけた。

「私の処女性が問題でしょうか！」

張り倒していいですか。

ナシユは震える声で問いかけた。

「問題だ。つまり、私は いや、私と思い込み、君はワイトに手

……」

苦痛に呻くよし、ウィル・ヒギンズは言った。

「手籠めにされたのだろう？」

「テゴメ……手捏ねハンバーグは美味しいですよね。私も大好きです。

粗挽き肉にたっぷりと胡椒を利かせて

「てごめ……」

いや、ハンバーグじゃないだろう。

「君にとつては寝耳に水だろう。こんなことを言えば頭がおかしいといわれるかもしれない。責任逃れの嘘と思えるかもしれない。だが、君に無体を働いたのは私ではない。私の双子の兄のワイトだ。恥ずかしい話だが、本来であればあれが一人で領地の管理をしなければいけないのだというのに、あれには苦手分野があり時折り入れ替わって私が処理をしていたんだ。上官は知っているが、君にもきちんとと言つておくべきだった。まさかあれが君に無体なまねをするとは思つていなかつた」

「……」

「確かにワイトは突然週末の約束の日付をずらされて不機嫌だった。

だが、だからといって君に手を出すなんて。くそつ。帰つたりやつ
をぼこぼこにすると約束しよつ」

ナシユは体中の力がへたりと抜けるのを感じた。
あつたりと告げられた言葉の軽さ　いや、重いのだが、そのあつ
けなさになきそになつたのだ。

この半年の間、この上官は病なのかと思っていたが、フタを開いてみれば　双子。別人であればそれは確かに嗜好も違かう。
というかなんたる適当な。それでいいのか、軍務。

「本来であればワイトが責任をとるべきだらう。だが　ナシユ。
君は私だとつて抱かれたはずだ。事実はどうあれ、君にとつて処女を捧げた男は私だ。ワイトとのことは全て忘れさせると約束しよう。酷い悪夢など忘れて私に身をゆだねて欲しい」

口の端に笑みを浮かべていた男が面前の男でないとこうことを鈍い思考回路で整理していたナシユは、舌がしげれるよつな気持ちでゆつくりと問いかけた。

「封書の中身は何と」

「……君にとつて氣分の良い文言ではない」

「言つて下さい。一言一句違えず」

短時間でぞつと田を通していたことを考えれば、長い文面では無かつた筈だ。

真実いいにくそつに、ウイル・ヒギンズは視線を伏せてゆつくりと口を開いた。

「ナシユちゃんの処女はいただいた。むつちりおつぱいじ駄走様」

力いっぱい面前の男の頬を張り飛ばし、ナシユは引きつった笑いを浮かべた。

「遊ばれてるだけですよ、馬鹿ですかつ」

「女性との関係を遊びだなどと、そんなことは許されない。ナシユ」

「違う！ あんたが遊ばれてるんだつ」

このボケナス。

話が通じないつ。

誰が誰に処女を捧げたつて？

もう上官もへつたくれもなく、ナシユは奥歯をぎこちないきしませんで怒りの眼差しを突きつけた。

「その手紙が嘘なんです。私は誰ともそんな関係になつたことは無い。判りましたか！」

「…… そうなのか？」

「そうですっ」

「ゼーゼーっと肩を上下させて言つと、やつと自分の気持ちも多少は静まつた。

ナシユは乱れた前髪をかきあげ、ぶるりと首を振つた。

面前の上官はナシユの頭からゆりくつと視線を下げ、足元までを確認し、またゆっくりと視線をあげて胸元で視線を留めると小さく息をついた。

「良かつた　いや、すまない。おかしな話をしてしまつた」

「もういいです」

「どうか。君は処女なんだな。良かつた」

安堵しているのかどうか知らないが、何故胸元を見ながら無表情で言つのか。

そんなところに顔はない。

しかも処女処女うるさい。悪かつたな。

「どうか、良かつた」

ナシユは引きつりつつ、自然と一步下がつた。

「見張りを交代します。どうぞお休み下さい」

「すまない。頼もつ。今口は何故か疲れた気がする」

ナシュは口元が無駄に引きつるのを感じながら、『ハカの台詞だ馬鹿と脳内で幾度も書き上げた。

ウィル・ヒギンズは先ほどのナシュと同じように焚き火の近くで片膝をたてるようにしてすわり、毛布を肩に掛け寝へりうと動き、ふと思いつ出すように視線をあげた。

「ナ 中尉」

「なんですか」

「……今回の件は忘れてくれるだらうか」

「明け方までには」

「それと、兄のことも」

「他言はしません」

半年悩んだ自分が可哀想だ。なんと下らない結末か。

「すまない。これからも時折り入れ替わるだらうが その時は君には言つようにする。君には迷惑を掛ける」

掛けた、ではなく掛けるときた。

ナシュは深く嘆息し、軽く手を払つた。

「結構です。言われずともおそらく見分けがつきますから」

ウィル・ヒギンズは口を見張つたがやがてゆつくりと規則正しい寝息をたてはじめた。

「おはよー、中尉」

ナシュはその日の日記の書き出しにて、WBと記載することを中心めた。つまりそれはワイト・ヒギンズのこと表示す。好みの飲み

物は珈琲、角砂糖は四つ。

正体の知られたワイト・ヒギンズは弟の仮面を半分だけ引っ掛けた状態で、肩をすくめた。

「君だけだよ、私達が見分けられるのは

「言われたから判るだけです」

「いいや、君はわかつていた。私の時には的確に珈琲と砂糖を四つ用意していた。ウィルは甘いものは苦手だからね。砂糖四つなんて睨まれる。だから、少し遊んでみたんだ」

死ねぼんくら。

ナシュは自分の仕事をこなしながら、本田の記録の内容を脳内でこねくりまわした。

弟に頼らざばならない脳タリンのワイトは今日も子供も逃げ出す極甘珈琲を口の端だけを笑みの形にして飲んでいる。

没落しろ、ヒギンズ家。

ウイル・ヒギンズの観察記録2（後書き）

双子の入れ替わりに苦悩する補佐官、というシチュチュが浮かんだ為の突発短編です。
本来はもうちょっと色っぽい感じに仕上げたかったのですが……ねえ？

ウイル・ヒギンズの観察記録3

8月

残念なことに気付いてしまった。

ナシュは毎日つけているウイル・ヒギンズ及びその双子の片割れであるワイト・ヒギンズの観察記録をつけながらつきつきと痛む額を押さえた。

脳タリンはワイトではなく、ウイルかもしれない。

今までむらとも気付かなかつたくらい、ワイト・ヒギンズはほぼ完璧にウイル・ヒギンズになりすましていた。話によると、子供の頃から入れ替わつたりして遊んでいたといふことで、自信もあるのだという 下らぬ自信だ。

ワイトがウイルに入れ替わるのは、ワイトには不向きな仕事をウイルが補う為だと言つていたのだが、ワイトが脳タリンといつのはおそらく違う。ワイトは手元にある資料とウイルの進言に基づきその日の仕事を真面目にこなしていくし、必要があれば全て記録をとつてウイルに残すというそつのない様子を見せる。ではいったいウイルは何をしているのだろうか。

ナシュは好奇心に負け、珈琲を用意しながら尋ねてみた。

「少佐

便宜上ワイトを相手にしている時もナシュは階級で呼ぶようこじている。

「少佐、今日はどういう仕事でいらっしゃるのです?」

何から逃げ出した?

声を潜めてナシュが尋ねると、ほぼ無表情で黙々と仕事をしていワイトは面白そうに視線をあげ、口の端に笑みを浮かべてナシュ

の手から珈琲を受け取つた。

「私は対人関係が苦手でね」

「対人関係?」

「ああ。『ご婦人とか、年頃の娘を持つてゐる男とかね　まつたく懲りることもなく娘を連れて訪れるものもいる』

「……」

「そんな時はアレは便利だ。鉄壁の守りといつ訳だな」

じつと珈琲の香りを吸い込み、ソーサーの横に置かれている砂糖を一つ一つ珈琲の中に落とし込んでいく。

昆虫並みの甘党ワイトは、きつちり四つの角砂糖を落とし、どろりとした砂糖をティースプーンをつかんでかき混ぜた。

「……つまり、見合いがイヤで弟に押し付けている訳ですか」

「アレは見合いなどと思つてやいないよ。仕事だと思つてやつている」

ひどい。

ナシユは内心で引きつり、ついでとばかりに思つていていたことを口にした。

「弟を騙してゐる訳ですね」

「そんなことはしない。苦手分野を補うのは昔からの私達の決め事だ」

「決め事?」

甘い珈琲をゆつくりと飲み、ワイトは一旦伏せた臉をゆつくりと押し上げた。

「私はね、子供の頃から賢い弟に比べて　と大人に言われてきた訳だ」

同じ顔なものだから、その比較は普通のそれよりしやすく、そしてきついものだった。とほんの少し落ちたトーンは物悲しさを滲ませるようだった。

ナシユはその言葉を静かに耳にいれた。

ナシユにも姉という存在がいる。彼女がいるからこそ軍属の道を進

めたのだが、もとをただせば彼女と同じ道をすすみたくないというひねくれた思いもある。ナシユ自身、姉とは比べられて育つたのだ。小さな痛みのようなものが、胸に突き刺さり面前の男の悲哀が

「だからアレには常々言い聞かせたものだ」

ふっと、ワイトは口の端に笑みを浮かべた。

「私が母の腹に落としてきた『賢也』をおまえは拾い上げて産まれたのだから、おまえの『賢也』は私の為に使われるべきだと」自信たっぷりに言われた言葉をこねくりまわす間もなく、ナシユはおそるおそる問いかけた。

「少佐は ウィル様は……」

「人間というものは長く言われ続けると、どんな事柄も納得するものだよ、中尉」

馬鹿だ。

ウィル・ヒギンズの愚か者。

ナシユは自分の上面のよく言えば素直な、悪く言えば単純な性格に涙がこぼれそうになつた。

その日の記録の最後、ナシユは溜息をつきつまペンを走らせた。

馬鹿ばつか。

* * *

ああ、今日はWA ウィル・ヒギンズだ。

ナシユはウィルをA、ワイトをBと表記するようになった。そして

最近気付いたことは、Bのほうが人間味があり、会話はしやすい。何より、Bのほうが人間として好ましい。

少なくとも、Bは人と話をする時に視線を合わせて会話をする。

「昨日はすまなかつた」

無表情のウイル・ヒギンズは半眼を伏せて言葉にした。

「あの人は君に迷惑を掛けなかつただろうか」

あの人人が迷惑を掛けているのは誰でないあんたにだけだ。

ナシュは穏やかな微笑を湛えて「問題はありません」と応えた。応えつつも激しく気になつて仕方ないのだが、何故ウイル・ヒギンズは心持ち視線を下げて会話をするのだろうかということだ。そこはどう考へても胸ではなからうか。女性の胸を凝視しながら言葉を発するのは激しくぶしつけではあるまいか。それとも、おまえには何も見えていないのか。

いや、見えていないのではなく何も考へていないのか。

「ワイトさんは」

何か話題を探そうと思わずそう口にしたのだが、ウイル・ヒギンズは息を詰めた。眼光が鋭くなつた感じもある。

それに気付いたナシュは何か地雷を踏んだかと慌てた。ここで彼の兄の話題は厳禁であつたか。

「兄が何かしたのか?」

「いえ　あの方はいつも通り仕事を処理しておいででした」

問題はまったくないと報告したつもりだが、しかしウイル・ヒギンズはその後普段にもまして不機嫌そうに黙々と寡黙に仕事をすすめた。

それに合わせてナシュも仕事を処理していくたのだが、どう考へても本日のウイル・ヒギンズの機嫌は最悪だ。何より雄弁に語るのが四六時中はりついている眉間の皺だった。

あんなに眉間に力を込めていて頭が痛くならないのだろうか。ナシユがあきれ果てていると、普段はあまり無駄口を叩かない上官はふいに口を開いた。

「中尉」

「はい、何か」

喉でも渴きましたか？

必要書類にサインをしていたナシユは視線をあげて背筋を伸ばした。

「君は兄を名で呼ぶのか」

そこかよ。

ナシユは激しく脱力した。ナシユも軍属という身で長く生きている。十一歳の頃に士官学校に入隊し、女性隊士よりも断然多い男達の中で生きていたのだ。男が自分に向ける視線の意味に気付けない程馬鹿でいられる訳がない。そんなことに無頓着でいれば、今頃もつと出世している 悪い意味で。

だからこそ、最近この上官がもしかして自分に好意を抱いているのではないかと危惧しているのだが……いや、ただの無礼者か。

「ワイトさんは軍人ではありませんので、階級で呼ぶことはできません」

「 そうだな」

「勿論、仕事中であれば少佐と呼ばせていただいていますが」今は面前に少佐もいますし、この場合「ワイトさん」と呼ぶことは不自然なことではないはずだ。

丁寧に説明すれば、ウイル・ヒギンズは押し黙った。

「では、私がいない時に君は私のことをどう呼ぶのだ
まだ続けるのかこの不毛な会話。

うんざりしながらナシユは眉を潜めて自分がワイトにウイルのこととをどう呼んだかと思い返した。

ワイトはウイルのことをアレと呼ぶ。では自分はそういった会話

の中での「面前の上層の」といふ現したかといふば

「ウイル様、と申し上げましたが問題でしたでしょ」
「ううん、

記憶を手繕り寄せて言えば、無表情の上官はやつぱり無表情でナ
シユの胸元を見つめてしばらく無言だったが、やがてゆっくりとし
た口調で「問題はない」と告げた。

その後やたらと機嫌が良かつた気がするが　　ウイル・ヒギンズ
は無表情なので氣のせいかもしれない。

ウィル・ヒギンズの観察記録4

「やあ、中尉」

道端でばつたりと知人に出会った場合 相手も私服、自分も私服であった場合はぺこりと頭を一つ下げて何事もなく通過するのが礼儀だろう。

しかもその相手が見知らぬ女性達といった場合は確實に「触らぬ神に祟りなし」といくべきだ。

ナシュリー・ヘイワーズはその鉄則を理解しているし、ことながれ主義の平和主義。わざわざ他人の揉め事になど首を突っ込みたくはない。

だからその時も当然のように一礼してそのまま過ぎ去りうとした
というのに、相手はふいに手を伸ばしてぐいっと引き寄せた。

「彼女達に言つてももらえないだろ?」

「何をでしよう?」

何するんだべらんめえつ。という内心は鉄壁の自尊心が隠してくれる。ナシュは自他ともに認める外面大王だった。いや もしかしたら、自認はしているが他人はそこを理解していないかもしれない。

「私はウィル・ヒギンズであつてワイト・ヒギンズではないと。どうも理解してくれなくてね」

淡淡と言われる言葉と、そして不快そうに眉を潜めている「婦人方を一瞥してナシュは微笑んだ。

嘘です。この男はワイト・ヒギンズで正解です。

と言つてはいけない理由は思い当たらなかつた。

そもそもナシュとしては相手に対しても貸しはあれども借りは無い。正解者に拍手! と手を打ち鳴らして称賛してやつてもいい程だろ

う。

「いやですね、ワイトさん。そつやつて何でもかんでも少佐に押し付けて生きるのは好ましくありませんよ」

当然の如くナシユは極上の微笑みを浮かべ、ついでその場にいるご婦人方に入当たりの良い微笑を向けた。

「ワイトさんは時々ふざけるだけですからお嬢になさりす。では、私は失礼」

「ナシユ。なんて君は意地悪なんだ」

ワイトはぎゅっとナシユの一腕を掴むと、彼女の体を囲い込むように引き寄せ自らの前に引き出すと耳の後ろを唇で軽く吸い上げた。

「私が他の女性といふことに妬いてるんだね。私が愛しているのは君だけだよ、可愛いナシユリー」

その後ナシユは笑顔を張り付かせたまま左手肘を後ろにぐつと埋め込み、相手の腹を一撃した後浮いた腕を強く引いて背後から捻り上げ、ついでに足を払おうかと思ったのだが、さすがに過剰防衛かもしれないところは許した。以前投げ上げた拳句に腹部に爪先をめり込ませた相手がいたが、あれは酔っ払いの上、ナシユの胸を無遠慮に驚づかみにした為に遠慮も憐憐も一切かけなかつた。今回はさすがにそこまでしたら非道が過ぎよう。

「忙しくしておりますので失礼致します」

ナシユは笑顔のままその場にいた女性　完全に言葉を失つて卒倒しそうになつていた女性達に一礼し、呻いている上面の兄をその場に放置して足音も高く退散した。どうやらワイト・ヒギンズは弟と違ひ鍛えられていないらしい。

¹　　²　　³　　⁴　　⁵　　⁶　　⁷　　⁸　　⁹　　¹⁰　　¹¹　　¹²　　¹³　　¹⁴　　¹⁵　　¹⁶　　¹⁷　　¹⁸　　¹⁹　　²⁰　　²¹　　²²　　²³　　²⁴　　²⁵　　²⁶　　²⁷　　²⁸　　²⁹　　³⁰　　³¹　　³²　　³³　　³⁴　　³⁵　　³⁶　　³⁷　　³⁸　　³⁹　　⁴⁰　　⁴¹　　⁴²　　⁴³　　⁴⁴　　⁴⁵　　⁴⁶　　⁴⁷　　⁴⁸　　⁴⁹　　⁵⁰　　⁵¹　　⁵²　　⁵³　　⁵⁴　　⁵⁵　　⁵⁶　　⁵⁷　　⁵⁸　　⁵⁹　　⁶⁰　　⁶¹　　⁶²　　⁶³　　⁶⁴　　⁶⁵　　⁶⁶　　⁶⁷　　⁶⁸　　⁶⁹　　⁷⁰　　⁷¹　　⁷²　　⁷³　　⁷⁴　　⁷⁵　　⁷⁶　　⁷⁷　　⁷⁸　　⁷⁹　　⁸⁰　　⁸¹　　⁸²　　⁸³　　⁸⁴　　⁸⁵　　⁸⁶　　⁸⁷　　⁸⁸　　⁸⁹　　⁹⁰　　⁹¹　　⁹²　　⁹³　　⁹⁴　　⁹⁵　　⁹⁶　　⁹⁷　　⁹⁸　　⁹⁹　　¹⁰⁰　　¹⁰¹　　¹⁰²　　¹⁰³　　¹⁰⁴　　¹⁰⁵　　¹⁰⁶　　¹⁰⁷　　¹⁰⁸　　¹⁰⁹　　¹¹⁰　　¹¹¹　　¹¹²　　¹¹³　　¹¹⁴　　¹¹⁵　　¹¹⁶　　¹¹⁷　　¹¹⁸　　¹¹⁹　　¹²⁰　　¹²¹　　¹²²　　¹²³　　¹²⁴　　¹²⁵　　¹²⁶　　¹²⁷　　¹²⁸　　¹²⁹　　¹³⁰　　¹³¹　　¹³²　　¹³³　　¹³⁴　　¹³⁵　　¹³⁶　　¹³⁷　　¹³⁸　　¹³⁹　　¹⁴⁰　　¹⁴¹　　¹⁴²　　¹⁴³　　¹⁴⁴　　¹⁴⁵　　¹⁴⁶　　¹⁴⁷　　¹⁴⁸　　¹⁴⁹　　¹⁵⁰　　¹⁵¹　　¹⁵²　　¹⁵³　　¹⁵⁴　　¹⁵⁵　　¹⁵⁶　　¹⁵⁷　　¹⁵⁸　　¹⁵⁹　　¹⁶⁰　　¹⁶¹　　¹⁶²　　¹⁶³　　¹⁶⁴　　¹⁶⁵　　¹⁶⁶　　¹⁶⁷　　¹⁶⁸　　¹⁶⁹　　¹⁷⁰　　¹⁷¹　　¹⁷²　　¹⁷³　　¹⁷⁴　　¹⁷⁵　　¹⁷⁶　　¹⁷⁷　　¹⁷⁸　　¹⁷⁹　　¹⁸⁰　　¹⁸¹　　¹⁸²　　¹⁸³　　¹⁸⁴　　¹⁸⁵　　¹⁸⁶　　¹⁸⁷　　¹⁸⁸　　¹⁸⁹　　¹⁹⁰　　¹⁹¹　　¹⁹²　　¹⁹³　　¹⁹⁴　　¹⁹⁵　　¹⁹⁶　　¹⁹⁷　　¹⁹⁸　　¹⁹⁹　　²⁰⁰　　²⁰¹　　²⁰²　　²⁰³　　²⁰⁴　　²⁰⁵　　²⁰⁶　　²⁰⁷　　²⁰⁸　　²⁰⁹　　²¹⁰　　²¹¹　　²¹²　　²¹³　　²¹⁴　　²¹⁵　　²¹⁶　　²¹⁷　　²¹⁸　　²¹⁹　　²²⁰　　²²¹　　²²²　　²²³　　²²⁴　　²²⁵　　²²⁶　　²²⁷　　²²⁸　　²²⁹　　²³⁰　　²³¹　　²³²　　²³³　　²³⁴　　²³⁵　　²³⁶　　²³⁷　　²³⁸　　²³⁹　　²⁴⁰　　²⁴¹　　²⁴²　　²⁴³　　²⁴⁴　　²⁴⁵　　²⁴⁶　　²⁴⁷　　²⁴⁸　　²⁴⁹　　²⁵⁰　　²⁵¹　　²⁵²　　²⁵³　　²⁵⁴　　²⁵⁵　　²⁵⁶　　²⁵⁷　　²⁵⁸　　²⁵⁹　　²⁶⁰　　²⁶¹　　²⁶²　　²⁶³　　²⁶⁴　　²⁶⁵　　²⁶⁶　　²⁶⁷　　²⁶⁸　　²⁶⁹　　²⁷⁰　　²⁷¹　　²⁷²　　²⁷³　　²⁷⁴　　²⁷⁵　　²⁷⁶　　²⁷⁷　　²⁷⁸　　²⁷⁹　　²⁸⁰　　²⁸¹　　²⁸²　　²⁸³　　²⁸⁴　　²⁸⁵　　²⁸⁶　　²⁸⁷　　²⁸⁸　　²⁸⁹　　²⁹⁰　　²⁹¹　　²⁹²　　²⁹³　　²⁹⁴　　²⁹⁵　　²⁹⁶　　²⁹⁷　　²⁹⁸　　²⁹⁹　　³⁰⁰　　³⁰¹　　³⁰²　　³⁰³　　³⁰⁴　　³⁰⁵　　³⁰⁶　　³⁰⁷　　³⁰⁸　　³⁰⁹　　³¹⁰　　³¹¹　　³¹²　　³¹³　　³¹⁴　　³¹⁵　　³¹⁶　　³¹⁷　　³¹⁸　　³¹⁹　　³²⁰　　³²¹　　³²²　　³²³　　³²⁴　　³²⁵　　³²⁶　　³²⁷　　³²⁸　　³²⁹　　³³⁰　　³³¹　　³³²　　³³³　　³³⁴　　³³⁵　　³³⁶　　³³⁷　　³³⁸　　³³⁹　　³⁴⁰　　³⁴¹　　³⁴²　　³⁴³　　³⁴⁴　　³⁴⁵　　³⁴⁶　　³⁴⁷　　³⁴⁸　　³⁴⁹　　³⁵⁰　　³⁵¹　　³⁵²　　³⁵³　　³⁵⁴　　³⁵⁵　　³⁵⁶　　³⁵⁷　　³⁵⁸　　³⁵⁹　　³⁶⁰　　³⁶¹　　³⁶²　　³⁶³　　³⁶⁴　　³⁶⁵　　³⁶⁶　　³⁶⁷　　³⁶⁸　　³⁶⁹　　³⁷⁰　　³⁷¹　　³⁷²　　³⁷³　　³⁷⁴　　³⁷⁵　　³⁷⁶　　³⁷⁷　　³⁷⁸　　³⁷⁹　　³⁸⁰　　³⁸¹　　³⁸²　　³⁸³　　³⁸⁴　　³⁸⁵　　³⁸⁶　　³⁸⁷　　³⁸⁸　　³⁸⁹　　³⁹⁰　　³⁹¹　　³⁹²　　³⁹³　　³⁹⁴　　³⁹⁵　　³⁹⁶　　³⁹⁷　　³⁹⁸　　³⁹⁹　　⁴⁰⁰　　⁴⁰¹　　⁴⁰²　　⁴⁰³　　⁴⁰⁴　　⁴⁰⁵　　⁴⁰⁶　　⁴⁰⁷　　⁴⁰⁸　　⁴⁰⁹　　⁴¹⁰　　⁴¹¹　　⁴¹²　　⁴¹³　　⁴¹⁴　　⁴¹⁵　　⁴¹⁶　　⁴¹⁷　　⁴¹⁸　　⁴¹⁹　　⁴²⁰　　⁴²¹　　⁴²²　　⁴²³　　⁴²⁴　　⁴²⁵　　⁴²⁶　　⁴²⁷　　⁴²⁸　　⁴²⁹　　⁴³⁰　　⁴³¹　　⁴³²　　⁴³³　　⁴³⁴　　⁴³⁵　　⁴³⁶　　⁴³⁷　　⁴³⁸　　⁴³⁹　　⁴⁴⁰　　⁴⁴¹　　⁴⁴²　　⁴⁴³　　⁴⁴⁴　　⁴⁴⁵　　⁴⁴⁶　　⁴⁴⁷　　⁴⁴⁸　　⁴⁴⁹　　⁴⁵⁰　　⁴⁵¹　　⁴⁵²　　⁴⁵³　　⁴⁵⁴　　⁴⁵⁵　　⁴⁵⁶　　⁴⁵⁷　　⁴⁵⁸　　⁴⁵⁹　　⁴⁶⁰　　⁴⁶¹　　⁴⁶²　　⁴⁶³　　⁴⁶⁴　　⁴⁶⁵　　⁴⁶⁶　　⁴⁶⁷　　⁴⁶⁸　　⁴⁶⁹　　⁴⁷⁰　　⁴⁷¹　　⁴⁷²　　⁴⁷³　　⁴⁷⁴　　⁴⁷⁵　　⁴⁷⁶　　⁴⁷⁷　　⁴⁷⁸　　⁴⁷⁹　　⁴⁸⁰　　⁴⁸¹　　⁴⁸²　　⁴⁸³　　⁴⁸⁴　　⁴⁸⁵　　⁴⁸⁶　　⁴⁸⁷　　⁴⁸⁸　　⁴⁸⁹　　⁴⁹⁰　　⁴⁹¹　　⁴⁹²　　⁴⁹³　　⁴⁹⁴　　⁴⁹⁵　　⁴⁹⁶　　⁴⁹⁷　　⁴⁹⁸　　⁴⁹⁹　　⁵⁰⁰　　⁵⁰¹　　⁵⁰²　　⁵⁰³　　⁵⁰⁴　　⁵⁰⁵　　⁵⁰⁶　　⁵⁰⁷　　⁵⁰⁸　　⁵⁰⁹　　⁵¹⁰　　⁵¹¹　　⁵¹²　　⁵¹³　　⁵¹⁴　　⁵¹⁵　　⁵¹⁶　　⁵¹⁷　　⁵¹⁸　　⁵¹⁹　　⁵²⁰　　⁵²¹　　⁵²²　　⁵²³　　⁵²⁴　　⁵²⁵　　⁵²⁶　　⁵²⁷　　⁵²⁸　　⁵²⁹　　⁵³⁰　　⁵³¹　　⁵³²　　⁵³³　　⁵³⁴　　⁵³⁵　　⁵³⁶　　⁵³⁷　　⁵³⁸　　⁵³⁹　　⁵⁴⁰　　⁵⁴¹　　⁵⁴²　　⁵⁴³　　⁵⁴⁴　　⁵⁴⁵　　⁵⁴⁶　　⁵⁴⁷　　⁵⁴⁸　　⁵⁴⁹　　⁵⁵⁰　　⁵⁵¹　　⁵⁵²　　⁵⁵³　　⁵⁵⁴　　⁵⁵⁵　　⁵⁵⁶　　⁵⁵⁷　　⁵⁵⁸　　⁵⁵⁹　　⁵⁶⁰　　⁵⁶¹　　⁵⁶²　　⁵⁶³　　⁵⁶⁴　　⁵⁶⁵　　⁵⁶⁶　　⁵⁶⁷　　⁵⁶⁸　　　⁵⁶⁹　　⁵⁷⁰　　⁵⁷¹　　⁵⁷²　　⁵⁷³　　⁵⁷⁴　　⁵⁷⁵　　⁵⁷⁶　　⁵⁷⁷　　⁵⁷⁸　　⁵⁷⁹　　⁵⁸⁰　　⁵⁸¹　　⁵⁸²　　⁵⁸³　　⁵⁸⁴　　⁵⁸⁵　　⁵⁸⁶　　⁵⁸⁷　　⁵⁸⁸　　⁵⁸⁹　　⁵⁹⁰　　⁵⁹¹　　⁵⁹²　　⁵⁹³　　⁵⁹⁴　　⁵⁹⁵　　⁵⁹⁶　　⁵⁹⁷　　　⁵⁹⁸　　⁵⁹⁹　　⁶⁰⁰　　⁶⁰¹　　⁶⁰²　　⁶⁰³　　⁶⁰⁴　　⁶⁰⁵　　⁶⁰⁶　　⁶⁰⁷　　⁶⁰⁸　　⁶⁰⁹　　⁶¹⁰　　⁶¹¹　　⁶¹²　　⁶¹³　　⁶¹⁴　　⁶¹⁵　　⁶¹⁶　　⁶¹⁷　　⁶¹⁸　　⁶¹⁹　　⁶²⁰　　⁶²¹　　⁶²²　　⁶²³　　⁶²⁴　　⁶²⁵　　⁶²⁶　　⁶²⁷　　⁶²⁸　　⁶²⁹　　⁶³⁰　　⁶³¹　　⁶³²　　⁶³³　　⁶³⁴　　⁶³⁵　　⁶³⁶　　⁶³⁷　　⁶³⁸　　⁶³⁹　　⁶⁴⁰　　⁶⁴¹　　⁶⁴²　　⁶⁴³　　⁶⁴⁴　　⁶⁴⁵　　⁶⁴⁶　　⁶⁴⁷　　⁶⁴⁸　　⁶⁴⁹　　⁶⁵⁰　　⁶⁵¹　　⁶⁵²　　⁶⁵³　　⁶⁵⁴　　⁶⁵⁵　　⁶⁵⁶　　⁶⁵⁷　　⁶⁵⁸　　⁶⁵⁹　　⁶⁶⁰　　⁶⁶¹　　⁶⁶²　　⁶⁶³　　⁶⁶⁴　　⁶⁶⁵　　⁶⁶⁶　　⁶⁶⁷　　⁶⁶⁸　　⁶⁶⁹　　⁶⁷⁰　　⁶⁷¹　　⁶⁷²　　⁶⁷³　　⁶⁷⁴　　⁶⁷⁵　　⁶⁷⁶　　⁶⁷⁷　　⁶⁷⁸　　⁶⁷⁹　　⁶⁸⁰　　⁶⁸¹　　⁶⁸²　　⁶⁸³　　⁶⁸⁴　　⁶⁸⁵　　⁶⁸⁶　　⁶⁸⁷　　⁶⁸⁸　　⁶⁸⁹　　　⁶⁹⁰　　　⁶⁹¹　　　⁶⁹²　　⁶⁹³　　⁶⁹⁴　　⁶⁹⁵　　⁶⁹⁶　　⁶⁹⁷　　⁶⁹⁸　　⁶⁹⁹　　⁷⁰⁰　　⁷⁰¹　　⁷⁰²　　⁷⁰³　　⁷⁰⁴　　⁷⁰⁵　　⁷⁰⁶　　⁷⁰⁷　　⁷⁰⁸　　⁷⁰⁹　　⁷¹⁰　　⁷¹¹　　⁷¹²　　⁷¹³　　⁷¹⁴　　⁷¹⁵　　⁷¹⁶　　⁷¹⁷　　⁷¹⁸　　⁷¹⁹　　⁷²⁰　　⁷²¹　　⁷²²　　⁷²³　　⁷²⁴　　⁷²⁵　　⁷²⁶　　⁷²⁷　　⁷²⁸　　⁷²⁹　　⁷³⁰　　⁷³¹　　⁷³²　　⁷³³　　⁷³⁴　　⁷³⁵　　⁷³⁶　　⁷³⁷　　⁷³⁸　　⁷³⁹　　⁷⁴⁰　　⁷⁴¹　　⁷⁴²　　⁷⁴³　　⁷⁴⁴　　⁷⁴⁵　　⁷⁴⁶　　⁷⁴⁷　　⁷⁴⁸　　⁷⁴⁹　　⁷⁵⁰　　⁷⁵¹　　⁷⁵²　　⁷⁵³　　⁷⁵⁴　　⁷⁵⁵　　⁷⁵⁶　　⁷⁵⁷　　⁷⁵⁸　　⁷⁵⁹　　⁷⁶⁰　　⁷⁶¹　　⁷⁶²　　⁷⁶³　　⁷⁶⁴　　⁷⁶⁵　　⁷⁶⁶　　⁷⁶⁷　　⁷⁶⁸　　⁷⁶⁹　　⁷⁷⁰　　⁷⁷¹　　⁷⁷²　　⁷⁷³　　⁷⁷⁴　　⁷⁷⁵　　⁷⁷⁶　　⁷⁷⁷　　⁷⁷⁸　　⁷⁷⁹　　⁷⁸⁰　　⁷⁸¹　　⁷⁸²　　⁷⁸³　　⁷⁸⁴　　⁷⁸⁵　　⁷⁸⁶　　⁷⁸⁷　　⁷⁸⁸　　⁷⁸⁹　　⁷⁹⁰　　⁷⁹¹　　⁷⁹²　　⁷⁹³　　⁷⁹⁴　　⁷⁹⁵　　⁷⁹⁶　　⁷⁹⁷　　⁷⁹⁸　　⁷⁹⁹　　⁸⁰⁰　　⁸⁰¹　　⁸⁰²　　⁸⁰³　　⁸⁰⁴　　⁸⁰⁵　　⁸⁰⁶　　⁸⁰⁷　　⁸⁰⁸　　⁸⁰⁹　　⁸¹⁰　　⁸¹¹　　⁸¹²　　⁸¹³　　⁸¹⁴　　⁸¹⁵　　⁸¹⁶　　⁸¹⁷　　⁸¹⁸　　⁸¹⁹　　⁸²⁰　　⁸²¹　　⁸²²　　⁸²³　　⁸²⁴　　⁸²⁵　　⁸²⁶　　⁸²⁷　　⁸²⁸　　⁸²⁹　　⁸³⁰　　⁸³¹　　⁸³²　　⁸³³　　⁸³⁴　　⁸³⁵　　⁸³⁶　　⁸³⁷　　⁸³⁸　　⁸³⁹　　⁸⁴⁰　　⁸⁴¹　　⁸⁴²　　⁸⁴³　　⁸⁴⁴　　⁸⁴⁵　　⁸⁴⁶　　⁸⁴⁷　　⁸⁴⁸　　⁸⁴⁹　　⁸⁵⁰　　⁸⁵¹　　⁸⁵²　　⁸⁵³　　⁸⁵⁴　　⁸⁵⁵　　⁸⁵⁶　　⁸⁵⁷　　⁸⁵⁸　　⁸⁵⁹　　⁸⁶⁰　　⁸⁶¹　　⁸⁶²　　⁸⁶³　　⁸⁶⁴　　⁸⁶⁵　　⁸⁶⁶　　⁸⁶⁷　　⁸⁶⁸　　⁸⁶⁹　　⁸⁷⁰　　⁸⁷¹　　⁸⁷²　　⁸⁷³　　⁸⁷⁴　　⁸⁷⁵　　⁸⁷⁶　　⁸⁷⁷　　⁸⁷⁸　　⁸⁷⁹　　⁸⁸⁰　　⁸⁸¹　　⁸⁸²　　⁸⁸³　　⁸⁸⁴　　⁸⁸⁵　　⁸⁸⁶　　⁸⁸⁷　　⁸⁸⁸　　⁸⁸⁹　　⁸⁹⁰　　⁸⁹¹　　⁸⁹²　　⁸⁹³　　⁸⁹⁴　　⁸⁹⁵　　⁸⁹⁶　　⁸⁹⁷　　⁸⁹⁸　　⁸⁹⁹　　⁹⁰⁰　　⁹⁰¹　　⁹⁰²　　⁹⁰³　　⁹⁰⁴　　⁹⁰⁵　　⁹⁰⁶　　⁹⁰⁷　　⁹⁰⁸　　⁹⁰⁹　　⁹¹⁰　　⁹¹¹　　⁹¹²　　⁹¹³　　⁹¹⁴　　⁹¹⁵　　⁹¹⁶　　⁹¹⁷　　⁹¹⁸　　⁹¹⁹　　⁹²⁰　　⁹²¹　　⁹²²　　⁹²³　　⁹²⁴　　⁹²⁵　　⁹²⁶　　⁹²⁷　　⁹²⁸　　⁹²⁹　　⁹³⁰　　⁹³¹　　⁹³²　　⁹³³　　⁹³⁴　　⁹³⁵　　⁹³⁶　　⁹³⁷　　⁹³⁸　　⁹³⁹　　⁹⁴⁰　　⁹⁴¹　　⁹⁴²　　⁹⁴³　　⁹⁴⁴　　⁹⁴⁵　　⁹⁴⁶　　⁹⁴⁷　　⁹⁴⁸　　⁹⁴⁹　　⁹⁵⁰　　⁹⁵¹　　⁹⁵²　　⁹⁵³　　⁹⁵⁴　　⁹⁵⁵　　⁹⁵⁶　　⁹⁵⁷　　⁹⁵⁸　　⁹⁵⁹　　⁹

ナシユはすたすたと歩きながら持っていた荷物を抱えなおした。この時は自らがしたことが面倒を引き起こすなど少しも考えてないなかつたのだ。

* * *

「中尉」

人事部から戻ったウイル・ヒギンズが静かにナシユへと視線を向け、視線がかち合うとすすすりとその視線を心持ち下げた。

「人事移動届けが出ているというが」

ナシユは普段と変わらぬ笑みを浮かべていたが、危うく舌打ちしてしまいそうになつた。

顔見知りの人事部長を内心でののしりつつ「自分の可能性を試してみたいと思いまして。不都合がありましたでしょうか」とあたりさわりのない模範解答を口にした。

決して、面倒くさい上官はイヤだなどと言つてはいけない。

「……兄が迷惑を掛けているのではないだろうか」

「ええまつたく」

その通り。

だが当然そんなことを口にするナシユではないのだった。

「勿論、君がどの部署を望むかは自由だ。私がとやかくいづべき事柄でないことは承知している」

ではとやかく言つた。

「君は優秀な補佐官だ。できればこのまま私付きのままでいて欲しい。それとも、私に何か落ち度があるだろうか　いや、厄介であることは承知しているが」

淡々と言われる言葉に、ナシユはだんだん自分が何か悪いことをしているような罪悪感に囚われ始めた。

面前にいるのは体躯のいいオッサンだというのに、何故そんなにも見事に捨てられた子犬臭を撒き散らすことができるのか。

しかも、人の胸を見つめながら。

ナシユは一旦天井を仰ぎ見て「できれば視線を合わせていただけるよいのですが」と嘆息交じりに口にした。いい加減そこに顔は無いと怒鳴りちらしてしまいたいが、面前のウィル・ヒギンズはぴくんっと反応し、ついでおそるおそるというように視線を上げた。視線がかちんと重なり合うと、よしよしといふ満足感がたちのぼりナシユはにつこりと微笑んで「では」と話の続きをしようとしたのだが、次の瞬間に言葉は凍りついた。

ウィル・ヒギンズは基本的に無表情な生き物で、隊内でもその生真面目さゆえに誰もが彼を前に口を噤む。

現在のウィル・ヒギンズは確かに無表情だった。

ただし、顔が赤い。

赤らんだ顔を必死にどうにかしようとしているのかその手は無意味に緩く握つたり解いたりを繰り返している。

視線を逸らしたい様子だが、先ほどナシユが言つてしまつた言葉を必死に実践する為にウィル・ヒギンズは息をつめて食い入るようにナシユを見ているのだ。

「……」

ナシユは思わず犬に命じるように「休め」と言つてしまいたくな

つた。

だがしかし現状は何故か上官と視線を合わせたまま、まるきりハブとマングース 蛇に睨まれた蛙状態。

食つか食われるかの凶悪な緊張で、視線をはずせば殺されると本気で恐ろしいものが腹部に蓄積されていく。

「ナシコ」

どれほどそうしていたものか、相手からやつと搾り出された言葉に、ほんの少しの緊張が解けて背筋に汗が伝い落ちた。

「君には私専任でいて欲しい」

おそらく、この時に何を頼まれたところでナシコは「はい」と応えていただろ。謎の恐慌状態を脱することができるのであれば、はいつくばりその靴先に口付けをしろといつ屈辱にも耐えた。

ナシコは上官の言葉にぶんぶんと顔を上下に振つて「了承いたしました」と口にして、軍属らしく長靴の踵ちようかを打ち鳴らしてぶるんっと身を反転させた。

「ナシコ」

やつと後ろを向けたと思つたら、今度は乱暴に一の腕を掴まれてしまつた。

完全に混乱していたナシコは、泣きそうな自分を叱責しながら「なにか?」とたらをふんで足を止めた。

捕まれば無様にもすつこりんでいたかもしれない。

「……昨日の休暇は楽しめたどうか」

「昨日」

子供のように相手の言葉を反芻し、ナシコは途端にワイト・ヒギンズのことを思い出した。

腹立しさと共に本来の自分を取り戻す。

「言っておきますが、ワイトさんが怪我をしたのは自業自得だと思

「今まで私が苦情を受けるのは間違っていると思います」

弟に頼りきつて生きているあの男のことだ、まさか「おまえの部下に酷い目にあつた」と苦情を向けたのではあるまいか。そう思えば更に腹立たしさも増していく。

「ワイト・ヒギンズ。今度はつたりあつたらもつと虚める。ネチネチと。」

ナシュの言葉に顔色を取り戻したウイル・ヒギンズはすっとナシュの首筋を一度なぞり、しばらく無言でナシュの腕を引き寄せた。
「兄は気に入つたものに時折意地の悪いことをする。君に悪さをしないといいが」

唇が首筋を吸いあげ、その意味するとこまで気付いたナシュは突然とした。

そこに、跡があつたのだ。鬱血した跡が。

キスマークをつけて歩いていた！

そのばかばかしさに血の気が引いたナシュは、同じことをした上官に対してワイトと同じように攻撃を仕掛けることもできない程動搖し、あわてて身を引き離した。

「失礼致しました」

「そおつ、指摘するならどうじてもつと穩便な方法を使わない！」

ナシュは大慌てで医務室に駆け込み、わざわざ湿布薬を塗布して包帯で巻き、拳句いつもは結い上げている髪を解いて軍帽をのせた。

「あー肩こりかあ。巨乳はつらいなー」

「生憎と付き合いが長い為、肩がこるかどうかという意味さえ判り

ませんよ」

ニヤニヤ笑う軍医を睨みつけ、ナシコはこの日の日記に　死ね、
ワイト！　と幾度も書き連ねることを誓つた。

いいや、それを指摘する為だけに同じ場所に触れるウィル・ヒギンズも大概だ！

しつかり記録していつかセクハラで訴えてやる。

ウイル・ヒギンズの観察記録5（前書き）

でも今日は別の人。

ウィル・ヒギンズの観察記録5

ナシュリー・ヘイワーズが軍属という道を選んだのは、姉であるシェリー・ヘイワーズの影響が多大にある。

「まあつ、お口がお上手ですこと」

豊かな淡い金髪に灰青の瞳。薄桃色のふわふわとした羽毛飾りをつけた扇で口元を覆い、ころころと愛らしく微笑むシェリーは誰もが認める美貌の持ち主だが、それと比べられ続けたナシュリーは自然と自分は決してあはなれまいと自分の将来を学問に定めたのだ。

美人は近くにおいておいてはいけません。

だが、学問を究めて研究機関である『賢者の塔』という別称のある場に入ることは適わなかつた。そして唯一残されたのが軍属とう道だつたのだ。

幸い、外勤に女性職務は無かつたが、事務官であれば募集があつた。試験までの一月鬼のように勉強にはげんでやつと軍属となり、こつこつと昇進試験に対しやつと手にいれたのが、

ウイル・ヒギンズの補佐官といつ職だった。

自分が求めたものと何かが違うのではないかと、ナシュは最近では思つてゐる。

「ナシュ？ その手のものは嫌いじゃなかつた？」

朝の時間、予定はあれども未だ時間が早い為に時間つぶしで官舎の1階フロアで雑誌を眺めていると、友人のダーシーがからかうように言つ。

「最近は田を通すようにしてゐる」

「今日の運勢はどう？ いいことありそう？」

「……新しい出会いがあるかも！ 心臓がドキドキバクバクしちゃうかも要注意つ」

「まあ、素敵ね」

楽しそうに言つダーシーだったが、新しい出会いはあるだりつと判る。何故なら、もう少ししたら馬を走らせて出かけるのだ。そしてそこにはいる人間はほぼ知らぬ人間だ。

「……本当に素敵な出会いならいいけどね」

新しい出会いなんて、道を歩いていたつてあるんだよ。

* * *

「……」

面前に立つ『賢者の塔』は資料室に無い資料すらも提供してくれるありがたい場ではあるが、それはすなわち自分が目指して挫折した場でもあるのだ。

「提出書類の記載をお願いします」

一階の受付で事務処理を淡々とすませていたが、ナシュは少しだけほろ苦いような気持ちを味わつた。本来であれば自分はここでのんびりと好き勝手に学問や本に触れて生きていた筈だったといふに、結局は道は違つてしまつていた。

新しい出会いとやらはいつたいどこに落ちているのか。面前の受付係をじっくりと見てみたが、生憎と心臓がドキドキしたりはしない。

「必要な資料は ああ、これは三階ですね」

受付係は淡々と言い、ふと視線をあげて声の調子をかえた。

「ルーク、ハイワーズ中尉を三階の東資料館に。古地図と水脈図を

幾つか探すのを手伝つて差し上げて下さ。」

「

その名前にギクリとナシユは身を強張らせ、おそるおそる振り返つてしまつた。

賢者の塔の住人らしく軍装のナシユとは違いいかにもゆつたりとしたローブのような衣装を身に纏つた癖毛の青年は、手にしていた荷物をカウンターに預け、静かに顎先でついてくるよつと示した。

ナシユはおそるおそるその後をついて行きながら、相手は自分を覚えていないのだろうとホッと息をついた。

確かに自分よりも四つ程年下のこの青年は、飛び級で学舎で学び歴代三位の若さで『賢者の塔』に入る事が許された秀才だ。

つまり、ナシユが学んでいる間も彼は時には下級生として、同級生として、そして上級生としていたのだ。年下だというのに。

数歩先を行くルークは階段をゆづくつと歩き、右回廊を進み、階段をのぼり、左回廊を歩き、階段をおりて、渡り廊下を歩き

「どこに行くんだったかな……」

迷子かよつ！

いつたり来たり、何故か階段を上つたり下がつたりするのでおかしいと思っていた矢先、ぼそりと相手の口から落ちた言葉にナシユは殺意を覚えた。

基礎体力はあるつもりだが、すでに息が上がつてしまつている。階段のぼつおりなどの上下動は思いのほか体力を削る。

「ナシユリー・ヘイワーズ、どこに行くのだったかな」

かつりと足を止めて振り返られ、ナシユはぐつと喉の奥で言葉を詰まらせた。

「……覚えてたんですか」

「いや? 今、見たことがあると考へをめぐらせていたら、自分が何をしていたのか忘れただけだよ」

「だから覚えていたといつのは正しくないよ。正しくは思い出したのであって、それについてもつこ今しがた……」

延々と訳のわからぬことを言い始めた相手をやがてやめた。

「判りました。とりあえず二階の水脈図と古地図のある資料室に案内して下さい。他のことは一切考えずに」

「判ったよ」

ナシコの言葉に短く返答すると、ルークはまたしても階段をのぼつたり下がつたりしながらナシコをつれまわし、だが結果としてはきちんと資料室への案内を果たしてはくれた。

半刻あまりもの間、うひうひとせせられた気持ちになり、ナシコは礼を口にしつつも「やけにぐるぐるとさせられたような気持ちなのですぐ」とげとげしく言葉にすると、相手は眇めたような視線をひたりと向けてくる。

「大事な資料が多いからね。ここは迷路のような作りをしているんだよ」

「どうか。それもそうかもしない。」

と、ナシコが納得しかけたところで、ルークはくるりと身を翻して「きつと」と言葉を付け加えた。

「……方向音痴なんじゃないですか?」

「右手を壁につけて歩けばやがて出口にたどり着くよ」

「」

「ところは冗談だけどね。ここは本当に人を惑わす迷路のような

作りをしているんだ。一般の人間は確實に半口は迷わされるよ。ついて来て」

まだ子供のような口調で吐き出される言葉に、からかわれているのか本気なのか思案しつつ、ナシユは大人しくその後に続いた。

「資料は？」

「各階の古地図と水脈源の地図を。軍にもあるのですが、どうも足りない」

「なんだ。君は軍属になつたのかい？」

「……軍服ですかね」

今まで気付かなかつたのか？

脱力しつつ応えると、ルークはしばらく無言で資料の棚を指先でなぞりながら「ぼくの妹は、軍属ではないけれど軍服を作り続けとぼそりといつた。

「はい？」

「騎士になりたいと昔から言つ子で、父が彼女の為に軍服を作る仕立て屋に頼んで彼女用に似たデザインで違う色彩の軍服を作り続けた。今は十五だが……普段からそれを着ている」

騎士。

ナシユはそれは考えたことが無い。軍属ということで基礎体力はつけられたが、あくまでもナシユは内勤だ。

体術はそこそこ自身があるが、剣などは体裁の為だけに持つているだけといつてもいい。

「騎士は……女性には無理な夢ですね」

この国には女性騎士は存在しない。軍属で女性を認めているのはあくまでも警備隊の内勤だけだから。だからそもそもナシユはそんな夢を抱いたこともないのだ。

「うん。でも一生懸命にがんばってるみるよ」

何を考えているのかいまいち判らない青年だが、ふと口元を緩めて微笑むから、ナシコはなんとなく好ましい温かな気持ちになった。

新しい出会いではないが、もしかしてこれはいわゆる 良い相手なのかもしれない。

年下だが、そんなに……

「ぼくが議会員になれればすぐにでも女騎士を承認したいところだけれど、生憎とまだ年齢的に達していないのが残念だよ。それに、この案件が通ったとしても、その時妹の年令は適していないだろう。何故父はぼくとあの子の年齢を近くしてしまったのか、はなはだ納得がいかない。ぼくがあの子にしてやれることは、時々勉強を見てやる」とくらいだけれど、生憎とあの子は勉強はあまり好きじゃない。幾度も窓から逃げられてしまってそのままつどとも悲しい思いをさせられたよ。一番年齢が近いのだから最も一緒にいられるように思つただけれど、長男がすぐにあの子を抱っこしてもらつてしまつし、三男は馬鹿みたいに甘やかすし 」

またかそれから延々妹の話がずらりずらりと続き、拳句の果てに「ルーク、その話はいったいどこに落ち着くのでしょうかね」と嫌味つぽく口にすると、ルークはやつと気付いた様子で口を閉ざし、ついで眉間に皺を刻みこんだ。

「ところで何を探せばよかつたかな?」

「……」

新しい出会いがあるかも! 要注意。

いや、そもそも新しい出会いではない。やはり占いなどちつとも当てにならない。これは違つ。まったく違う。

滅びる、妹フュチ。シスコンぬ。

激しい脱力感を抱きつつ資料を探し出し、またしてもぐるぐると塔内を歩かされた挙句に官舎にたどり着いたナシユは、ウイル・ヒギンズが静かな 威圧的な空氣の中で黙々と仕事をこなしているのを見て、なんだか少しほっとした。

「ルーク……あれは絶対に軍属にはなれないし、また上官などにも向かない。」

それに比べればウイル・ヒギンズは眞面目に仕事をこなしているし優秀だ。よし、まだいい。まだマシだ。

さわやかなよいこと探しをしなければ人生に挫折してしまっそうなナシユだった。

「確かに君は資料を探しに出ていたのではないだろうか？　もう夕刻に近い時刻だということは理解しているか？」

戻ったナシユに冷淡な言葉が飛ぶ。

ナシユは持つてきた資料を机の上に一団おき、上官の前で帰還の口上をつけついりと並べ、最後に言葉を付け足した。

「時間が掛かりましたことはお詫び申し上げますが、私が居ない間に何か不都合がありましたでしょうか？」

必要なものは全てそろえてから出かけた筈だ。何か足りませんでしたか？　ヒナシユが言葉を続けると、ウイル・ヒギンズはふつと瞳を眇めてどこか遠くを見るような眼差しでしばらく無言でいたが、

「君が足りなかつた」

とぼそりと口にした。

その意味をじっくり考えたくない気持ちになり、ナシユはいつもと同じように微笑一つで無視することにした。
触らぬ神にたたりナシ。

「紅茶、お入れしますね
「そうしてくれ」

＊＊＊

その日の記録を締めよつとじつ、ふと　　本田の口この内容を思い出した。

新しい出会いがあるかも！

心臓がドキドキバクバクしちゃつかもつ。

……心臓は確かにドキドキぱくぱくしたかもしれない。
ただし、激しい上下動で。

眉間にできてしまつた皺をなんとも揉み解しつつ、明日はもうと当たりそうな恋愛占いを見るかとペンをペン立てに放り込んだ。

男性にちやほやされ、それを楽しむ姉のショリーをどこか馬鹿にするように眺めていたナシユだったが、最近の夢は円満寿退社になりつつある。

ウイル・ヒギンズの観察記録6

ほんの意趣返し

ナシュリー・ヘイワーズは上官であるウイル・ヒギンズに扮したワイト・ヒギンズの前にこりと微笑んで紅茶のカップを置いた。勿論、ウイル・ヒギンズはミルクも砂糖も使わないのだから、ソーサーの上には味氣ないという理由だけでティ・スプーンのみ。なんといってもウイル・ヒギンズはどつかの誰かのように甘党ではないのだから砂糖など必要はない。

「どうだ」

「」

さあ飲みやがれ。

ぴくりと眉毛の辺りを一旦痙攣させ、けれどワイト・ヒギンズは慄懾な調子で「ありがとう」と返事をするとソーサー」とカップを引き取り、その香りを楽しむように胸元に運んだ。

ナシュは内心でこれが逆ならば面白いのにと多少残念であった。紅茶はそのまま飲もうと思えば飲めるだろう。だが珈琲であれば違う。もしワイトが紅茶に角砂糖四つ入れて飲む人間であれば、珈琲を砂糖、ミルクなしで飲むことはそもそも困難なことだつただろうに。

だが知るものか。

ワイト・ヒギンズ？ そんなヤツは知らん。

「中尉」

一礼してそのまま自分の席に戻りついたといひてワイトがゆつ

くりと声をかけた。

「なんでしょうか」

「……いや、いいんだ。すまない」

砂糖が欲しいですか？

せめてあまつたるくしたいですか？

むずむずと問い合わせたいと口元が歪んだが、ナシユは平然と相手を見つめ返した。

相手はしばらくじつとナシユを眺めていたが、やがていつもの
ウイル・ヒギンズのように平坦な表情で紅茶を口元に運び、そして
もくもくと合同演習の為の資料に視線を戻してしまった。

ほんの意地悪のつもりだったが存外楽しいものではなかつた。
だが、その後一日の間ナシユは同じことを繰り替えした。すなわち、
ワイトだと気付いていないフリを遣り通した訳だが、相手はそれを
純粋に信じた訳では無かつたようだ。

「中尉」

かたりと紅茶のカップをワイト・ヒギンズの前に置くとワイトは
じつとその紅茶のカップを見つめ、やがてゆつくりとした口調でナ
シユを呼んだ。

「なんでしょう」

「内密の話がある」

ちょいちょいと指先で招かれ、ナシユは眉を潜めたものの大仰な
テーブルをまわり、ワイトの横に立つと相手の囁きを拾う為に身を
屈めて指示を待つた。

「何か？」

「そんなに私に構つて欲しいとは、気付かなくてすまなかつた」
言葉にした途端、ワイトはぐつとナシユの襟首を掴んでその耳た
ぶに歯をたてた。

「つつ」

小さな痛みに怯んだところで慌てて身を起し、「ワイトセニア」と怒鳴りあげてナシユは自分の失態に気付いて呻いたが、あとのみつり。

ワイトは一瞬つめたい眼差しでナシユを睨み上げ、ふと口元に笑みをはいた。

「意地悪だな、ナシユ。私だと判つていてせつせと嫌がらせかい?」「……」

「そんなところも可愛いね」

ぶわっと鳥肌が全身を駆け巡り、ナシユは勢いをつけて飛び退つたが相手はどこ吹く風の様相で足を組みなおして命じた。

「珈琲」

ゾーキン絞るぞこの野郎つ。

わなわなと小刻みに震えてぐるりと身を翻したナシユの背に、ワイト・ヒギンズは軽やかな口調で言葉を続けた。

「悪いがこれからは君が運んできたもの全て毒見はしてもうつもりだ　おかしな小細工はしないよつこ」

角砂糖二つ先に入れてやる!

甘さの前に敗北しろ。

* * *

結論だけ言えば、ワイト・ヒギンズの舌は馬鹿に違いない。

角砂糖6つも溶けた　というか底のほうなどどろりと微妙に溶け残っている　珈琲をまったく気にせず飲んでいた。

あの男の血はきっと砂糖成分でできている。

蟻にたかられてしまふがいい。

「どうかしたかね、中尉」

しばらくぶりでウイル・ヒギンズを目にしたナシュは自分の目頭が熱くなる程嬉しかつた。

朝、ウイル・ヒギンズの執務室で一礼し、上着を受け取りながら大きく安堵の息をつく。その吐息が気に掛かつた様子で、ウイル・ヒギンズは眉間に皺を刻みこんだ。

「いいえ。このところお忙しそうでしたが、お元気そうで良かつたです」

詳しく述べてはいないが、今回数日にもわたつて入れ替わつていたのは軍内部の内部調査の為だとワイト・ヒギンズが口を滑らせていた。そんな極秘裏の仕事をこなしているからこそ、この双子が入れ替わつていることを上層部は黙認しているのだ。

ウイル・ヒギンズはじつとナシュの胸元を見つめているが、そんなこともまったく気にならない。この数日のワイトとの微妙な空気を思えば何のそのだ。

ワイトはまるで擬態したイキモノのようだ。

静かにもくもくとウイル・ヒギンズを完璧にこなしているというのに、時折思い出すように自分はワイト・ヒギンズだという存在を知らしめる。

うつかり気を抜いてウイル・ヒギンズに対するようにすれば、途端に足元をすくおうと動くのだ。

何がしたいのか判らない

どんな時も気が抜けないというのが数日続ければ、この慇懃な上官が戻つてくれた事実は實にありがたい。

ナシュは満面の笑みを浮かべて、

「紅茶をいれましょーか」

と、上着をハンガーに掛けてくるりと振り返ると、思いのほか近い

場所に未だウィル・ヒギンズが立つていてナシュは思わず「うう」と呻きそうになってしまった。

ウィル・ヒギンズの手がするりと腰に回り引き寄せた。とんとんと肩甲骨の辺りを軽くたたき、ウィル・ヒギンズは低く耳元で囁いた。

「君には本当に苦労をかける。すまない」

礼を言つのはいい。

その気持ちを表すのは結構なことだ。

だがそこまで大げさにする必要は絶対に無い。

自分とウィル・ヒギンズは上官と部下に過ぎない。そうだ、そういうふう。それ以外の何ものでもない。

硬直するナシュを手放し、ウィル・ヒギンズはさつと自分の席に戻つていった。
まるで何事も無かつたかのように。

いや……そうだ。何事も無かつたに違いない。
今のは上官が下士官を労つ極一般的な抱擁 ハグだ。ウィル・ヒギンズとハグ！ なんとも滑稽な気がするが、これは一般的なことだ。

ただの労い。それ以上でも以下でもない。

「中尉？」 どうかしたかね

「……ええ。いいえ、何もございません」

そう、何もない。

ナシュはいつも通りの微笑を浮かべ、一礼してその場を離れた。

まったく問題ナシ。

そう、まったく問題はない。

ウィル・ヒギンズが観察中

ウィル・ヒギンズがナシュリー・ヘイワーズという存在をはじめてその視界にいれたのは、彼女が軍務試験にパスして三ヶ月の研修期間に入った頃のことだろう。

女性登用は少なく目立つ、それに何より彼女は男達の間である種の話題をさらっていた。

でかい胸が。

ウィル・ヒギンズは別段性的嗜好は一般的の部類だと思っている。胸がでかかろうが尻がでかかろうが、何がどうというものでは無い。それに女性という生き物に対してはあまり良い印象はもっていない。それは彼の兄が女性に関係するトラブルを力いっぱい弟であるウイルに丸投げした結果、知らぬ間に汚名を流布されているだけだったが、日々の積み重ねにより彼は「女性とは近づきたくないものである」と自らの中に沈殿していく思いを放置した。

その近づきたくない存在である女性が自らの補佐官として任官したのは、まさに晴天の霹靂というものだった。

かなり「うらやましい」とやつかまれたものだ。

むしろ変わつていただいていいのだが、人事部の知人は「ああいうのは台風の目になつても困る。女癖の悪い男に預ける訳にもいかないのだから、おまえが一番無難だろう」と苦笑していた。

仕事上といったところで女性との付き合いなど不安と不満しかなかつた。

といったところで何がどう変わるものでもなかつたが。

ナシュリーとは仕事上でしか接点もなく、ウィルは会話を楽しむ

性質ではないしナシユーリーもペラペラと喋る人間ではない。

一月も共に過ごせば、まるで空氣のようにナシユーリーという存在がそこにゐるのは当然のようになつた。

彼女は黙々と仕事をこなしていくUIL同様、仕事はただ淡々と処理していく傾向があり、女性という細やかさなのかUILが次に何をしようとしているのかを察知して先手を打つて必要なものを用意してくれる。

便利なアイテムのように普通にそれを受け入れられるようになるのに、さほど時間を必要とはしなかつた。

ナシユーリーと仕事を共にすれば、自らの仕事も以前よりスムーズに進むことに慣れてくる。その余裕から、ふつとUILはナシユーリーを改めて見る時間ができた。

身長は一般的な女性にしては高いほうだらう。だが、身長百八十のUILとはそれでも相手の旋毛を見つけられるくらいの身長差がある。

体にぴったりとした軍服は胸元がやけに目立つ。

そのことにはじめて思い当たり、そういえばそんな噂があったと思ひ出す。そう、その程度だった。

直接じろじろと見るのはなく、半眼を伏せて観察しているとナシユーリーが微笑むのがわかつた。

「新しい資料が必要でしょうか？」

ナシユーリーはそつのない女性だつた。

どんな時も丁寧に接し、微笑み、動く。道端で卑猥な言葉を向けられた時に遭遇したことがあるが、ナシユーリーはそれをやんわりとかわしていた。

相手の男に対して不快な思いを抱いたが、受けるでなく悲しむでなくさらりとそつなくかわすのを見て安堵するような気と共に、その笑顔を惜しんで欲しいという奇妙な気持ちを抱いた。

ナシユリーの微笑みは媚へつらうものではなく、あくまでもふわりとさらりとしたもので人の心を穏やかにしてくれる。だからこそ、世の男共は気安く彼女に声をかけるのだ。だがそれは良くない。相手の男が勘違いしてしまえばそれは彼女の害にしかならないだろ。上官としてそれは許容できることではない。

一度彼女にはもう少し自衛について話しあうのが良いように思つが、仕事の話しかしたことがない自分達だからどう話をふつて良いものか。

それにもう一つ、気にかかるのは上官から命じられた特別任務のおりに入れ替わった兄のこと。

ウイルとワイトは双子であるという特性を生かし、時折上官に別任務を任せられることがある。それを逆手にとり、ワイトは上官にねじこんでウイルと入れ替わり自分の仕事をウイルに任せることもある。

つまり、彼等は時折自分達の場所を入れ替わることがあるのだ。今まで細心の注意をもつて幾度か行われていたそれが災いすることはないだろうと思つていたが、にわかに不安を覚えるようになつた。

「ナシユはかわいいなあ」とクッと喉の奥でワイトが笑つた為だ。ナシユが誰を示すことだか判らなかつた。

何故なら、ナシユリー・ヘイワーズはウイルにとって「中尉」であるのだから。今まで名前をはつきりと認識することもなかつた。

「なんだい、おまえはナシユの名前も判らないのかい？」

ワイトは呆れた様子で肩をすくめてゆっくりといいなおした「中尉だよ。ナシユリーというんだ。親しい友人はナシユ、もしくはナ

ツシューと呼んでいる。ああ、勿論私はそんな風には呼んでいないよ？ 私は上高、ウイル・ヒギンズだからね」 思い出し笑いをする兄は緩く腕を組んで壁に背をあずけ、首をかしげた。

「あの子ときたらとびっきり性格が悪いに違いないよ

その意見はまったく意味不明だつた。

何故なら、ナシュリーはいつだって柔らかく穏やかな笑みを浮かべている。命じれば何でも端的に返事を返し、きびきびと良く動く。そのナシュリーの性格が悪い？

ワイトは時折とても不可解だ。

しかし、ワイトは人の本質を見極めるのが得意だ。

その為に一本の針が刺さるよつてその言葉はウイルの胸に残つた。

その後も幾度かワイトと入れ替わりをしてみたが、そのつびワイトは機嫌が良くなつた。

一度などはまさか自分と入れ替わることでおかしな真似をしているのではなかろうかと危ぶみ、こつそりと仕事中の彼等を覗きにいつたこともある。

だが、その風景はいつもの自分とナシュリーのそれと変わらなかつた。ただ黙々と書類を処理し、そして部下に指示を『』える自分に扮したワイトと、その補佐をするナシュリー。だがわずかに浮かんだ苛立ち。

ナシュリーがやんわりと微笑みを向けているのはウイル・ヒギンズに対してのものだ。

何故か胸のうちでそんなことを呟いた気がする。

あそこに座っているのはウイル・ヒギンズ。いつもと変わらない自分。

ワイトは以前と同じように完璧にウイル・ヒギンズを演じてゐる。

何の問題はなかつた。

「「ひつに連れてきなよ」

あまつたるい珈琲の入ったカップを手に、ワイトは悪戯をたくらむ顔で言った。

「何の話だ」

「中尉だよ。ワイト・ピギンズに紹介してくれよ
馬鹿げた話だ。」

自分達が双子だと知られるのはどう考へても良くない。これから仕事に支障がでるだらう。秘密裏に命じられている内部調査などもあるのだ。ナシユリーにばれるようなことなどできよう筈がない。ワイトだとて理解しているだらう。

眇めた視線で無視をした。

ワイトが時折りふざけることは理解している。なんといつても母親の腹の中からの付き合いだ。きっと自分達を見極めることのできないナシユリーを前に新しい遊びでも思いついたのだらう。

そんな兄をウイル・ヒギンズは無視することにした。

そんな折りに数日の間一人で行かねばならぬ出張話が浮上した。別段それは構わない。問題は、その日はワイトに以前から入れ替わろうといわれていた日だということだ。

ワイトは確実にナシユリーで遊ぼうと思つてゐる。それはひしひしと感じているのだから、そんなワイトと女性副官を一人で出張などさせて良いものか。無理だ。それどころも元々のワイトといえば女性に対して無礼な振る舞いをすることがあるのだから。

「「」の週末は入れ替わる約束だつたるう」

突然予定をかえられたことにワイトは憤りを見せたが、なんとか説き伏せた。

翌日から入れ替わり、ワイトの仕事をこなし そして出張の翌日、朝っぱらからウイル・ヒギングスが知らせた「事実」はウイルの脳裏を真っ白に塗り替えるものだった。

ナシユちゃんの処女はいただいた。むつちつおっぽい馳走様。

咄嗟に信じられないような悪態が口をついた。到底女性の前で吐き出していくような言葉ではないが、そんなこと頼着されるものではない。

「ぶわりと血が逆流するような気持ちと共に、その時にやつと……そうやつと。

ナシユリー・ハイワーズは自分にとって不可欠な存在だ。

そのことに気付いた。

それまで意識していなかつたのではなく、意識しないように勤めていただけだ。

部下なのだから。自らが庇護するべき相手であるのだから。極力見ないよう勧めていただけに過ぎない。

正面からはじめて見た途端、血が一点に集中してしまった。

意識した途端、もう視線を合わせることすら脅威となつた。ワイトがその場にいれば絞め殺してやつたろう。

だから咄嗟に言つたのだ。

「結婚しよう」と。

だが彼女はそれを受け入れはしなかつた。「そんなことは何でもないことだ」と。

憤りと吐き氣とが自分の体内を巡り、その日一日最悪な気分でどうにも処理できず、相手にも優しい気持ちを抱くことはできなくな

つていた。

無理に馬を飛ばし、温和なナショリーに諫められるまで彼女の身を気遣う気持ちさえどこか遠くに飛ばしていた。

いいや違う。彼女を抱いたのはワイトではなく、ウィル・ヒギンズだ。

そう結論づければ自分の内部が少しだけ落ち着いた。彼女が抱かれたのはワイトではなく、ウィルであつた筈だ。ならば自らが責任という名のもとに彼女を引き受けるのは当然だ。

だが、結局それはただのワイトの悪戯であることが知れた。はじめてナショリーに怒られたが、それはそれで可愛かった。

意識してしまうと困ったもので、それまで胸に興味がなかつたといつのにワイトのおかげであの胸が気になつて仕方なくなつてしまつた。

視線を合わせることも出来ず、視線は下がつてしまつ。下がつてしまふとあの胸があるのだ。

気にするなというのも無理がある。

これはつまりワイトが悪い。

そう、ワイトが悪いのだ。

ワイトのおかげで自分の中にわかに信じがたい程の独占欲が芽生えてしまつた。

相変わらずナショリーはウイルの言葉に微笑みをくれる。

思い切つて伝えた「専任^{わたしだけのあなたでいて}でいて欲しい」という言葉は激しく勇氣を

必要とするものであつたが、彼女は微笑んで受け入れてくれた。

「君^{さすがに}が足りない」と伝えた時も宥めるようにこいつと微笑んでお

茶をいってくれた。

さすがに職場で押し倒す訳にはいかないが、そろそろ一人の関係を進展させる頃合だろ。

わて、どうじょり。

ウィル・ヒギンズの観察記録7

後悔、とは読んで字の「」とく事柄が終わつたあとで悔いることだ。そう、つまり ナシュリー・ペイワーズは後悔していた。

生真面目な上官に対し、ほんの少しばかりの同情心が芽生えたのかもしれない。あほんだらな兄に虐げられて育つっていたのだ。多少性格がアレなのは仕方ない。

しかし、なんといっても未だ二十代なのだからもう少し人生というものを楽しめばいいと思い、連れ出したのが間違いのもどだった。

「ナシュウウ」

居酒屋【アルビオンの絶唱】は今日も兵士や騎士でもりあがつていた。騎士達は貸し切りにしてしまうことが多いが、今日はそういうこともなく色々な隊がまぎれている。

ナシュは馴染みの顔を見つけて上官を紹介し、こういった場では階級はあまり気にしてはいけませんと口をすっぱくして説明した。きっとウィル・ヒギンズの耳にはたこが一匹ぶら下がっているに違いない。

士官学校からの友人であるレニー・インはすでに適当に酒が入つていたが、さすがにウィル・ヒギンズの姿に一瞬萎縮した。一瞬だけだ。だが、ここが酒場だということを思い出したレニーは堅物のウィル・ヒギンズに気安く挨拶し、酒を酌み交わした。

そういうするうちに周りにいた兵士達数名でわきあいあいと飲んでいたのだが、やはりウィル・ヒギンズはなかなか場に馴染めないようだ。

たかが一日で何かがかわるわけではないだろう。ナシュは上官のフォローをしながらそれでも自分も楽しむ為に酒を飲んでいた。

そして、それは一刻近くもその場の人間に酒が浸透した頃合。こん

な場だから猥談も出るし、品の無い単語も吐き出される。そういうふうにいた雰囲気もウイル・ヒギンズにとつて悪いものではないだらうと思つていたが、突然レニーが動いたのだ。

「ナシユウウ」

その両手を突然卑猥にわきわきと動かし、むにりとナシユの胸を下から持ち上げるようにして、揉んだ。

「つぎや」

「あああ、この重み。この柔らかさがもおサイ」「一つ」

「おおおつ、糞つ、女同士は羨ましいぜつ」

げらげらと笑いが沸き起つる中、ナシユは脱力してレニーの頬を引っ張つた。

「いやらしい手つきで触らないように」

「いやらしい手つきで触らないと意味がなーい！　ふふふふ。よいではないかよいではないか？」

なんだそれは。

「少佐、少佐だってこの凶悪な武器はちやんと点検したいですよねえ」

酔っ払いレニーは突然酒をちびちびと飲んでいたウイルへと流し目を送り、ナシユは卒倒しそうになつた。

よくよく見ればウイルの半眼は伏せられ、なんだかよく判らないオーラが漏れている。

ひくりとナシユが引きつると、ウイル・ヒギンズは真顔で言つた。

「人の胸をもむな

……

「もおつ、少佐はお堅いんだからあ

「いやいや、俺も固いぞ。ナシュリーの柔らかな胸で癒してほ……」
品の無い下ネタで盛り上がっているところ悪いですが、今、人の
胸という単語が明らかに 人の胸と聞こえたのですが。
わたし

気のせいですか？ 気のせいですよね。

ナシュは引きつりつつ、気付いた。

この上官、すでに酒の量が許容量を越えているのではないか？
そのなんだか据わったような瞳とか、いつもよりだらだらと不機嫌
そうに垂れ流している何かとか。

ナシュはがばりと立ち上がり、皮の財布から二人分の酒代をがし
りと取り出してテーブルに叩きつけ、ウィルの腕をぐいっと引いた。

「帰りますよ！」

酒の量くらいきちんと把握して飲んでくれ。

おまえはいつたい幾つの子供だ！

ナシュは内心で上官をぼろくそに怒鳴っていたが、当然表面上はそ
んなことを臆面も出さなかつた。

「中尉、酒代は

「私が誘つたのですから、私がもちます。少佐はお気になさりや」

「そういう訳にはいかない

腕を掴んだままぼそぼそと言う上官を引っ張る。しかし、相手は
ムツとしたかのように足に力を込めて立ち止まり、ナシュが押して
も引いても動かなくなってしまった。

「少佐っ、ちよっ、動いてください」

「君におごつてもらう訳にはいかない

「判りました。判りましたから、とりあえず今は

店を出るぞ、このぼけ上官。

ナシュは相変わらずの無表情で酔っ払っていると思わしき上官を引
き立てるようにして無理やり店を出た。

早く帰るぞ酔っ払い！

宿舎へと向かう一本道を示すナシユに、ウイル・ヒギンズははじめのうちこそ引かれるように付いてきたものだが、そのうちにぱつたりと足を止め、無表情のままを見下ろした。

「とりあえず今は　」

足を動かせ、このでかぶつ！

ぐいぐいと引っ張つてやろうと振り返れば、酒臭い息が頬を掠める。左手が腰をさらい、右手がわき腹を抑える。わき腹に添えられた手がシャツの上をなぞり、胸の脇をかすめた途端、びくりと身をすくませたナシユの耳元で、ウイル・ヒギンズはかされたような声で囁いた。

「他人にあんな風に触れさせてはいけない」

「いや、あの……あんなの、女同士のじやれあいじゃ

いや、そうじゃないだろう。

自分の胸をどうしようとあんたには関係が無い。ナシユは狼狽し、どう告げればいいのか逡巡してしまった。

一里体を引き離したウイル・ヒギンズの湖畔の瞳がじっとナシユの瞳を見つめる。

「じやれあい？」

「そー……です」

低く唸るような言葉と、無表情が怖い。

何よりこんな場面を誰かに見られたくないという思いで辺りを見回し、ナシユはほつとした。

中途半端な刻限が幸い、繁華街から外れて宿舎へと戻る細い道には人の気配がない。そもそもあの店は王宮から近い場であるし、一般客など滅多にないような繁華街の外れだ。そこから宿舎までの一本道など人通りが少なくて当然

ほつと息をついたところで大きな手が下から掬いあげるようにな

つとナシユの左胸をなぞり上げた。

普段から女友達や、はたまた不埒な男達に幾度も撫でられたり掴まれたりした胸だ。本来であればナシユはそんな時の対処も手馴れたものだというのに、思い切り固まつた。

「ではこれもじやれあいだな

「ちょっ……少佐っ」

形と柔らかさを確かめるように優しくなぞり、重さを確かめるようを持ち上げる。酒の力も手伝ってか、ぞくぞくと背筋を奇妙な漣が這い登り、ナシユは狼狽した。

「酔いすぎです」

「酔つてなどいない

これだから酔つ払いはっ。

酔つ払いは大抵そう言つんだよー

「ちょっ、離して下さい」

「何故彼らが良くて私では駄目なんだ」「子供か？

そういう話か？

くそっ、酔つ払いはネジがぶつとんでいるのか？

ナシユは護身術の応用として相手の手首を掴んで身を引く方法を取るうとしたが、気付くと自分の背中はとんつと壁にぶち当たる。

「もうあんな風に触れさせてはいけない

さわさわと胸をなぞる感触が甘いうずきにかわりそうな恐怖。叱責するように淡々と言いながら体でナシユの体を押さえ込み、威圧するように上から言葉を落とし込まれる。

きゅっと胸をつかまれ、軍服という厚い地だといつのに的確に胸の中心にある部分を中指と人差し指の間で挟みこまれ小さな痛みに声が漏れた。

「ナシユ？ 聞いているね」

「な、なにをつ？」

相手の力から逃れようと意識が向けられていて言葉など拾い集めている場合ではない。しかし、返答の無いことが相手の不興を買ったのか、ウイル・ヒギンズはナシユの胸を押しつぶすよつこつかみ、耳元でもう一度言った。

「返事は？」

「はいっ」

威圧する言葉に慌てて応えれば、ふつとウイル・ヒギンズは吐息を落としてナシユの臉に唇で触れた。

「いい子だ」

酒臭い息が耳元で柔らかさをもつて囁く。

壁に押さえつけられたまま、このままどうなってしまうのかとナシユが焦りをつのらせる頃合に、問題の上面せきゅつと一層強くナシユを抱きしめた。

* * *

ナシユ……

その後、あのでかぶつの無表情淡々口調の上官は、普段は決して吐き出せれない、やけに色っぽい艶やかな口調でナシユリーの名を口にし、囁いた。

「気持ち悪い」

思わずペンを持つ手に無駄に力が入り、ナシユは「ふふふふふ」と肩を揺らしながら、折れたペンをゴミ入れの中に放り込んだ。

壁に向かつてしゃがみ込み、吐くに吐けない馬鹿上富の口に、ナシユは青筋をたてながら指を突っ込んだ。

腹が立つていればどんなことでもできるものだ。なんて自分は男らしい。どうして男に生れ落ちなかつたかと悔やみながら、ナシユは新しいペンの先端を火で炙つた。

吐いた後の始末もつけてきつちりと上富を官舎にて連れ帰り、寮長に引き渡した自分は本当に立派だ。

立派過ぎて涙がでる。

「あああ、放置すればいいじゃないか、馬鹿ナシユリー！」

気づいたところで後の祭り。せめて今はせこせこと日記でつづつ鬱憤を晴らすことしかできないナシユリーだった。

パパだ召喚してみひー

物心ついたときから父親とか母親とこういう人は居なかつた。

それでもちつとも寂しいなんて思つたことは無いのは、優しいおじいちゃんがいたし、あまり家には居ないけれど、パパがいたから。

パパは有名な召喚魔導師だつた。

召喚つていうのは、魔方陣と宝石や色々なアイテムでもつて魔獣や悪魔やらを引き寄せる術のこと。そして魔導師つていうのは、召喚魔術士達を指導することが許されたとっても偉い人だ。偉い人だから、パパはいつも忙しくしていて、ちつとも家には寄り付かない。

「ぱぱはぱぱであつてパパじゃない。六歳のファウリーには良く判らないけれど、血の繋がらない女の子を援助するのはパパだから。ちよつ、父さんもレイションも睨まないでよ。よし、じゃあぱぱこしどひー。ぱななりいだろ」と言つていたから、あくまでもぱぱはぱだ。パパだとおじいちゃんが怒るから、そこは間違えちゃいけない。

「ぱぱはよく「面倒くさい人だよね」と人に言われているから、きっと面倒くさい人なんだと思つ。

それに、ままが必要な時は、お隣のレイションのお母さんがいつだって手をかしてくれたから、ファウリーはちつとも寂しくなんか無かつた。

おとなりのレイションは十も年の離れたファウリーのお兄ちゃんだ。

でももうお兄ちゃんとは呼ばないとファウリーは決めた。

だって友達のレガッタに酷いことをしたし、カロウのことも虐めた。だからもうレイションはお兄ちゃんじゃない。

お兄ちゃんつていうのは、優しい筈なのに、レイションはちつと

も優しくない。だからレイシヨンはお兄ちやんは落第だから…… フ
アウリーの弟にしてあげよ。

ファウリーはぎゅっと手を握り締めた。

そうしてはじめて気付いた。

「レイシヨンが弟なら、ファウリーはおねーちゃんだ!」

なんて素敵。

とっても素敵!

あたしひてば頭いいつ。

ファウリーは有頂天になつてぱたぱたと駆け出し、三階にある自分の部屋の窓から勢いをつけて飛び出し、屋根の上を歩いてお向かいに伸ばしてある板の上を歩き、いつだつて開いているお隣の家の窓に入り込んだ。

「おにー……」

つい癖でお兄ちやんと言つてしまいそうになつたファウリーは慌ててがばりと口をふさいだ。

窓を開いて入り込んだ先は、レイシヨンの家の屋根裏部屋に当たる。

自分の部屋だつてある癖に、レイシヨンはここに入り浸つて小難しい本を読んだり、なんだか判らない数式と戦つているのだ。

その時も屋根裏部屋に置かれている木箱に寄りかかり、レイシヨンは本に視線を落としていた。

「ファウリー、きみんと下から来なよ。窓はぼくが通る道なんだから」

「だつてズルイ! おにー……じゃなくて、レイシヨンばっかり楽しそうなんて許されないんだから」

はじめて呼び捨てにされた当人は瞳を瞬き、その短く色素の薄い青銀に見える髪をかきあげた。

「レイシヨン?」

問い合わせ返す声は穏やかなものだった。

「そう！ レイションは意地悪だからもうおじーちゃんで呼ばないことにしたの。今日からはあたしがおねーちゃんで、レイションはおとーとね！ だから」

「とても素晴らしい筆の提案だったところに、レイションはいかにも「うわー馬鹿がいる」という生ぬるい眼差しで十年下の六つの子供を見下ろし、こつも通りその頭をべしりとはたいた。

「その脳みそ、もう少し皺を増やして出直して」

「くうううう」

ファウリーは「ま」さつと音をれたせた頭を両手で押されて涙田でレイションを睨みつけた。

「お

「お？」

「おまえのかーちゃんでべそおおひひひ」

「わーん」と身を翻してファウリーが撤退しようとするが、その襟首をとつ捕まえてレイションは窓ではなくその部屋唯一の扉からひょこっと廊下へとファウリーを放り出し、階下に向かって声をあげた。

「かーちゃん、ファウリーが母さんのこと出産だつてや」

張り上げられた声を最後にぱたりと閉ざされた扉に張り付き、階下からずんずんと足音も高く階上へとあがってくる恐怖の大王に、ファウリーは半泣きで扉をたたいた。

「おひつ、お兄ちゃん助けて！」

* * *

召喚魔術達人の為の書。

金色の飾り文字で書かれたぶあつい本の表紙を指先で何度も撫でる。召喚魔導師であるぱぱの蔵書から引き出した一冊は、幼い子供の心に激しい好奇心を呼び起こした。

その場にないものを召喚する。

知らないもの、知らない生き物。

本の中には色々な情報がひしめいているが、生憎と難しい文字が多くて今年やつとハツになつたばかりの子どもには理解できないところもある。

それでも、必死になつて解読した文字をつなぎ合わせ、そうして屋根裏に少しばかり不恰好な魔方陣を描いた。

心臓がどきどきする。

「えつと……あとは」

必要ものはカエルの干物とトカゲの尻尾。猫のヒゲとジキタリスの葉になんだか判らないレッドショール。レッドとくらいいだから赤いものに違いない。といふことでトマトを用意した。ついでに猫のヒゲは切つたら可哀想だから、じいちゃんの白髪で代用する。白くてちくちくするからきっと大丈夫。ネコの髭とたいして違わない。ジギタリスの葉が理解できなくて、「レイ、ジギタリスを頂戴」とお隣のレイションにお願いしたら、笑顔で頭を殴られた。

葉といづくらいだから葉っぱでいい筈だから、ジギタリスはほんれん草で代用。駄目だったら今度は小松菜とかでやってみよつ。

「よしー！」

準備はできた。

その全てをすりつぶしてじろつじろにして煮込んだ液体は激しくいやな色をしているし、においもかんばしくない。けれどもそれに、更に

「イキチ……」

生き血、だ。これってつまり、この自分の腕に流れているビクビくとした血。

顔をしかめながらそれでも勇気をもってナイフを掲げた。ふるふると震える手で、そつと、そおつと指先をふつり。

「いたいっつ

ふつんっと切れた指から血が流れ、咄嗟に自分の口でぢゅーっと吸いそうになってしまったけれど、違う。駄目、それじゃせつかく切った意味がなくなってしまう。

必死に自分を押さえ込み、ファウリーせきゅうと顔を噛んだ。

謎のぢゅじゅとした臭い液体にぽとりと落とす。

いっぱい入れたほうがいいかもしないけど、もう駄目。

我慢できなくて慌てて指先は口の中に入れた。なんだか美味しくない血は舌に絡んで顔をしかめた。

とにかく、まあ、呪喚の為の準備はできた。

弱冠八つの稀代の魔術師（自称）ファウリー・メイは嬉々として本を片手に呪文を唱え、そして問題の液体を仰々しく魔方陣にぶちまけた。

「ああ、あらわれなさいー 暗黒の獣。紅ドラゴンー。」

そしてあの憎つき、レイショーンを踏み潰して。
もう絶対に許さないんだからつ。

人のことを小馬鹿にして。いつもいつもいつもー！

でもそれも今日この時まで。泣いて謝って「ファウリー様、もうぼくは弟でいいです」くらい言えばちょっとは許してやるつ。
紅ドラゴンが踏み潰したらそれどころではないとまでは言えない、
浅はかな小娘ファウリーだった。

ぽわんとひるがる煙。ざわざわとざわめくその期待感にファウリーは瞳をきらきらと輝かせて叫んだが、すぐにその異臭を放つ煙にげぼげほとむせかえり、涙交じりに身をよじった。

必死に田じりの涙をこすりながら煙の向こうへ、そこには大人程の大きさの何かの存在を確認したが、あまりの田の痛みにぎゅっと田を瞑ってしまった。

白い煙が立ち消えて、そしてその場に現れた召喚獣にファウリーの笑顔はゆっくりと凍りついた。

「……あれ？」

びちびちと奇怪な動きの生き物は……手のひらサイズのタツノオトシゴ。

「たつ？」

ぴちっ。

「……竜？」

やがてぴちりとも動かなくなつたタツノオトシゴにファウリーは血の氣を引かせて青ざめ、慌てて「水つ、水つつ」 とタツノオトシゴをつまみあげて水道水を溜めた桶の中に放り込んだが、海の生き物であるタツノオトシゴは海水ではなく真水に落とし込まれて止めをされ、残念な結果を迎えることとなつた。

「……」「めん、『めんね、タツ。おまえはきっと生まれ変わつたら紅ドラゴンになるよ』

いや、もしかしたら前世が紅ドラゴンだったのかもしれない。そうだ、きっとそうに違いない！

庭先に「紅ドラゴンを前世に持つタツノオトシゴ」は丁寧に埋葬され、墓標としてファウリーの食べたアイスの棒が差された。

「でもタツの死は無駄にはしないわ！ 何より、召喚術は成功よ！」

ファウリーはしつかりと召喚術達人の為の書を握り締め、やがてクッククックと喉の奥を鳴らした。

「見てなさいよ、レイション！ 『ぎやふん』といわせてやるんだから」「ぎやふん」

「王立ちで不気味な笑い声を上げるファウリーの頭を背後からべしとたたき、レイションは平坦な口調で応えた。

「人の庭に勝手に穴掘るな」

「だつてうちの畑はこないだ豆を植えたばかりだもんつ。可愛い紅ドラゴンの転生体であるタツノオトシゴが肥料になるでしょ

「はあ？ 何言つてゐのさ」

「レイションは頭悪いからわかんないんですうううつ」

* * *

「なあにが紅ドラゴンだよ、糞ガキつ！」

庭先で『やんぎゃん』と騒いでいるファウリーとレイションを見下ろし、屋根の上から睡を飛ばしたのは黒髪に黒い瞳を持つ青年だった。

あぐらをかくよつにして屋根にすわり、苛々と足を振り動かす。『きつぎりと噛み締めた口元からは鋭い犬歯がのぞいた。

甘い、甘い匂いが誘いをかけたのだ。

カラメルのふんだんに使われたプリン。チョコレートを混ぜこんだ生クリーム。こんがりと焼けたシナモンと甘い蜜の香りがたっぷりとした焼きりんご。

空腹だった訳ではない。どちらかといえば腹は満たされていた。だが言つではないか、デザートは別バラ。

甘くてとろけるようなその香りの誘いに意識を集中させ、出所を探つて飛び込めば

そこは古臭い屋敷の屋根裏部屋。

そしてちまつこい糞餓鬼が、それこそ乳臭い糞餓鬼が、ありえないような材料を使って召喚なんぞをしてかした現場だったという訳だ

このオレ様を！　この偉大なる大魔術のオレ様を、トマトとほづれん草とジジイの白髪などで…！

ふざけんなっ！　せつてえ許せねえっ。

オレ様は偉大なる大魔術だというのに！

生憎とうかつに召喚なんぞされちまつたこのオレのこの恨み、絶対晴らさずばいられまい。

なあにが召喚魔術士だ、こまつしゃくれた糞餓鬼め。

ヒーとん邪魔してやるから覚悟しやがれ！

「 召喚されたショックで、慌てて身代わりとしてタツノオトシゴを残してやつたが、この先おまえが何かを召喚しようとした時には愚にも付かぬものを出してやる 」

恐怖に慄き涙しろ！

召喚術を行使すると何故か海産物を召喚する台所事情にのみ優しい大召喚魔導師ファウリー・メイの物語、ここに開幕。

* * *

しません。

また・召喚してみよー

一体何がいけなかつたのか？

ぐりぐりと薄茶の紙にペンを走らせながらファウリーは唇を尖らせ、うつぶせという格好で後ろ足をぱたぱたと動かした。

アルコールの香りがつんつと鼻につくような屋根裏部屋は、四方に置かれた魔法石のランタンが灯りを点し、そのぬくもりさえも伝えてくれている。

ファウリーの周りには幾つもの本が詰まれ、辞書も散乱していた。一見すると勉強熱心と感心されそうなのだが、ファウリーの勤勉さは完全に趣味と報復活動によつて支配されているものだった。

「ドーランはやつぱりちょっと高度すぎたわ」

ファウリーは独り言を呟きながら新たな魔方陣を紙に書いていく。先日この屋根裏部屋の床に直接書き上げた大きな魔方陣は、三日の間せつせとテッキブラシで磨いて一生懸命証拠隠滅を図つたものの、結局おじいちゃんに発見されてお尻を叩かれるといつ屈辱を味わつた。

しかもレイションは壁にもたれて薄ら笑いを浮かべて、

「子供のことだし」

と、底うようなことを言つていたが、おじいちゃんに告げ口したのはレイションに違いないとファウリーはにらんでいた。

足腰の弱いおじいちゃんがわざわざ屋根裏部屋まであがつてくるなんて早々無いことなのだ。

ひりひりするお尻で更に一日かけて丹念に磨き上げ、最後にはアルコールで消毒まですることとなつた記憶は生々しい。

色々とレイションに嫌がらせをしようと試みたけれど、なんといつても十歳という年齢差はいかんともしがたい。

レイションが道端で同級生の女の子達と話をしている時に、これこそ素晴らしい嫌がらせだらうとばたばたと駆け寄り、「おにいちゃん、こんなところで遊んでないでファウリーの勉強みてくれないと駄目っ」と腰に抱きついて言つてやれば、レイションは平然とファウリーの頭をなでて「わかったよ」と、そのままにこりと笑つて「じゃあね」と女の子達に手を振つてくること背を向けてしまつた。

レイション、超システム説を流布させてやろうとこの田舎見は、その場にいた女の子達の「レイションって優しいわね!」といつ言葉でうやむやになつてしまつた拳句、実際に勉強をみつけいやられたるという踏んだり蹴つたりの結末だったのだ。

そんなこんなで、ここまではやり口論見は結論を出した。

またしても禍々しい獣を召喚し、レイションへと復讐を考えたのだ。

とにかくことで、今日は魔方陣を紙に書くことにした。

紙なら処分が簡単! 破つて丸めて「ミニ箱に放り込めばいいのだから、今まで誰も考えなかつたとは驚きた。

ファウリーはやつぱり自分つて頭いいなあと悦に入りながら、鼻歌を歌い、それに合わせて足先を振つていた。

「今度はもっと小さくて、でもすんごーく威力のありそなのがいいわッ」

がううと口を開けると床がこよつきりと生えていて、レイションをがぶりと齧つてくれそうな生き物つてないかな。

傍らにある【よここのまじゅづじてん】をペラペラとめくり、丁

度良さそうな魔獸を物色する。大きさは犬程度でいい。顎が強くて、カツコイイのがいい。

頭の中であれこれと想像し、あるページでぴたりと手をとめた。猛々しい肉食の獣が前足をたしんつとふんばり、獰猛な口をがばりとあけてそこから発達した犬歯がきらりと覗く魔獸、牙豹のイラストにぶるりと身震いが出た。

「ファーウ」

怖い想像に顔をしかめていたところで、かすかな声が窓の外から聞こえ、ファウリーは慌てて持っていたペンを放り出してぱたぱたと屋根裏の出窓からによつきりと顔を出した。

ファウリーの家は三階建てで、更に屋根裏ともなれば随分と高い。玄関の脇で口元に手を当てて「ファウリーっ」と声をあげているのは、友達のカロウだつた。

特徴的なくたびれた帽子がひょこひょこと動いているのが判る。突然やってきた遊び仲間に、ファウリーは「屋根裏部屋にあがつてきてっ」と声を掛けようとしたが、それより先に隣の家の二階窓からレイションが顔を出し、何事かをカウロに言いつけ、二・三会話を交わすとカロウは肩を落とすようにして身を翻して駆け出しました。

「ちょっと 何してんの、レイションっ」

「何つて、ファウリーは勉強の時間だから帰れって言つただけ。宿題してるんだろうね？」

また阿呆な遊びなんかしていたら小学部にして奇跡の落第だ

「馬鹿にするんじゃないわよー。」

誰が落第などするものかつ。

ぐぐぐっと手を握り締め、ファウリーは猛々しいといつぱんに舌を打ち鳴らした。

「あたしはゆーしゅーなのっ」

「」の間のテストの結果をぼくが知らなことも、隠す場所変えたほうがいいよ？ もうワソントーン」

「ちよつ、人の部屋荒らないでよつ」

馬鹿にしきつた口調で階下の窓からひらひらと手をふり肩をすべりてみせるレイションにカチンときじ、ファウリーは出窓から落ちそうな勢いで指を突きつけた。

「見てなさいよ！ あたしは召喚魔術師なんだからつ」

「召喚なんてまだ言つてるの？ そんなことできる訳ないだろつ」

以前召喚したタツノオトシゴはその証拠を突きつける前にお墓を作つてしまい、その眠りを破つてはならないといつ優しさで掘り起こしてレイションに突きつけることもできなかつた。

だが、今回は違つ。

材料もちゃんともう一度用意したし、魔方陣はちよつと小さくて紙に書いたものだけれどきつと代用が利く。

ファウリーは「絶対にギヤやふんつて言わせてやるんだからー」ともう一度いい、またしてもレイションに馬鹿にしきつた顔で「ギヤふん」と返された。

「つづつ」

真っ赤になつて怒鳴りつけるファウリーは、ふいに冷静さを取り戻してふんつと鼻を鳴らした。

「そんなんに言つなら、あがつて来なさいよ！」

あたしのカレーなる召喚術をその目で見ればいいわつ

* * *

まつたぐ、また馬鹿なことをしだした。

ハチドリのような姿に擬態した悪魔は眇めた眼差しでファウリーを見下ろしていた。

一旦召喚されてしまった魔獸と召喚主は仮契約を交わされる。本来であれば 仮契約であるから一回の召喚で役割を了えられ、それさえ済めば自由を得られ、逆召喚によって元の世界へと戻される。だが、生憎と「悪魔」は逆召喚を受けていない。ファウリーは召喚されたものをタツノオトシゴであると思つてゐるから、まったく気にしていないので。いや、元々逆召喚すら知らないかも知れない。

おかげで自分の世界に帰れないといつ有様。

手つ取り早く召喚主であるファウリーが命を落とせば戻れるが、生憎と召喚された者は召喚主を殺すことはできない決まりだ。

ハチドリは光の届かぬ暗闇からじつとファウリーを眺め、ケツと危うく舌打ちしてしまった。

屋根裏部屋の中では、紙に書かれた召喚魔方陣 その前で絶対にそれは間違つていいだろうという謎の液体の壺を足元に置いたファウリーと、そのファウリーを生あつたかい眼差しで見下ろしているレイションがいる。

「やれるものならどうぞ」

という態度を隠そうとしないレイションは、腕を組んで左肩を壁に押し当てる立っていた。

「そこどもつくりと見ていればいいわ」

ふふんつと鼻を鳴らすファウリーは、小さなナイフを取り出し、口の中でもじもじと召喚の為の文言を唱えはじめた。

どうみても、それは子供の児戯でしかない。

壺の中身もでたらめであるし、唱えてゐる言葉も難しい単語は拾

えないのだろう。ところどころが抜け落ちている。

ハチドリは不機嫌そうに顔を顰めた。

その様子を見れば見るほど、どうして自分が召喚されてしまったのか理解できない。理解したらしたで自らの自尊心が偉いことになりそうだ。

けれど、ファウリーがそのナイフの切つ先でふつりと指に切れ目をいれ、ぷくりと赤い血が盛り上がった途端、ハチドリは自分の内部がざわりと鳥肌たつようなざわめきを覚えた。

甘い、渴望。

そつ、あの時と一緒にだ。

下らぬ技で召喚されたあの時。無視しがたい激しい欲求を覚えて咄嗟に来てしまったあの時と。

つつと血が壺に落ちると、それは今までの異臭ではなく極上の甘味のようにひきつける。

震えが走る程の動搖に驚いていると、壁に身を預けていたレイシェンが余裕のない程顔を顰めてファウリーの手からナイフを引き抜いた。

「こんな危険な遊びは禁止っ」

「遊びじゃないもんっ」

「とにかく、人間の血を使って召喚なんて駄目だ」

怒鳴るレイシェンを無視し、ファウリーはその壺の中身を歪んだ魔方陣の上にぶちまけた。

「我が呼び声に応えて現れよ、牙の王 漆黒の牙豹っ」

ぞわりと一気に走り抜ける緊張と激しい嫌悪感。

ハチドリは慌ててその姿を人形へと変化させ、その魔方陣から現れようとする未知の恐怖を力任せにねじ伏せた。

魔力と言ひ魔力を集中させ、開かれようとする召喚門を押さえ込む。

レイションは悪魔に気付くことなく、魔方陣からたちのぼる閃光と煙とに目をやられ、咄嗟にファウリーを庇うようにその腕の中に抱きしめて身を伏せた。

巨大な獣が自らの手の下で自由を求めて暴れるのを全力で阻み、それに重ねて魔方陣の上に自らの魔法をたたきつけ、別のものを無理やり召喚する。

邪魔をつ、邪魔をするなあああ。

獣の咆哮だけがアオオオオオオンっと耳に残り、獣がその門と魔力に押し戻されていくのと同時に、悪魔が門を押さえるために反対方向から出現させたものが、びつたんばつたんと紙の魔方陣の上で暴れた。

びたん。

「……うわー、すごいやあ

びびびびびびつつ。

先ほどの騒ぎなど無かつたのか如く、床に座り込んでその膝の上にファウリーを抱え込んだレイションが起伏の無い声で言つた。

「マグロ……」

呆然と呟くファウリーに、レイションは乾いた笑いを浮かべた。
「ザンネン、ブリだよ なんというか、まさかブリを出すとはね
！」
「ブリイイイツ」

レイシヨンの膝からはいでた小娘が卒倒するような声をあげているが

* * *

それビーハジヤ ねええええ！

それビーハジヤ ねえだらうが。

こいつ、この馬鹿娘。今いつたい自分が何を呪詛しようとしているのか判つていてるのか？

しかも、俺がいなければソレは呪詛門を通り抜けてこの場でこの一里四方までも蹂躪していたかも知れないと気付いているのか！
今はネズミの姿に変化した悪魔はふるふると身震いし、キイイイ
と鳴いた。

珍しくがらがらと笑つてゐるレイシヨンが床をたたいているが、フ
アウリーはびちびちと暴れている自分の背にも近いその魚を前に半
泣きでレイシヨンに指を突きつけた。

「おぼえてなきよおおおつ」

「忘れるなんて無理だつて！ ブリ、めむやくひや イキのイイブリ
召喚つ」

なにこれ、産地直送？

「レイシヨンのばかああつ」

だからそれビーハジヤ ねえつづつんだ、この馬鹿一人！

いつたいぜんたい、何故こんなことになるんだ？

なぜあんな出鱈田あんな強大な魔獸をつ。

一本足で立つネズミなど知らぬ氣に、ファウリーは「もあ、なんで魚！」と地団駄を踏んでいた。

召喚しません！

窓から堂々とファウリーの私室に入り込んだレイションは、出窓からとんと床におりたち、気安い口調で声をあげた。

「ファウリー、明日の」

勉強机に向かっている子供は、べつたりと机の天板になついていた。

「……まだ早い時間だつていうのに」

ぼやくと、レイションはやれやれと肩をすくめてファウリーの両脇に手を添えて抱き上げ、机とは反対側にある寝台の上に横たえた。ベッドメイキングなどという言葉を知らない寝台には毛布が丸まつて隅におりやられているものだから、それを引っつかんでファウリーの上に掛けてやると、レイションは肩をすくめてファウリーの机に戻り、小さな椅子に腰を落としてその机を探り出した。

左側の引き出しの一一番奥

二重底になつている板がぱこんと外れた。

手探りで引っ張り出した一冊のノートにはお世辞にも綺麗とは言ひがたい文字で「日記」と書かれている。

レイションは当然のよつにそれを開き、肩肘をついて顎を乗せて無造作に読み始めた。

ファウリーが日記を書き始めたのは小学部に通うようになつてからで、レイションがその日記の存在に気づいたのはファウリーが九つになった頃のことだ。

ノートはもうすでに三冊になつていて、一冊は見逃してしまったのが残念でならない。

時折りファウリーの留守を探してはいるのだが、なかなか見つからないのが難点だ。

「レイションは意地悪なんだわ。昔はもっと優しかった気がするのに。」

喉の奥がクツと音をさせてしまい、慌てて息を潜めた。

レイションの馬鹿！ いつかやつづける。

「相変わらず語彙が少ないなー」

笑いたいのは必死に堪えたが、思わず小さな声は漏れてしまっていた。

今日もレイションに頭を叩かれた！ 人を馬鹿って言ひほうが馬鹿って知らないレイションが馬鹿だと思つ。

「じゃあやつぱりファウリーも馬鹿じゃないか」

ペラリとページをめくり、この一週間程の日記を楽しく拝読していくと、ぴたりとレイションの手が止まった。

カロウがもつてきてくれた飴すんごく美味しかった。また一緒に遊びにいったらくれるかな。

「餌付けされてるんじゃないよ」

今日はナーライと遊んだ。カウロも遊ぼうって言つたけど、ナライ達の子は男の子と遊ぶのは嫌がる。どうしてだろ？ 亂暴だつて言つけど、カウロもマークスも優しいのに。カロウはいつもお菓子くれるの。

「ドードーの名前が無くなつたのはいいけど、カロウは少し邪魔だなー……ファウリーは食べ物に弱いのはどうにかならないものかね」

やれやれ。

ぱたりと日記を開いたし、レイションは一段田の引き出しの奥にもう一度日記を収めなおすと、寝台で毛布に抱きつぶつとしているファウリーを見た。

つい先日十になつたばかりのちびすけ。この辺りでは滅多に見ることもなことからとした黒髪と黒灰のような透明な瞳を持つている。

初めてレイションがファウリーを見た時、すでにファウリーは四つ程の年齢で、そして隣に暮らすパードルフが困った顔をしてその腕に抱っこして現れたのだ。

「すみません、コールストンさん。お乳つてできます?」

……パードルフはちょっと変わった男だが、どうやら四歳くらいの子供はすでに乳離れをしているといふことも知らない様子だった。そして十四歳の少年の母親が乳などないことも。

あげく常識知らずのパードルフはその子供を「ちょっと見といて下さい」と言つてその後半年近くもの間レイションの家に預けっぱなしにしたのだ。

ただしパードルフは召喚魔導師という職種の為にか金扱いは良く、その時に皮袋一杯の金貨をおいていったものだから、むしろレイションの母親などは憤慨した。

「JRの子は今日からひつかの子だよ!」

と、完全にパードルフを無視して言い放ち、レイションも数日もすればそのまま受け入れた。

「名前は?」

問いかけると黒い飴玉のような眼差しをまたたいて、不思議そう

に「ふあう」と囁く。

「ファウ？」

「りー」

続いた言葉に「ファウリー？」と確認すれば、じへつとうなづく。

「とー、たまは？　ヒーさま。かーさま？」

外国の子かと思ったが、言葉はきちんと通じるようではなかった。不安そうにパードルフを探しているようだつたけれど、母は無視して身を屈め「ファウリー、あたしがママだよ。こつちはお兄ちゃんのレイション。パパはいつもは遠いところで仕事しているが、丁度今日の夜は戻って来るよ。お腹はすいたかい？」

母の説明に不安そうに黒い瞳が揺れる。

「にー、ちや？」

とにかく、その日からファウリーはレイションの家族だった。

艶やかな黒髪の大人しい子供は、はじめのうちにそびくとしていたし、何かといえばレイションの足にはりついてはにかんでいた。ものめずらしい姿も手伝つて、町の人は遠巻きに見ていたけれど、そのうちにファウリーの姿は町に馴染んでいった。

時々意地悪な子供がいてファウリーの髪や瞳の色を嘲るけれど、そうするとファウリーは決まってレイションに抱きついて「どうしてファウリーはお兄ちゃんと違う色？　お兄ちゃんみたいな綺麗な色なら良かったのに」と潤んだ瞳でせつせつと語るのだ。

はじめてできた妹は、まるで壊れ物のように可愛くて仕方が無かつた。

「いやあつー　久しぶりい」

いつものように外で一杯ファウリーを遊ばせて、疲れて眠つた彼女を抱っこして自宅に戻ったあの日、満面の笑みで片手をあげて言ったパードルフを殴らなかつたのは今も後悔している。

呆気に取られていいるレイシヨンの腕からファウリーを取り上げ、眠っているファウリーの頬にチヨッショと音をさせ口付けたのだ。ぶちりと血管が切れそうになつた。

「寂しかつたかい、ファウリー」とパードルフは陽気な口調で言ったが、たたき起こされたファウリーはむにゅむにゅと口を動かし、パードルフを見て「だあれ?」と尋ね返した。

その時ほど胸がすつとしたことは無い。

パードルフは果然としてファウリーを見つめ、わざと「ひくふるふると首を振った。

「ま、まあいい。今日からは一緒に暮らせるからねー。父さんを説得して連れてきたから、日々の世話はおじこちゃんがしてくれるとよ」

「冗談じゃありませんよー!」

母は怒鳴り声をあげ、ファウリーはびくんと身をすべめた。

「ファウリーはうちの子ですっ」

「そんな訳ないですよ。ファウリーは俺のです ちょっと預かっていてもらつただけじゃないですか」

不思議そうにパードルフは首をかしげ、ファウリーを抱いたまま歩き始めた。

「ファウリー、帰つたらおじーちゃんに挨拶するんだよ」

「なに? ねえ、何……? ママっ、おじーちゃんつ、なんなの?」

泣き声をあげるファウリーで、レイシヨンは慌てて手を伸ばした。小さな手がレイシヨンの手にふれからみ、必死に救いを求めるといふのに、パードルフはひょいと容易くよけて肩をすくめた。

「ファウリーはつりの子だつ

「レイシヨン、ファウリーを可愛がってくれたんだね? ありがとう。でも我儘でおかしなことを言つちや駄目だよ」

違う。おかしなことを言つてるのはパードルフだ。

突然来て、傍若無人に子供を置いていつた拳句に連れ去ろうとしている。

けれど結局、ファウリーは隣の家に連れ戻された。

養育権というヤツをパードルフは主張し、預けている間の費用もきちんと自分が出していたことを証明したのだ。

幸いなことにパードルフは引っ越したりしなかつたから、ファウリーは毎日レイシェンの家を訪ねたし、それまでと何も変わらないかのようにも見えた。

でも、そんなのはまやかしだ。

以前のように一緒に起きたりしない。

共に食事をする回数も激減したし、お風呂にいれてやることもない。なにより、父親が引き取るのは当然のことなのだとなんとか納得させようとしたのに、パードルフはおかしなことを言つたのだ。

「血のつながらない娘を援助するのはパパだからパパって呼んで」

血が繋がっていないのにファウリーの所有権　イヤ、養育権を主張した意味が判らない。パードルフは父親ではないのだ。レイシェンはパードルフが大嫌いになつた。

大嫌いでありながら、他人には「尊敬している」と嘯く。当人には笑みを向ける。そうすることで自分の内にまったく別の感情を育て、隠し通していくのは難しいことだった。

突然ファウリーを連れ去られてはたまらない。

もともとパードルフなど隣の家にも暮らしているのかいないのか判らないようなん存在なのだ。警戒などされてファウリーを連れて行かれるくらいなら、いくらでも褒め称えてやる。

ファウリーはその記憶の中にレイションと暮らしていた半年あたりなどすでに留めてもないし、パードルフのことを「ぱぱつ」と言つて慕つてゐる。

絶対にファウリーは馬鹿だ。

考えれば考へる程腹がたつてくる。

レイションは机の上の魔導石のランタンを消し、薄暗くなつた部屋に浮かぶファウリーの白い寝顔に溜息を吐き出した。

「まったく馬鹿でしようがない」

ファウリーが馬鹿なのは仕方ない。

帰る家を忘れてしまつた愚かなファウリー。

あの時、手を離してしまつたから帰ることができなくなつてしまつたファウリー。

でも、大丈夫。

「あと五年くらいかな。少し長いけど、五年たてばうちに帰れるよ」だから、大丈夫。

レイションは小さく微笑を落とし、眠るファウリーの頭を一度撫でていつものように窓から軽やかに抜け出した。

* * *

本棚の上で飛びうねぎの格好でそれを眺めていた悪魔はかしかしと耳をかきながら「ぶつ」と鳴いた。

人間つづるのはおかしなイキモノだよな。

起きている時は怒らせてばかりの癖に、寝てゐる時はまるきり違う行動をとる。

おかしいながらもこの「人間」でやつを眺めて一年。
悪魔はそれでも一つ気付いたことがある。

「ガキの日記見て喜んでる人間は人間としてまずくねえ？」

残念なことに、悪魔は悪魔なのでそれ以前の問題でこの青年が色々
まずそのことにはまだ気付いていなかつた。

「ぱぱはつ」

泣いて泣いて、泣きはらした翌日。

ファウリーはぼうつかすむ頭で台所におりて、暖かいミルクとベーコンに目玉焼き、昨夜の残りのとろとろのローンスープにおじいちゃんの焼いてくれるおいしいパンという朝食を平らげた。

その後食器の片付けもそこそこに、おじいちゃんに昨夜訪れていたぱぱ 召喚魔導師のパードルフはどうしたのかと尋ねた。
本来であれば朝一番に叫ぶべきだったが、毎日の習慣で思いつきり朝食を食べてしまつたオコサマファウリーだった。

「ファウリーが寝た後に帰つたよ。ミルクのおかわりはいるかい？」
帰つた、というのはおかしな表現だ。

ここはパードルフの家なのだから。

だが、仕事が忙しいパードルフは実際に自宅にいることは滅多に無い。

昨日だつて突然訪れ、そして ファウリーをさんざ叱り付けて、うなだれているファウリーを宥めながら寝かしつけるまでの数時間しか在宅しなかつた。

ファウリーはパードルフが居ないという言葉に、おじいちゃんの言葉を無視し、慌てて階段を駆け上がった。
二段飛ばしで足音も荒く駆け上がり、思い切りパードルフの書斎のドアノブを引っつかみ キーンという硬質な音と共にその扉からバチンッと静電気の攻撃に短い悲鳴をあげた。

『あけちゃいやーん。えつちー』

耳に痛みをもたらす音と、パードルフの声と同時にドアノブの上に
ぐりゅんっと出現したのは、黒い奇妙なぶよんぶよんとした雰のよ
うなモノだった。

「くうつ

ファウリーはその気持ち悪さに咄嗟にドアノブから手を離したが、
未練からもう一度勇気を振り絞って手を伸ばした。

『いやあああ、やめてえ。痴漢よおお』

まるで襲われる乙女のようになりパードルフの聲音でソレが悲鳴をあげながら微弱の電流を流しまくる。

そつ、不愉快な声をあげているのはその黒いぶによぶによだ。

召喚魔導師パードルフの「封印」の為の召喚獸。

ファウリーはわなわなと身を震わせ、半泣きで叫んだ。

「ぱぱの馬鹿ああ

* * *

「おはよつ、ファウリー

医療魔法士の資格をとったばかりのレイションは、研修士の白衣姿で嫌味つたらしく笑みを浮かべていた。

レイションはファウリーの髪を毎日結い上げるといつ日課を持っている為、今もその手にはブラシを持っていたが、ファウリーは今田は絶対に髪を結わせてやるつもりなんて無かつた。

それどころか、もう絶対にレイションとなんか口を利かない。

「昨日、パードルフ先生が来てたんだって？ 言つてくれればいいのに」

レイションの言葉に、ファウリーは泣きはらした田で相手を睨みつけた。

「レイシヨンでしょー!」

「何が?」

「ぱぱにあたしが召喚したつてチクつたの、

口なんか利かないと誓つたが、もうすでにその誓いは破られた。

三歩歩くまでもなく忘れる鶏頭なファウリー、十一歳。

悔しくて悔しくて仕方が無かつた。

パードルフは召喚術を禁じた誓句、ファウリーにとても大事な魔導書の宝庫である書斎を出入りできぬよう封印してしまったのだ。

「チクつたなんて人聞きの悪い。さすが尊敬するパードルフ先生の娘だつて褒めただけだよ」

しつとレイシヨンは言つたが、パードルフに告げたという事実は言い逃れる氣は無いらしい。

ファウリーは小刻みに身を震わせ、ぎゅっと拳を握り込んだ。レイシヨンの告げ口のおかげで昨夜こつてりと絞られたのだ。

「召喚術を使用するには資格が必要で、その資格をもたないものは犯罪者として投獄されてもおかしくない。それがたとえ子供であつても!」

召喚魔導師としてのパードルフはそれを許すこととはしなかつた。召喚術の初步を学園で学ぶことができるのは、中学部に入つてから。それも基礎と召喚術に対する倫理、法律を学ぶだけで実際に召喚をするのは一年目に入つてから。

それも教師が居る場と決められている。

卒業までの間に試験をパスすることができれば、やつと高等部で召喚士としての専門課程を受けることができるのだ。

現在ファウリーは十一歳。さすがに色々とまことに思い、パードルフには秘密でこっそりと召喚の術を高めようとしていたのだが、いくらやってもファウリーは魚介類しか召喚できなかつた。それで先日思いあまり、十歳のときにレイションに禁じられた自らの血を使っての召喚を試みたのだが運悪くレイションにばれたのだ。

「レイションの馬鹿つ」

「なんとも。約束を破つたのはファウリーだらう。ぼくは血を使うのは禁止だと言つておいたのに。それを無視して阿呆な真似をするから悪い」

「つつつ。あんたなんて大つ嫌い」

「もうその台詞飽きた」

ふんつと鼻で笑われ、ファウリーは地団駄をふんでくるりと身を翻した。

「ファウリー？ 髪は？」

ふりふりとブラシを振つてみせるレイションに背を向けたまま、ファウリーは背負つた鞄のベルトを少しばかりずらしながら「知らない」と言葉を吐き捨てそのまま石畳の坂道を駆け上がって行つた。

腰までの髪が鞄の左右でざんざいで揺れている。

普段であればきつちりと左右の三つ編みに結い上げ、頭をくるりとめぐらせるようにして止めている黒髪。今日はざんざいに櫛は通したものだが、好き放題に伸びて鞄の上も跳ねている。

それを瞳を細めて見送り、レイションは吐息を落とした。

「また朝から喧嘩？」

窓から顔を出した母親に、自宅の階段に座り込んでいた白衣の息子は「ラシを振った。

「喧嘩するほど仲がいいってね？」

「……嫌われてるようにならしか見えないけどね」

呆れるように眉を潜められても、レイシヨンは肩をすくめた。

「仲良しだよ」

* * *

真っ赤な目ファウリーが背負つた鞄の皮ベルトを掴むよつじて足音も高く歩いていると、突然「きつたなーい！」と嘲る声が響いた。

いつもと同じように今日は蝶の擬態でひらひらとファウリーの頭に張り付いていた悪魔は、その声にすうっとファウリーの頭を離れて近くの家の屋根で座り、ニヤニヤと人型に変化した。

最近のファウリーの天敵、二ナ・ローダというクラスメイトの少女は、それは見事な金髪をぱさりと片手でわざとらしく払つて見せた。

途端にファウリーの眉が一層潜まる。

ファウリーが通っている小学部へと続く坂道の先、同じ鞄を背負つた金髪の少女は意地悪く唇を尖らせていた。

「あんた本当に女の子？ 汚らしい真っ黒い髪。せめて結い上げておかないと見苦しいつたらありやしないわね」

結い上げていれば結い上げていたで「黒が際立つて汚い」と言つ癖に。

ファウリーは涙をぴたりと止めて、ふんつと鼻を鳴らした。

「今日もわざわざ」「苦労さま」

二ナは最近こうやって道の真ん中でファウリーを待ち伏せしてい

るのだ。決まってこの場所で。

嫌味を幾つか口にする習慣をつけたようだ、ファウリーはうそをりとしていた。

一ナは、ほら、レイション先生が好きだから。

と、氣の毒そうに友人のチエルシーが教えてくれた。

ファウリーからしてみれば「目が悪いの？ それとも趣味が悪いの？」と本気で心配になる事柄だが、さすがに今までそのことを指摘したことはない。

だが、今日のファウリーは違った。

たつた今、レイションと喧嘩してきたばかりだ。

こうやって訳のわからない嫌がらせを受けることもまたレイションのせいだと思うとむかむかとしてくる。

「どうせ寝坊でもしたんでしょうけど、女捨ててるのってどうなんかしら」

一ナが冷たく言つ葉に、ファウリーは覚めた眼差しで口を開いた。

女捨てているも何も、十一で女を前面にだしてくるほうがファウリーには判らない。男だの女だの面倒くさい。ファウリーに大事なのは、召喚魔術だ。

「女捨てていいだのどうでもいいわよ。どうくんない？」

「あんたつて本当に生意気！」

意味が判らない。

「レイション先生が優しいからつづけあがつてるんでしょうー！」

……ファウリーはますます顔をしかめた。

レイションは現在学園の隣にある医療療法士の塔で研修生をしていて、小学部の定期健康検査などの手伝いをしたりもするので、生徒

達の間では専ら「先生」といわれている。ファウリーは口が裂けても先生などと言つたことは無い。

そして何より、生憎とレイションが優しいなどという事実はまったく全然欠片も無かつた。毎日のように喧嘩している訳ではないが、いつたいぜんたいレイションのどこが優しいというのだろうか。

「……今までずっと黙つてきいてたけど」

ファウリーは淡々と言つた。

「二ナ、あんたつですっごく趣味が悪いんじやない？」

「なつ、何の話しよ？」

「レイションのどにがいいの？」

言つた途端、二ナは真つ赤になつた。

「なつ、何よあんた。何突然言つてるのよつ」

「……うわ、気付いてないつもりだったのか？ そんな馬鹿な。

ファウリーはあきれ返り、相手を無視してその横を通り過ぎようとした。しかし、相手は突然の指摘に逆上したのか、いきなりファウリーを突き飛ばした。

坂の上から。

自分より上にいた相手にどんどんと突き飛ばされたファウリーは、そのまま真後ろにのけぞつた。

慌てて左手で身を庇おうとしながら、自分を突き飛ばした相手を見返す。

それはきっとほんの数秒の出来事だったのに、ファウリーは相手の顔が怒りから驚きに変わり、口元が歪むのを確認した。

馬鹿じやない？

驚くならさんことしなけりやいいじゃないの。

石畳の上に体が投げ出され、鈍い痛みに小さな悲鳴があがる。幸い、背負っている鞄がクッショニになり頭を打ち付けるようなことは無かつたが、庇つた手首がぐきりと痛みを伝え、ファウリーは呻くように顔をしかめた。

顔を顰めながら二ナを見れば、さつきまで真っ赤だった顔が、今は青くなつて そしてふいっと顔をそらして駆け出していつてしまつた。

「……ひどい

「……」
石畳の上でこすれ、白く後になつたところには擦過傷。
ファウリーの顔が引きつったのは、痛みで確認ができないが手首のあたりから手がぱらーんと力なくうなだれている。
そして、手の平には小さな石が幾つもめり込み、ついで血が滴る。確認した途端に激しい痛みが身を襲い、ファウリーは奥歯を噛み締めた。

せめて骨折の有無は確かめようとおそるおそる手を振ろうとした

途端、大きな手がぐつとファウリーの痛む手を掴み上げ、そして

血に濡れた手のひらに生暖かな舌が触れた。

「え……？」

しゃがんだままのファウリーの後ろ、その肩を抱くよじとしてファウリーの手首を掴み、手の平の汚れなどものともせずにその傷口

を舐めているのは、黒髪の男だった。

* * *

それは抗えない甘美な誘惑だった。

ファウリーの体がどんと無遠慮に押された時、悪魔はいつもように足を組んで屋根の上でそれを眺めていたが 普段どおり、何があろうとただ傍観しているつもりだった。

ファウリーは悪魔の召喚主だが、悪魔はそれを認めていない。ファウリーへの復讐の為にこうしていつも近くにいるだけだ。

最近ファウリーと口げんかする人間が一人増えた。それに対しても何か思いがある訳ではない。ニヤニヤとファウリーとその子供のやりとりを眺めていたが、その小娘がファウリーを力任せに押した途端、不快な気持ちが湧き上がり、ついでファウリーが石畳に音をさせて叩き付けられた瞬間、辺りに甘い香りがほとばしつた。

甘い、甘くて抗えない誘惑。

ものを考えるということをさせない強い欲求が、悪魔を愚かな行動に走らせた。

とんつと地面におりたち、その甘い魅惑の根源に舌を這わせた。ところと赤い液体が舌に触れた途端に、どうしようもない程のざわめきが自分の中に広がっていく。

驚いたように小さくファウリーが声をあげ、慌てて悪魔に捕らえられた手を引き戻そうとする。それが途端に腹立たしく感じた。強く押さえつけて、もつと もつと欲しい。

欲望のままに求めようとした途端、突然げしりと横合いから蹴りをいれられた。

「どけ、この変質者！」

力任せに、容赦なく悪魔に蹴りを入れたレイションは更にもう一撃、自らの持っていた鞄で悪魔の頭を力任せに殴りつけ、そのまま未だ石畳の上に腰を落としているファウリーの一の腕を掴んで立たせた。

それまで甘美な酔いに身を震わせていた悪魔は、突然の攻撃の意味がまったく理解できずに頭を抱えてうずくまつっていたが、何かを考えるより先にもう一撃、レイションの蹴りを受け、その場にへたり込みそうになつたが、だんだんと腹立しさが沸き立ち、反撃してやううと顔をあげたところで レイションの後ろにばたばたとこちらに掛けてくる警備隊の姿を認め、悪魔は面倒くせに舌打ちをしてその場から逃げ出した。

レイションは警邏隊に変質者だと告げ、自分もその後を追いかけようとしたが、ファウリーがよろけて短い悲鳴をあげた為にその足を押しとどめた。

「ファウリー？ 怪我させられたのか？」

「……いや、あの」

「何かされた？」

ファウリーは眉をぐぐつと潜め、てろーんつと力なくうなだれたままの自分の腕を見て、更に眉を潜めた、

「……もしかして、気遣われたの、かも？」

「何言つてる？」「?

「あの人にはかされたって訳じゃ……いや、手のひら舐められたけど」

「舐められた？」

低く唸るようなレイションの口調に、慌ててファウリーはぶんぶんっと首をふった。

いつもとはまったく違うぴりぴりとしたレイションの様子にファウリーは怖さを覚えた。まるで自分が怒られているかのようだ。

なんであたしが悪いかのよつて怒られてるの？

悪くないよね！

「せつぎ転んで！ 咄嗟に腕をついたらこんな感じになつちやつたの… それで、あの人… 傷を気遣つて？ くれたのかな？」
わざ口にしてはじめてファウリーは氣付いた。

「どう見ても変質者だろ」

わっか、自分の手のひらを舐めていた青年が　自分と同じよつたこのあたりでは見ることのない黒髪に黒い瞳であったことに。
慌てて駆け出して追いかげよつとしたのを、レイシヨンが手首を強く掴んで押さえ込んだ。

「怪我、見せて」

「それどひるじやつ」

「ファウリー…」

きつい眼差しで睨まれ、ファウリーは歯をぎゅうと嚙き結んだ。

自分が貰われつ子だとは知つている。

パードルフは隠そつとはしないし、隠し様もない。

ファウリーの持つ色彩は今まで誰も持つていなかつた。国がまず違うのだ。

「ファウリーはぼくの宝物だよ」とパードルフはさりと流してしまつ。父のことも母のことも教えてはくれない。せめて、自分と同じ色彩の人にはつてみたいと今まで思つていたのに、せっかく出合えたかと思えばコレだ。

ファウリーはレイシヨンの手に包まれ、治療呪文で熱をもちはじめた手を見つめた。

生暖かい舌先が汚れた傷跡を清めるように舐めていた感触がよみがえり、気恥ずかしさにぶるりと身が震えた。

「痛い？ 少し時間が必要だよ。今日は学校は休んで治療に時間をとろう 大丈夫。きちんと治せるから」
レイションが珍しく優しい口調で労わってくれるのが 気持ち悪い。

ファウリーは内心で顔をしかめながら、町の警邏隊が追いかけていった青年を思っていた。

……また、会えるだらうか？
いや、でももしかして本当にただの変質者？
舐められた手を思い、ファウリーは複雑な気持ちになつた。

* * *

「糞レイションぶつづぶす！」

その時、レイションとファウリーに変質者認定を受けていた悪魔はずきずきと痛む頭を抱え、屋根の上でレイションへの報復を誓つていた。

召喚した？

真新しい装丁の本には、召喚魔導基本の書と流れるような飾り文字で書かれていた。

中等部も三年目に入り、やつと自らの希望の通りに必修科目で召喚術科を選んだファウリーだったが、当然、基礎だとか基本なんて阿呆くさいものには興味は無い。

しかし、ファウリーは着実に「召喚免許」を手にいれなければいけないのでから、この道は定められた通りに歩まなければならぬのだ。

おじいちゃんは「あの阿呆と同じ道を行くな」止めて欲しいんだがなー」と肩を落としたが、別にばばであるパードルフが召喚魔導師であるからこの道を望んでいた訳では無い。物心ついた時から、ファウリーは何も無い場所に新たな存在を招く召喚という行為に憧れていたのだ。

何より。

おじいちゃんが言つようなどではなく、ただ単に腹立たしい幼馴染に報復する手段として手つ取り早いのではないかというのがきっかけだ。

目にも鼻にもつくれイシオンに何かやり返してやろうと思つた時、パードルフが所蔵している「召喚術の書」が目に付いただけなのだ。

「基本なんて今更学ばなくともね

鼻歌交じりに言つながら、それでもファウリーは自分の部屋の寝台に体を投げ出し、寝そべるようにして真新しい本を開いた。

ぱりと本をめくれば、そこには書かれていたのは国の法律だつた。

召喚は国法召喚第一條によつて定められたものだけが使うこととを許され、許可なきものは誰であると厳罰に処する。

いかめしい文体で書かれたそれに、ファウリーは顔をぐりと潜めた。

厳罰についてはパードルフにも聞かされた。

ファウリーは幼い頃に自分勝手に召喚術を使してしまつた。免許の無いものが召喚術を使用することが罪であるなどその当時は知らなかつたのだ。

一度田の召喚で現れたのは、ちつぽけなタツノオトシゴだつた。今思い出せば、ちつぽけといつこにはちよつぴり手の平よりおつきなサイズで違和感を覚えるが。

突然表れたソレに対し、海の生物だということをすっかり失念し、ポンプでくみ上げた生水の中に入れたことにアドメをしてしまつたことは、幼いファウリーにとって苦に思い出だ。

ついで一度田の召喚はブリだつた。

そう、ブリ。

体の側面にそれはそれは綺麗な黄色と青いラインの入つたぴっちぴちの新鮮な魚。

どちらの召喚も魔獣と呼ばれるものを召喚するつもりであったといふのに、何故か海産物だつた。

いつたい何がいけなかつたのか……調べよつてもその後パードルフによつて図書室に鍵と封印を施されてしまつた為に謎は謎のままだ。

学園の図書館も、召喚術や魔導書の類は一定の許可を持つものでなければ読むことが許されない。

「でも、それもオシマイ」
中等部の三年になり、召喚術を専攻すれば一応図書館の巡回許可がある。
まだまだ初歩の段階の書籍しか読むことは敵わないが、これからは毎日のように図書館に通つて召喚術を学ぶことができるのだ。
ファウリーはつまらない法律の書かれたページをさらりと無視し、ペラリとページをめくった。

喜びを示すかのようにその足が寝台の上で揺れている。

そんなファウリーの様子を、実は戸棚の上から眺めているものがいるのだが、ファウリーは相変わらずソレをはつきりとは認識できていなかつた。

幾度か何かがよぎるよつな気がしているが、虫や小型の生き物のようと思われる。大きさは時としてネズミ程。
実害という程の害を覚えてはいない為に放置しているが、実際はソレが四六時中自分に張り付いている悪魔だと知つた場合、激しい嫌悪感が膨れ上がつたことだろう。

悪魔は現在棚の上をせっせと清掃中。
細かい埃はくしゃみのもとです。

「それに、むかつくけどレイションが監督してくれれば召喚術だってやっていいんだし！」

レイションは召喚魔術師でも魔導師でもないが、腹立たしいことに教員免許を取得している。

教員免許を所有している人間は監督官をすることが可能なのだ。レイシヨンへの報復活動の手助けをレイシヨンにやらせることで、なんとも素晴らしい復讐のシナリオ。

ある意味、か・ん・ペ・き！

ファウリーは鼻歌交じりで本の文字をむさぼった。

「こやあああ！」

金切り声の悲鳴をあげて、ファウリーはがばりと体を起こした。召喚基礎の本の文字を視線が追えば追うほど、胃が引き連れるような思いを味わった。

まずファウリーの喉からつめき声を出させたのは、謎のマスコットキャラ、召喚獣の【しょうちやん】が博士課程を学ぶ学生が頭に乗せるような帽子をかぶり、偉そうに【はじめての召喚】について語つているところから始まる。

はじめての召喚は、とにかくイキモノ、ナマモノは避けること。【召喚術は相手の意思を無視して自らの元に召喚する強制力の強い魔術だから、決して初期の段階でイキモノを招いたらいけないぞ！ 技量以上のイキモノを召喚して食べられちゃうことはよくあるんだ】

そりつと怖いことが書かれている。

「食べられちゃうって……」

しおっぱなから紅ドリゴンを召喚してみたりとした記憶がまざまざとよみがえる。

脳裏に残虐なドリゴンがファウリーをがしづとその鉤爪のついた手でがつしつと掴み上げ、ギヤオオオオと炎を撒き散らしている場面を想像し、目元がひくひくと引きつった。

【自分の技量に見合つたものを「」と召喚して経験をつんで行
】

まるで小学部のテキストのような文体に苛立ちを覚えながら読み進
めていくうちに、召喚術の基本アイテムの欄がカラフルな図解入り
で書かれていた。

「なんか、あまりイイ趣味じゃないなー」

思わずぼそりと言ってしまったのは、使われている品物がどれも
「エグイ」様相を示しているからだ。

カエルの干物、クロトカゲの尻尾。猫のヒゲ
ふと、猫のヒゲにいやな記憶が呼び起^こされる。

「でもおじーちゃんの白髪で代用されるんだから、結構適當よね」
乾いた笑いが漏れたが、そのうちにどんどんと自分が使った品物
と書かれているものの差異に血の気が引いていく。

挙句、マスク^{トキ}キャラの【じょひちゃん】がやたら生真面目な調
子で念を押す。

「アイテムの使用法、分量はきつちつと調べて決して間違つては駄
目なんだ。召喚獣は君のちよつとしたミスを利用して、召喚主を陥
れることがある。召喚したらきちんと契約を交わし、名前を与えて
ちゃんと自分の支配下におかなくちゃ駄目だぞ」

……とりあえずタツノオトシゴはいいとして、ブリは食べてしまい
ました。

契約は勿論、名前なんて付けてない。

そして、引きつづつも文章を指先で追いかけるように読んでい

たファウリーだったが、最終的に堪えられずに悲鳴をあげたのだ。

幼い自分のやつた愚かな行為が恥ずかしくて。

「うわっ、うわあっ。やだ、ちょっと自分バカすぎ。ビリジョウ。恥ずかしいっ」

突如として胸に飛来する羞恥心。

召喚術にトマトとほうれん草を使ったのはもしかしたら自分だけかもしれない。

ファウリーは近くにあつたクッショוןを振り回して寝台に幾度も当てて、最終的にそれを抱きしめるようにして「ばかー」と自分を罵倒した。

「何がバカなの?」

そしてはたりと氣付くと、自分の部屋の出窓を外側から開けてやけに堂々と部屋に入つてくる男が一人。

ファウリーは思い切り相手を睨みつけた。

「レイシヨンっ、来るなら下から来なさいよっ」

「こいつのほうが早いからね。それより、なに? さつきの悲鳴」

レイシヨンは勢いをつけて窓から室内に入り込むと、眉を潜めて寝台の上のファウリーを見下ろした。

召喚魔術の本とクッショൺとを抱えるようにして今は胡坐をかいて座っている十四歳の娘は、不機嫌をあらわすように唇を尖らせた。

「レイシヨンには関係ありません」

「もしかしてまたネズミでも出た?」

「ちょっと、どうしてネズミがいるのじつてるの?」

正確に言つのであれば、ネズミのようなモノだ。

時折目の端にちらつと見かけるのだが、それを確實に目にしたこと
は無い。なんとなくモノあるイキモノでは無いかといふ予想でファ
ウリーはソレをネズミではないかと疑っているのだが、勿論その実
態はファウリーがその昔召喚してしまった悪魔である。

現在は棚の上の埃を綺麗に拭き取り、得意顔で胸を張っていた
のだが、窓からの来客に顔を顰めていた。

「ぼくは千里眼だから」

レイシヨンはさつくりと言つてゐるが、彼の愛読書は日記と書か
れてゐるファウリーの勉強机の中に隠されているノートだ。

ファウリーが普段どんな阿呆なことを仕出かし、考へているのか
良く判る素晴らしい書物で、レイシヨンは一週間にいつぺんそれを
読むことを楽しみにしてゐる。

あまりに素晴らしい、時に赤いインクで添削してやりたい衝
動にかられてしまつが、とりあえず今はまだやつたことはない。

とっても高尚な趣味だとレイシヨンは自負しているが、ファウリ
ーにはらすつもりは今のところ無かつた。

もしされた場合、悪魔の存在以上にファウリーに激怒されるのは
目に見えている。もう幾度も突きつけられた「絶交」程度ではすま
ないだらう。

レイシヨンはまったく気にしないが。

「ネズミ、もしかしてレイシヨンの家からひきに逃げてきたんじゃ
ないでしょ？」

唇を尖らせるファウリーに、レイシヨンは片眉を跳ね上げた。

「もしかして話を誤魔化そうとしているんじゃないだらうね？ さ
つきの悲鳴は何？ その様子じやネズミが出たつて感じでもなさそ
うだし」

「 」

ファウリーは呻いて思わず横を向いてしまった。

「なんでもない」

ジギタリスなんて毒草だし。

ほつれん草で代用しちゃつたわよつ。

過去の失敗の恥ずかしさにのた打ち回り、思わず声をあげてしまつたなどと恥の上塗り過ぎて言えない。

自分の無知が恐ろしい。

もつじの記憶は永遠に封印してしまいたいが、じつこつた羞恥は突然何の前触れもなく、「いやあ」と声をあげだくつてしまつ黒歴史となるのだろう。

ファウリーはぶるりと身震いし、自分の頬が赤く染まるのを感じて思わずむにむにとつまんでしまつた。

「ファウリー」

冷ややかにファウリーの口をゆづくつとロードするレイシジョンを見上げて、ファウリーは唇を尖らせた。

「な・ん・で・も・な・い・つ・て・ば」

「学校で何かあった?」

「ああ、もおひるせいなあ。出ひつて」

ファウリーは顔を背け、寝台の上に放置されていた「召喚魔導基本の書」くと手を伸ばそつとしたが、それより先にレイシジョンがそれを手にしていた。

「専攻、召喚にしたんだ?」

「　　そう

「ファウリーのことだから、ちょっとやつてみたいとか思つてるだ
らう?」

ぴくんっとファウリーの体が反応する。

それを確かめるように見つめ、レイションは淡々と口にした。

「よければ見てあげてもいいけど。ああ、でもファウリーにはパードルフ導師がいらっしゃるもんね? ぼくが見てあげるなんておこがましいか」

レイションの言葉にファウリーはぐつと拳を握り込んだ。
確かに、ファウリーには保護者のパードルフがいる。宫廷の魔導師に名を連ねている超絶有名人だが、有名人なだけに自宅に戻ることなど滅多に無い。

年に両手の指だけ顔を合わせれば多い程だ。

そして、パードルフ以外に魔術に通じている知り合いといえばレイションしか居ない。

ファウリーが自宅で魔術を練習したいと願つのであれば、それはレイションに頼むほか道は無いのだ。

元よりそのつもりだったファウリーだが、まさか相手から言わ
れるとは思つていなかつた。

「じゃあ、ぼくは用無しだらうから帰るよ

あつさりと言い切り、手にしていた「召喚魔導基本の書」をぽん
つと寝台に放つて背を向けようとするレイションの腕を、ファウリ
ーは咄嗟に掴んでいた。

「レイつ

「ん? なに?」

レイションは色素の薄い瞳を細めて「なにか?」と呟き、「アウリーを見下ろしてくる。

ファウリーは何故か判らない屈辱のよつたものを覚えつつ、悔しにひきつる口元を動かした。

「見て、くれる?」

「んん? どうかしたの?」

もじもじと動くファウリーの口からこぼれた声が小さいのか、レイションは一旦離れかけた足を一步ファウリーの元へと戻し、少しだけ身を屈めて見せる。

レイションの腕に自分の手を掛けたまま、ファウリーは苦痛を堪えるように眉を潜めた。

「ねえ、ファウリー? どうかした?」

勢いをつけて言つてしまえばいい。

「冗談の練習がしたいから、時々監督官をして」って、ただそれだけの話なのだ。何より、今レイション自身が申し出たのだから、きっとレイションだって無下に断つたりしないだらう。

勢いだ。

思い切つて言えば

一旦伏せた瞳をあげ、思いのほか近い場所にレイションの眼差しを見つけ、ファウリーは危うく悲鳴をあげてしまいそうになつた。

「ぼくにどうして欲しいの?」

「う、あ……えっと」

「どうしたの?」

小さなファウリーの声を聞き入れる為に身を伏せるレイションは、まるで内緒話でもするよつに声を潜め優しく囁いた。

「何か頼みがあるのなら、ちゃんとお願いつて言つていらん」レイションが口元を緩めてその指先で頬に触れようとした途端、どすりとこう鈍い音と同時、レイションは突然「うぐっ」と呻いた。

「なに?」

がくくりと体制を崩したレイションの様子に驚いたファウリーは、レイションの足元に「」とつと音をさせて落ちたモノに大きくその瞳を見開いた。

「亀! つて、えええ、なに、何で亀? 」

ひつくりかえった亀は、ファウリーの声など完全無視でじたばたと四肢を動かしていた。

亀の種類などあまり知らぬファウリーだが、とりあえずすっぽんではなさそうだ。平らな腹を見せてなんとか爪先を床に当ててひつくり返りうどしている亀の姿は、やけに シュール。

「ファウリー! 召喚術は勝手にやっちや駄目だと言つてるじゃな
いかつ」

腰に突然亀が激突したレイションは憤慨を示したが、召喚術など行使した覚えのないファウリーはレイションと亀を交互に見ながら「いや、違うからつ」と慌てて言つてはみたが、レイションは信じてくれなかつた だが、

「もう一度とこんな風に召喚術を使使しないと約束してくれたら、ぼくがきちんと監督してあげるよ」

というレイションの言質はされたので、ファウリーはなんだか納得しきれぬものを残しつつも良しとすることにした。

それに、もしかしてあまりにもあたしが天才過ぎて知らぬ間に召喚してしまったとか!?

あぐまでも前向きなファウリーだったが、勿論そんな阿呆なことはない。

「ケケケケケケケケ」

ファウリーによつて【カメダさん】と名づけられた亀をさつやと川の海へと逆召喚した悪魔は満足気におかしな笑いを漏らした。

そう、亀は立派な海亀だといつのこと、またしてもファウリーは風呂桶の中に亀を放り込んだ。

さすがにレイションが塩を入れていたので、今回命にかかるような事態にはなつていなか。きっと朝田覚めてカメダさんがいないことにつァウリーは落胆するだろう。

しかし、その落胆を思つて悪魔は笑つているのではない。

「やまあみろレイションー！」

勿論、海亀を出現させたのは悪魔の仕業だ。

以前レイションに変態扱いされた拳句、蹴りをいれられた恨みは忘れてはいけない。

ことあるごとに何かしらの報復を考えていたのだが、今回はじめめと日々考え、ねちねちと練り込んだ完璧な計画ではなかつた。

レイションの指先がファウリーの頬に触れようとした途端、何だか腹立たしさを覚えて思いきりレイションの背中に着地してしまつたのだ。

アライグマの姿で。

掃除の為にちょっと小型のアライグマになつていた悪魔だが、ネズミならともかくアライグマがそういうことはまずいだろうとう認識くらいはある。

悪魔は咄嗟にその場に海亀を召喚したのだが、阿呆なファウリーとレイシオンはやっぱり愚かにも騙された。

「ばーかーだーよーなあああ。

ケケケッと笑いつつ、悪魔はひりっと寝台で眠るファウリーを見下ろした。

「レイシオンにこうじように扱われてるんじゃねえよ、ばーか

何といっても、ファウリーをこうじように扱つていいのは、積年の恨みを持つ自分のだから。

召喚……？

「相変わらずデブネズミみたいな髪ね。いい染料でも紹介しましょうか？」

腕を組むよひにしてふんと鼻を鳴らす二ナには特徴がある。決して他の人間の前ではそんな台詞を口にしたりしないし、言ひ時は決まって 坂道の下。

どうやら一度坂道の上からファウリーを押して怪我をさせたことをそれなりに気にしているらしい。

気にするくらいならもう止めればいいのに

ファウリーは内心で「またか」と歯を、二ナを避けて歩いた。

「無視する気？ 生魚のファウリー」

「へんなあだ名つけてるのつてまさか二ナじゃないでしょ？ ね？」
わすがにカチンときてしまった。

ナマザカナつて、何だってそんなおかしな名前にするんだ。

「あーら、生魚があ気に取らないのであれば、魚介類のファウリー」「……」

匪夷。

ファウリーは口元がひきつるのを感じた。

できるならば軽やかに相手を無視して通り過ぎたいのだが、二ナときたら行く先を塞いでいるし、言われたくないことをべらべらと喋り続けている。

「あんたがぎりぎり落第しないのは、食堂のおばちゃんに元に入られてるからって噂は結構信憑性が高いわよね」

違いますよ。

と、実は結構言い切れない為にファウラーはぐつと言葉を詰めさせた。

召喚実習で魚介類を出すファウリーは、課題をこなせないという点で確實に落第候補生だったが、それでも召喚することができるという能力を買われて、ギリギリ落第せずに今年一年への進級を果たしていた。

学園長じきじきに言われてしまつたのだ「本来であれば、課題をこなせていないのだから落第と言わてもおかしくはないのです。けれど、ファウリー・メイ　あなたの能力は決して低いものでは無いという教員達の総意がある。今回は一学年に進級を許します」

ただし。

そう、ただしと学園長は続けた。

「今年度中に海鮮以外の生物を召喚しなさい。
そうでなければ、召喚師という道をすっぱりと諦めてもらひ」とことなるでしょ?」

白髪のふくよかな女性学園長は結い上げた髪を一度撫でつけ、そつと溜息を落とした。

「あなたの海鮮召喚術は実にすばらしいものです。ただ、本来定められたものではないものを召喚することは大変危険を伴うと判断します。判りますね、ファウリー・メイ」

あたしだつて、好き好んで魚介類を召喚している訳じゃないわよ。ちゃんと課題の通りに、小型魔獣のリリックス 手の平サイズのスカンクのような生き物 を召喚しようとした訳だし、その為の薬草も全てきつちりと計つて間違わずに用意した。

だといつのに、出たのはサンマだった。

サンマ……旬のサンマはとっても美味しいですね。
あたしだって大好きだ。

「今日出た学食のサンマ、あんたが出したつてもうぱらの樽よ」「ナガ勝ち誇った調子で言つが、それもまた事実なのでファウリーはぐぐと拳を硬くした。

サンマが大量だったわよ！」

床の上をぴちぴちと飛び跳ねるサンマの体はたつた今海から無理やり引っ張つて来られたという様子で傷ひとつなく銀色の艶やかさ。きっと市場に出せばなかなかの高レートでさばけると思われるが、ファウリーの実習中は食堂の下つ端が何故か待ち構え、嬉々としてその魚を回収していった。籠で二つ分。

毎度毎度、扉のところで大きなケースを抱えてまつているあの男はいつたい何者つ。

嬉しそうに二コ一コと「ファウリーさん」とかほざいているあの料理人が憎い。

ファウリーはぎりぎりと奥歯をかみ締めた。

「なんとか言いなさいよ、魚屋ファウリー」「レイシヨンに振られたって本当？」

よし。

ファウリーは「覚えてなさいよーっ」と叫んで逃げていく二ナを冷たく見送り、深く深く、嘆息した。

何故魚介類しか召喚できないのか。

それは心底自分が知りたい謎だ。

先日もばばであるパードルフに泣きついてみたものの、パードルフ

自身が理解できないと苦笑した。

「ファウリーは才能があるよ。それは間違いない。けれど力のコントロールが難しいのかもしれない」

「のままでは召喚師としての免状を受けることはできない。この先もずっと、ずっと監督官がいる場でしか召喚ができないのだ。

ファウリーは一定の速度で歩いていた足を速め、逃げ込むように自宅の玄関を入れるとそのままの勢いで階段を駆け上り、三階の自分の寝台に飛び込んだ。

悔しくて嗚咽が漏れる。

才能はあるのだと、皆が言つ。

才能はある けれどそれだけだ。

能力のコントロールができなければ、召喚師として認めてはもらえない。

認められなれば、召喚術を使用することは許されない。それをすれば 即刻牢獄に入れられてしまうのだ。

「どうしてよおおつ」

子供の頃から自分は天才だと信じていた。

いつかそのうちにコントロールが利いて、きちんと召喚を行えると思っていた。

それが いつの間にか十六歳。

ファウリーが声を必死に殺して肩を揺らし、泣く様子を、本棚の上から真っ黒い毛玉が見下ろしていた。

ざ・ま・あ・み・る。

ケツと喉の奥を鳴らしながら、それでも悪魔はなんだか居心地の悪い感情に眉を潜めた。

ファウリーが泣いている。

それは自分が望んだ光景だ。

八つのガキの分際で、大悪魔である自分を召喚しくさつた糞ガキ。その糞ガキに復讐する為に今までせつせと下らなことに精を出してきたのだ。

どれくらい下らないかといえば、いちいちファウリーが作り上げる召喚門を押さえ込み、出てこようとする魔獸ではなく海産物シリーズをかわりに召喚してやるという親切の押し売りだ。

下らないことは重々承知している。

下らないからこそ復讐なのだから。

そうして、その復讐が実り、ファウリーが泣くのは心の底から歓迎してしかるべきだ。

ファウリーが召喚術行使するたび、せつせと繰り返した日々はこの涙の為ともいえる。

オレ様すげえい。

「……」

くふつと喉の奥で嗚咽を繰り返し、枕に顔を押し付けて小刻みに震える十六歳の少女を眺めながら、本日は耳のでかいきつねの格好に扮して尻尾でもつて棚の裏の掃除に励んでいた悪魔は、その大きな耳がだんだんとへたりと沈むのを感じた。

* * *

「昨日はよくもやつてくれたわね」

相変わらず二ナは坂の下にいる。

もうじつも趣味なの?

ファウリーは冷たい眼差しで肩に掛かる鞄の重みを軽減するように、学生鞄の皮ベルト部分を握り締め、そっと嘆息した。

「訂正すると、何もしてないわよ。書いただけで」

「どうしてあんな酷いことが言えるのよ?」

いやいや、二ナ。

その発言はブーメランだから。

ものすつごに勢いで戻ってるから。

「あなたの趣味がものすつごく悪いのは判つたから、あたしに構うのやめてくれない? あたしだつて好きでレイシヨンの隣に住んでる訳じやないし」

「なんて罰あたりなつ!」

罰あたりつて……

「昔はつ、あんたがレイシヨン先生の妹だからと黙つて優しくしてあげたのにつ」

怒鳴るような言葉に、ファウリーは瞳を瞬いた。

記憶を「じそこそ」と探ると、確かに遙か大昔 二ナとは仲良く遊んだ時期もあつたような気がしないでもない。

言われば、「そうかな?」程度の記憶なので、「昔から意地悪だつたよね」と誰かが訂正すれば、「そうだね」と塗り替えが簡単な記憶だが。

「それは残念ね。あたしはあんな外面ばつかの男の妹なんて冗談じ

やないけど

「誰が妹になりたいって言つてるのよつ

きいいいと怒る二ナはそのつむじに血管が切れるのではないだろうか。

ファウリーはやれやれといつも通りにその脇をすり抜けよつとしたが、本日の一ナは怒り心頭らしい。

がしりとファウリーの腕を掴んだかと思つと、今度は意地の悪い笑みを浮かべた。

「あんた、悪魔の子だつていわれてるの知つてる?」

「それは初耳だわ」

おそらく言い出したのは二ナだらうけれど。

「その真つ黒な目や真つ黒な髪! 悪魔の色だものねつ

別に黒は悪魔の色ではない。

ただ、いないだけ。

黒灰の瞳に真つ黒い髪の人間は、この大陸にきつとファウリーだけだ。

子供の頃に幾度かパードルフに「何故自分だけ色が違うのか」と問い合わせたことがある。

パードルフはファウリーを膝に乗せ、その黒髪を指にからめて笑つて見せた。

「ファウリーの髪はお母さんにそつくりだよ。とても綺麗な人でね。誰より強くて、誰より自信満々で 腰まである黒髪が艶やかで、オレはあの人気が大好きだよ」

「じゃあ……お父さんは?」

おそるおそると、途端にパードルフは不機嫌そうに瞳を眇めた。

「さあ。知らないんだ。気づいたらあの人はファウリーを抱っこしてた。抱っこして、自分の宝物だと黙っていたんだ」
ぎゅっとファウリーを抱きしめて、パードルフは明るい口調で言った。

「つてことで、あんまり腹立たしいからファウリーを貰つてきちゃつた。そのうちにあの人怒り狂つて追いかけてくるかなって思つたんだけど やっぱり色々難しいのかな」

遠いから。

くすくすと笑うパードルフに、ファウリーは小首をかしげた。

「あの人を迎えていたら、ぱぱがどれだけファウリーを愛してるか、あの人を愛してるかちゃんと説明してね？ ジゃないと俺殺されるかもしないし。何より」

パードルフはちゅっとファウリーの額に口付けて、とつておきの喜びを分け与えるかのように囁いた。

「あの人があれたらもう一度離さない。ずっと一緒にいてもらひうんだ。そしたら、あの人と、オレと、ファウリーでちゃんと家族だね。ぱぱはパパになつちやうね」

あの時聞いたことは、あまり考えたくない。

もしかしてそれは誘拐と定義されるのではないだろうか、とか。深く考へると色々とまざまづなので、ファウリーは「いつものぱぱの冗談」として流すことにしていく。

「聞ってるの、ファウリー？」

不機嫌そうな二ナの台詞に現実に戻され、ファウリーは嘆息した。
「悪魔でも何でもいいわよ。あたしはこの辺りの子供じゃない。レイションの妹でも、ぱぱの娘でもない。それで？ それがどうかしたの？」

「うとに、可愛くない。本当に悪魔なんぢやないの？」

二ナの激昂などいつものことで、ファウリーはふんつと顔をそむけて行こうとしたのに、顔を向けた先に人がいるとは、思わなかつた。

ばふりと鼻から人にぶつかつた。それは無様に。

「悪魔悪魔といひぬさいガキだな」

「なつ」

ぶふつと勢いをつけてぶつかつてしまつた相手を見上げ、ファウリーは黒灰の瞳が零れ落ちるのではないかといつ程見開いていた。

「黒髪黒目がなんだつつんだよ、このタコ。

世間にはもつと奇抜な色がわんさかいるぞ。

毎日毎日、ガキは家帰つて勉強でもしてる」

言われた二ナも瞳を見開き、ついで本当に悪魔にでもあつたかのように悲鳴を上げて逃げ出した。

逃げ出したい気持ちは良く判る。

黒髪に黒灰の瞳を持つファウリーはこの辺りではもう認知されている。

いまさら、二ナのようこいつるをくべ言つてくるものはいしないし、何よりファウリーの保護者であるパーグルフは有名で有力者で、そして厄介な相手であるから誰も好き好んで喧嘩を売つたりなどしない。

けれど、やはりこの国で黒髪は異質だ。

ファウリーは自分と同じ黒髪を持つ青年をじつと見つめ「あ、ガイジン」とつぶやいた。

それと同時に、やつぱり自分は「ガイジン」なのだとこいつ思いが飛来したが、それより先に手は動いていた。

「あのつ」

がしりと相手のシャツを掴みあげると、それまで唇を尖らせていた黒髪の青年が、ギョッとしたように飛び退ろつとしたが、ファウリーに掴まれていた為に阻まれた。

「うわあつ」

相手のあまりの慌てっぴりにファウリーまでおかしな声があがりそうになつたが、ファウリーは更に手に力を込めた。

「ここの間、会つた人ですよね」

「なつ、なつ、うおおおつ、俺何してんのあつ」

黒髪の青年は卒倒するような声をあげ、必死にファウリーの手を引き剥がして逃れようと暴れた。

「あのつ、ありがとうつ」

ファウリーの口をついて咄嗟に出た言葉は、何に対してもありがとうだったのか　先日、手を舐められたのはお礼を必要とする事柄であるのか、それとも今……今はかばわれたのだろうか。

まるで猫に見つかってしまった鼠のようにどぎはね、ファウリーの手が離れた途端駆け出して行つてしまつた相手に、ファウリーは落胆しながらそれでも必死に「あたしファウリーつ、あなたはつ」と名を尋ねてはみたものの、返つてくるものは無かつた。

当然だ。

黒髪黒瞳を持つ悪魔には未だ名は無い。

ぎょおええええええつ。

* * *

悪魔は一足先にファウリーの部屋に飛び込み、ぼふんつとその姿

を最近気に入りのイモリに変化させ
のだが、家守などという名前は悪魔的に縁起が悪いのでイモリ
自分を落ち着かせる為に冷たい窓にぺったりとひついた。

小さな心臓が激しく鼓動している。

ドクドクドクドクといつ心音を間近で感じながら、うおおおおと氣
分だけ頭を抱えた。

何だつて俺様つてばファウリーの前に立つてるんだよ。

駄目だろお。駄目だつてばよ。

ファウリーが虚められてこよつと俺には関係ねえってのに。
無意識の行動にあつあつとうめこっていると、遅れて帰宅したファウ
リーが自室に入り、鞄を机に投げ出し、そのままの勢いでばつたり
と寝台に身を投げ出した。

「うわあーっ、すい。やつぱり強く願えば叶うことってあるのね。
忘れないように日記に書いておかなくちゃ」

ぎゅうっとレイシヨン作の枕を抱きしめて、じゅるりと寝台で転
がるファウリーの様子を視界に入れて、先ほどまで動搖していた悪
魔は

悪魔は え、なにこいつ？

なにへラへラしてんだよ。キショッ。

と、別の意味で冷静さを取り戻した。

勿論　この日の日記を盗み見て冷静さなど吹き飛ばす男がどこか
にいるのだが、それはまた後日。

琴女

千八百五年 箱根の関所を抜けた山道にある大岩に腰をおろし、旅装束の娘は白木の杖を手にあふりと欠伸を一つかみ殺した。

時節は春。娘の年はといえば十七・八か。

大きめの瞳に黒緑の髪。艶のある髪を結い上げもせずに腰までたらし、下のほうで緩く結わえた姿は愛らしいが、何故か額には紫の鉢巻という一風変わったその姿は人目を引いた。

これがもし一人旅であつたならば、すぐさまどこぞに引かれ、若いその身は無残に散らされもしよが、娘には連れがある。

年の頃は彼女の父程にも離れたようにも見える男は山伏のような也をし、口元には無精髭が蓄えられ、その眼差しは厳しくあたりを睨みつけていた。

「琴、琴女 そんなに休んでばかりだと今宵は野宿になるぞ」

憮然と男が言えば、娘は唇を尖らせた。

「箱根の宿で泊まればいいじゃないの」

まだ関所は越えたばかり。ここはもとより宿場町ではないかと驚く娘に、男はもう幾日も手入れもされていない髪をかきあげたが、ずさんな髪に指が止まる。その頭は髪も結わはずぼらに伸ばして結い紐で結ばれただけだった。

「すくなくとも日暮れまで歩かなければ」

低く威嚇するような声で言えば、琴女はついつと視線をそらした。

「いーやーよ」

「琴つ」

「歩くのに疲れたわ。お風呂も使いたい。彦だつて臭いし汚い。近くにいる人間の迷惑を考えなさいな」

つんつと冷たく言い切る娘を忌々しそうに睨みつけ、彦 彦江は不精に伸びた顎髭を引っ張るように撫でた。

その時にくんつと鼻を一・二度動かしたのは、さすがに琴女の言葉が気に掛かつたのやもしけぬ。

「誰の為に先を急いでいると思つてる」

「誰もついて来て欲しいなんて言つてないわ」

ああ言えればこいつの見本のように突き返される言葉に、彦江はぎりりと奥歯を鳴らし、持つていた錫杖をがしゃりと鳴らした。

俺がいなぐば何もできないだろうに！

そう怒鳴つてしまいそつなのを必死に堪えた。確かに琴女の言つ通りで、彼女の道行きに半ば無理やりついてきたのは彦江のほうだつた。だがそれは七割がた彼女の為であり、一割がしがらみであり、自分の意思は残りの一割に満たない。

時折山道に放り出してやりたい気持ちになるが、それでも彦江はいつだつて耐えてきた。

「それにしても、江戸つてどんなからしらねえ」

産まれてはじめて江戸に入る娘は夢想でもしているのかにんまりと口元を緩めている。江戸の噂など数多耳に入つてゐるだろうといえど、琴女は小首をかしげた。

「田舎者とか？ 東者？ 悪口なら山と知れてるけれど、それはどこも一緒よ。あたしは京ばかりが良いことは思わないわ」

そう言つ琴女は都言葉を使おうとはしない。「お里が知れる」と笑うが、それは決して悪い意味では無かつた。

大岩に腰を落として歩こうとしない娘にげんなりとしているふいに空々しい程に明るい声が入り込んだ。

「足でも痛めなさったかい？」

穏やかな若者の言葉に琴女がびくつと反応し、相手の姿が年若く楚々とした いわゆる好青年であることに微笑んだ。

「ええ！ 長い旅に足を痛めてしまいました。難儀しておりますの。どこぞかに良いお宿をしりませんか？」

声音まで変えて媚びを見せる琴女の豹変に彦江は苛立ちを覚えて琴女の頭をにらみつけたが、琴女はすでに藍色の着物のではない着物の男に夢中といわんばかりの様子だ。

箱根に居を構えていると思しき男は、少しばかり淡く微笑み、ちらりと彦江を見たがすぐに琴女に視線を戻した。

一瞥で女の連れがただの用心棒風情と見たのだろう。

「私の知り合いの宿にお連れしましょつか。私の頼みなら宿賃も少しは融通してくれるだろうしね。立てますか？」

「よければ手を貸して下さる?」

琴女は口唇をゆがめて笑い、すがるように男に手を差出した。

「ご親切な方、特別に教えて差し上げますが内密に願います」

琴女はもつたいたぶつた口調で相手の瞳を覗き込み、囁いた。

「私は公家の日野の娘　内侍の局ないし つばなと呼ばれておりました。どうぞ琴女とお呼び下さいな」

* * *

「何故あんなことをひ

宿の部屋につくなり彦江が声を潜めつつも我慢ならぬとこよう
に言葉に力を込めた。

「ばれたらただでは済まんぞっ」

低く唸る言葉は自然と振るえを含ませる。

眼光は射殺す程の強さでもつて琴女を見ていたが、当の琴女はものともしない。

「あーら、ばれたりしないわよ」

くすくすと琴女は笑い、長い髪を払った。

「内侍の局がどんな娘かだなんて、誰も知らぬのですもの」
微笑を湛える琴女は、それよりもと部屋の中を見回した。

用意された部屋は十一畳程の部屋と隣には布団がしかれた二つ間になつており、しかも宿の離れという贅沢なものだ。わざわざ温泉までも別に引かれたそこは、偉い方を迎えるのに使われるのだと宿屋の主人は汗をふきふき言つていた。

「内密だと言つたのに、口の軽い男」

意地の悪い言いように、彦江は、ぶるりと身を震わせた。
宿屋の主人の下にも置かぬ扱いに、まるで不本意といつよつに琴女は寂しげに眉を潜めて囁いてみせるが、そんなものは演技に過ぎぬと長い付き合いのうちでよく知つている。

琴女は他人をそいやつてからかうのを楽しんでいるのだ。

「人に知られぬ旅にござります。どうぞ他言無用に願います」

公家に連なる日野の娘といえば、今上様の妹背とも謳われたこともある尊き姫君だ。よくよく考えればそんな姫君がこんな場に修験者のような也をした男と二人で旅をするなどあらう筈が無い。だが、高貴の娘といわれれば確かに琴女は神々しき娘に見えるし、そこはかとなく漂う妖しさがへんに説得力すらもたらす。いかめしい彦江はといえば、世を忍ぶ屈強な護衛にも見て取れる。

「それより、お風呂！ 温泉つ」

琴女は言いながらしゅるりと額に巻いた紫色の鉢巻を引き抜き、そのまま手から離した。途端、慌てたように彦江がそれを掴んで綺麗に置む。

琴女は我かんせらず着物の帯紐に手をかけてぱたぱたと隣室に作られている浴室へと足を向けた。

「琴女つ」

ぽいぽいと着物を脱いでいく女を呆れつつも彦江は追いかけ、落とされる着物の帯、腰紐と拾い上げては丁寧に処理していく。最後に汚れた足袋を拾い上げたところで、ぴしゃりと浴室の木戸が閉ざされ、大きく息をついた。

「一人で平氣か？」

呆れが滲む声を木戸へとむければ、盛大な湯の落ちる音と共に陽

氣な声が響く。

「髪を洗つて」

当然のように命じられ、更に深く息をつく。

まったく手のかかる女だった。着物にしても自ら脱ぐことはできるが、それを着るとなれば彦江の手伝いがなければできず、着せ方が悪いと難癖までつける。不器用で口は悪く到底一人で生きていくには無理がある。

その琴女が「京を下る」と言つた折りに彦江は覚悟を決めた。自らも行かねばならぬのだということを。そうでなければこの女は途中の山で野垂れていたに違いない。

脱ぎ散らかされた衣類をきちんと纏め上げ、当然のように着替えを用意していない琴女の為に自らが背負つてあるいている行李から洗つてある着物を一揃え引き出し、あとで自らの風呂の時にでも琴女の汚れた着物を洗つてやらねばなるまいとやれやれと呟いた。

「ひーーーー

「つるせーー

なんだか腹立たしさを覚えてだかだかと足音をさせて木戸を開くと、室内風呂の桶縁に頭を預けた琴女があふりと欠伸をこぼした。

「……」

湯には柚子がぶかぶかと幾つか浮かび、その一つを手の中で弄ぶようにしながら琴女は唇を尖らせる。

柚子と同様にまろく形の良い白きふくらみがふかりと覗くのを慌てて視線をそらすことで誤魔化した。

「足が痛むわ。眠る前に足をもんでも

「俺はおまえの下男か！」

怒鳴つてはみたものの、彦江は手馴れた様子で琴女の長い黒髪を手桶で流し、持参している石鹼を泡立てた。

湯殿に用意されているのは洗い品ときたら案の定『ぬか』で、こんなもので髪を洗おうものなら琴女は数日の間むつりと口をつぐ

んで不機嫌を示す。この石鹼一つで長屋暮らしの親子四人が半年は暮らせるところの女は本当に理解しているのだろうか。

髪を洗っている間、琴女はふんふんと鼻を鳴らして気持ちよさげに頭を謳つていたが、やがて仕上げに湯を打ちければ用は済んだとばかりに彦江を追い立てる。

彦、彦江、夜は怖い……

泣きながら彦江の手をぎゅっと握り締めていた幼い娘は改めんではあるまいか。 記憶

「ほひ、あんたもお風呂入りなさいよ。その無精髭もきつちり剃るのよ。あたしの共をするなりもつ少し身奇麗にしないと崖から蹴落とすわよ」

俺が落としてやりたい。

彦江はふるふると身を震わせていたが、身奇麗になつた琴女が着崩れた浴衣姿であらわれれば苦言も言つ気が失せた。

自然と手を伸ばしてきちんと整えてやのながら、眉を潜めて濡れた襟に苦言を落とす。

「髪の水気をちゃんととらんど

「それくらいできるわよ。あんた臭いつて言つてるでしょ」

まるで野良犬でも追うように手を振られ、彦江は自らの着替えの準備を済ませて琴女の汚れ物と自らの汚れ物を手に風呂場へと入った。

白い足袋に浅黒くついた汚れは血だろ。

長く歩き、肉刺ができて潰れてはまた新たな肉刺を作る。

彦江は琴女の足袋を丁寧に洗いながら嘆息した。

今日の琴女は岩を見つけるたびに足をとめてその重い尻をじしりと落としていた。本当に足が痛んだのだろう。無理をさせていたつもりは無いが、まだ年若い琴女には長旅は厳しいものがあるのだろう

う。だが、だからといって駕籠ばかりを使ってなどいられない。

懐に余裕のある旅でなし、最後の手段としてある銭刀の中身などできれば当てになどしたくはない。この宿屋だとて、こんな良い部屋を当てられてもその代価を要求されれば払うことすらできない。琴女が困惑氣味に「こんな高い部屋はお払いできませぬ」と言えれば店主が慌てて「めつそうもございません。尊き姫君から御代を頂くなどつ」と言つていたが 事態がいつかわるかもしれない。

彦江は暗澹たる氣持ちで首を振つた。

最悪逃げる為の算段をしなければならないだろう。

まったくいつだつて問題を起しきれずには居られないのだ琴女といふ女は。

内心で琴女への悪態を羅列しながら洗濯に励んでいた彦江は、足袋を洗い終わりついで無造作に手にしたもののが琴女の襦袢であることに気付いて小さく呻いた。

何故男に襦袢を洗わせて平氣なのか、琴女。

ならば自分の禪を洗え 洗つてみせろ。ののしりつつそれを想像した彦江は無言となり、ただもくもくと襦袢を洗いあげた。

京にいる家人には決して見せられない有様だ。大の男が女の襦袢を洗つているなどと嘆かわしい。だが、琴女にやらせたら最後着る服がなくなるおそれがある。

ぎゅっと洗濯物を絞り水分を切ると、空桶の中に放り込んでがらりと木戸を開け放つた。

「琴

声をかけたその場に、琴女の姿は無く、彦江は抱えていた桶をどさりと落とした。

* * *

「内侍の局」

「どうぞ琴女と。そもそも内密にとお願ひしましたのに

困惑を込めた口調に、藍色の着物の若者は慌てたように謝罪した。

「すみません。ですが、ああでも言わなければ部屋に空きがなく、大部屋などそれこそどんなやからがいるか判らぬ状態ですから」

「私には屈強な護衛がありますもの。ああ見えて彦江は忍びの流れのもの　どんな場でも私を守つてくださるのよ」

ふふつて唇をすぼめて微笑を落とした琴女は、まだ足が痛むようで座る場を求め、仕方なく柳の木の幹に背を預けた。

「しかし、京の都の姫君がこんな場にいるなど」

「あら、私が誰かはあなたは判つているのではなくて？」

唇をにんまりと歪めて琴女が微笑み、その指先を相手の胸元に添わせた。

「琴女様？」

「私は占女です。巫女として神域に住まうもの　お優しい方。

あなたの望みを、かなえてさしあげる」

妖艶な笑みを浮かべ、琴女は唇を引き結ぶよつこじて甘い吐息を落とした。

「ひと時の夢を『えてあげるわ』

琴女が上機嫌で部屋へと戻ると、彦江は部屋の中央で胡坐をかいだ胡乱な眼差しで琴女を睨みつけた。

その顔に無精髭はなく、元々親子程の年齢差を思わせていたといふのに、今は兄のように泰然とそこにいる。

「何をしていた」

「やあね、怒りっぽいのは嫌われるわよ」

琴女は言いながら袂から巾着袋を一つ取り出し、ぱんっと無造作に放り投げた。

がしゃりと音をさせて彦江の手に落ちたそれに、彦江は苦いものを

囁むような表情を浮かべてその中身を確認した。

黄金色に輝く小判が五枚……くらりと気が飛びそつた金額だ。

「売ったのか？」

「勿論。タダでなんてあたしは安くないわよ

「幾つ？」

「五枚。あんまりねだるのだもの。それ以上は駄目って言つたのに……どうしても欲しつて値までつりあげて。いけない人」

くつと喉の奥を鳴らして言う女を更に睨み、彦江は乱暴に立ち上がりつた。

「出るぞ」

「えーっ。今日はここに泊まりましようよ」

「この愚か者っ。おまえの『符』が評判になればなるだけ危うくなるんだぞっ。五枚だと？」

一枚きりだと幾度も念を押しているといつて、何故聞き分けぬつ彦江は言葉を吐き出しながら、どうしてこの女から田を離したかと自らを叱責した。

占いだけであれば問題は無い。琴女の占いに書は無い。失せモノを探し当てるくらいが関の山、未来は見通すことなどできぬのだから。だが、『符』は駄目だ。

琴女の扱う『寿ぎの『符』』は一枚だけ使うのであれば「幸せな夢」を与えるだけですむものだ。家族を失つたものがその家族の夢を見る恋するものをその腕に抱く夢を見るものもいる。たつた一度の幸福感に酔いしれるのであれば害はない。

たつた一度の夢は生きる希望となるものだ。

だが、人はただひとたびの幸せが幾度も続けばそれ無しで生きることがかなわなくなるのだ。

琴女はまさごうことなき神域に住まうもの。

だがその扱いを違えればそれは神の寿ぎから地の呪いへと変貌する。夢に浸りすぎるものはやがて身を破滅させるのだ。

その能力が災いし、京を出たのではない。京都とめよつとあるもの達が無理やつに閉じ込めよつとするから」か、そこから逃れたのではないか。

彦江は絶望の呻きを漏らした。

「きひんと約したわよ。年に一度だけ、その日だけと定めて使うようだ」と。決して他言は無用と

ふんつと機嫌を損ねた琴女だが、ことほり簡単に終わること無かつた。

「局様つ。琴女様つ」

今にも逃げ出やつと彦江が荷を揃えている頃合ひ、離れのその客室にあわただしく足音が迫っていた。

「なんといつー、あの男ときたひかつとも秘密を守れないのだわ

つ

憤慨する琴女だが、彦江はその両肩に手を置いて激しく揺さぶり「おまえは馬鹿かーつ」と叱咤しつけてやりたい気持ちを抑え、黙々と荷を詰めた。

琴女の共の名乗りをあげたこと

それは「つこつことであるのだ」と。

琴女の符はその後一年の間江戸の町で名をはせぬ。

だがその騒乱と公家の姫君の名を語る不図き者を江戸幕府は許さず、とつとつ琴女は牢獄へと落とされたが、その罰は江戸と云は扱い

故に江戸の民はまことしなやかに蹲したといつ。

琴女は正しく公家の姫であり、幕府はそれを保護、京へと送還したのだと。

したがそれは一年の後のこと。
琴女はこれより江戸へと下る。

悪代官への道

直参旗本といえば聞こえはいいが、その次男ともなればただの跡取りの代替品としての意味しかない。

外に放逐する訳にもいかず、ようは実家で飼い殺される人生。その人生に不満ばかりを抱えていた訳ではないが、似たような境遇の連中と酒と女に明け暮れて過ごすのは皆が通る道と言つて過言では無い。

幼名、中富次郎。

元服後の名は中富清治郎。

その名だとあまりにも適當すぎやしまいかと内心でぼやき、酒の席で友人にからかわれたものだ。

遊郭と居酒屋、賭場に通いむしゃくしゃとした人生をやり過ごす。それだとて金子は全て親や兄の世話になるしかなく、自ら仕事を求めるこどもできない下らぬ人生。

変えたいと望んだことがあつたとしても、それは兄を蹴落とすことに他ならない。

まつたく、ぐだらぬ。

「ふんつ。何が代官だ 地方代官になんぞなつたら、俺はせつせと悪錢を溜め込んで果ては樂隱居で面白おかしく遊興に励むぞ」

兄の清朗が地方代官という役職を受ける伝ができるといつ報告を肴に笑い飛ばした時期が俺にもありました。

「代官様つ、村のもんから喧嘩で怪我人が出たと訴えがつ

「ええいっ。知るかつ。んなもんは内証でせつせと済ませろ。いいか、いちいちこぢらに話を持ち込むな」

内証 つまり、ナイショだ。

いちいち公正に書類を起こして事件扱いにしていては、どれだけの金子が掛かると思つ。地方代官所に金があると思つなよ。

とこりうか、俺だつて金があると思つていた時期がある。

そう。地方代官になれば村や町の人間から錢を搾り取つて、商人と暗躍して大判小判がざつぐざくに飴あられな夢を見ていたものだ。

兄が流行り病でぼっくりあっけなく身まかり、その後に転がり込んできたぼた餅は、決して甘くはないものだつた。

葬式のあのしめやかさを携えて下男一人を連れて任地におもむけば、ついた場所は恐ろしい程の田舎だつたが、田舎には田舎の楽しみがあること自分を慰めたものだ。だが、その自分を慰めるという行為が連日続けば恨まずにはいられない。

兄よ、何故に俺にこんな役柄を押し付けた。

俺は確かに自分の人生にくさくせとしていたぞ。だが、あの時の俺に懇切丁寧に言つてやりたい。
お前は幸せだつたのだと。

「代官、大野屋さんをお見えです」
「判つた」

この村、町で一番の商人の出現に嘆息しつつ、一番口当たりの良い部屋にまで足を向けると大野屋雪也といふ名田上盲田の男は伏せた半眼をあげた。

雪也は所謂金貸しを副業としているが、金貸しといふ職業は特殊

なもので一般にゆるされてはいない。

「悪い、金を貸してくれ」

と清治郎が気安い口調で頼んだのが後のまつり「確かに金貸しは盲目だか坊主だかでないとできないんじゃありませんでしたか？」と雪也は首をかしげ、金貸しの地位を奪い取られたのだ。

この書類の偽造により、確かに清治郎は悪代官といえなくも無い。隠密と呼ばれる人間にばれれば代官という地位を奪われ、こつぴどい仕打ちを受けざるを得ない所業だ。

だがしかし、この郡は果てしなく貧乏だった。

背に腹はかえられん。

「雪也、以前の書類を精査して判つたんだが少し話しかけてくれ」

もう馴染みの商人の涼しい顔に少しばかり顔をしかめ、清治郎は持つてきた書類をじさりと落として自分も胡坐をかいだ。

「なんなりと」

雪也はうなずき、清治郎が差し出した帳面に視線を落とした。

「五年前まで収められていた年貢と、昨年の年貢とを比べると明らかに差異がある。昨年は凶作や何かがあつたのか問えば、そんなことは無いという。おまえ、わかるか？」

代官所の役人達は人手不足の為になかなかモノを知らぬ新しい代官の話を聞いてはくれない。

なんといっても、まつとう勉強などに励んだこともない新米代官なものだからその扱いは肥溜めの肥えより酷い。肥えは役に立つが、もの知らずの代官は役に立たない。それに構っている程暇ではないといったのだ。

「米を作る農家が減りましたから」

雪也はあつさりと言つた。

「なんだ、それは？ 米農家が減る？」

「ええ、彼等はこぞつて今や蚕産業に精を出してますよ」

蚕、といえば絹糸だ。

ならばむしろ年貢は増えるのではないか？

清治郎の眉が潜ると、雪也は実におかしそうに喉を鳴らした。

「年貢の率が違うんです。米ならこの辺りでは五公五民。半分を年貢で収めなけりゃならない。けれどお蚕さんは農家の妻のちょっとした内職扱いで、一公九民。つまり、一割足らずを年貢として収めればいいってことになる」

「……」

「当然うちの小作人達もこぞつてお蚕の育成にはげんでありますよ」

「……」と微笑を浮かべる悪徳商人の顔を睨みつけ、清治郎は危うくもつていた大事な書類をぐしゃりと握りつぶしてしまいました。

なった。

「くそ農家があああ」

「どうりでがつくりと年貢が減った訳だ。

だが、何が内職だ。思い切り本職にしているじゃないか。

「そんな話を聞かれたら、農民達が怒りますよ。それより、先田の貸付の話はどうなっています？」

「うつ……」

代官所の雨漏りが酷い為に屋根の葺き替えをしたのだが、屋根自体に腐れた箇所が幾つかあり、思ったより出費がかさんでしまった。その時に足が出た分をツケにしてあるのだが、悪徳商人は袂からそろばんを取り出すと、しゃらしゃらと鳴らした。

「まあ、色々と相談には乗りますよ」

ふんっ。何が代官だ 地方代官になんぞなつたら、俺はせつせと
悪錢を溜め込んで果ては樂隱居で面白おかしく遊興に励むさ……

「すまん。少し待つてくれ」

そんな風に思つていた時期が俺にもありました。ええ……

「刺繡が何の役にたつの？」

メイフェアーのように上手ならいいけど、私のようにヘタな人間はやらなくてもいいじゃないの」

窓辺に置かれたチェストが指定席だった。

それを椅子に、そしてテーブルに見立て、少女は自ら入れたホットチョコの入ったカップを揺らした。

猫舌の少女はふーふーと、かわいらしく息を吹きかけているが内容量は少しも変化がない。

十分に冷まさなければ、とろりと粘度の高い液体は簡単に彼女の舌の薄皮を引き剥がすといくつかの経験から彼女は承知していたのだ。

「そりや、できるにこしたことは無いと思うけれど……得て不得手つて言葉だつてあるでしょ？　えつと……なんて言つたかしら？　適材適所？　それだつていいわ」

子供らしい高い声が不満をたらたらと並べ立てていく。

窓からは明るい日差しが良く入り、チェストの上に広げられたハンカチに包んで持参したクツキーが幾つかのせられている。

そして話し相手は置かれた布人形。

不恰好な人形は、主に黒い布で作られ、その頭は白髪。

そこはまるで小さな茶会席のようだというのに、そこを一步離れるだけでそれ以外の場所は世界が違うかのように暗く、陰気な空気と薬草の香り、湿ったカビのような香りに包まれている。

その中、壁に押し付けるように置かれている寝椅子の上にもりあがつたキルトがもぞりと動いた。

「ずいぶんと難しい言葉を知っているな」

つまらなそうな声がそこから聞こえてくる。

低く老成し、重く疲れたような声。

上半身を起こしたのは、白髪の男だった。

いや、白ではなく、色を失ったと言つたほうが良いかもしない。老人のようなその髪の面は存外に若い。といつても未だ十二の少女にしてみればこの男は偏屈な老人と大差ないのだが。

少女は微笑んだ。

まるで相手よりもずっと年上のようだ。

「もう寝過ぎよ？」

「そうだろうな、小娘が屋敷を抜け出して来るのはそんな時間だ」つまらなそうな言葉。

キルトをばさりと跳ね上げると、黒いズボンに上半身裸の姿でゆつたりと歩き、少女の座るチエストまで近づくと、チエストの上に置かれていた紅茶のカップを持ち上げた。

見慣れたといったところで異性の裸に、少女の視線は戸惑いつよいにそられた。

心臓がとくとくと早く打つのは、なにも裸だけが原因ではない。その腹部に無残に残る引き連れたような跡。

それを利用するかのように茨のような刺青が入れられている。

そしてこの男の傷はそれだけではなく、今は見えぬ背にも幾つかの傷跡が残されていることを幾度か目にしたことがある。

「あ、ダメよ」

少女は慌てて声をあげたが、男は気にしない。

男の手に取り上げられたカップを見つめ、唇を尖らせた。

「それは、妖精の為のものなのよ？」

夢見がちな少女らしい言葉に、男は鼻を鳴らして笑う。

多少冷めてしまっていた紅茶は、喉を潤すのにちょうど良いく彼の喉を流れた。

ついでにハンカチの上のクッキーをつまむ。
昼食としては悪くない。

「おれの家でおれが何をしようと問題はない」

「そりや、そうだけれど」

「それで、領主館のお嬢さん。あなたは今日は何しにきたんだ?」「そう矛先を向けると、少女はふつとこわばつた。

その反応が判らず、男は首をかしげる。

「ねえ、ここを出て行くのですって?」

緊張をはらむその言葉に、男は口元を歪めて笑った。

「なんだ? 聞いたのか」

「叔父様が、言つてらして……ねえ? どこに行くの? 戻る?」

少女の瞳に宿るものに、男はますます楽しげな色を向けた。

この辺り一帯を治めているのは、少女の叔父だつた。彼女の両親はすでに天上へと召されて記憶すら危うい。彼女は叔父の屋敷で叔父の子供達と共に暮らしているのだ。

「王宮」

簡潔に答えてやる。

「戻るかどうかはしらん」

「……何で? 何をしにこくの?」

「仕事」

切つて捨てるような返事。

少女は一瞬泣きそうな顔をした。

「私も、連れて行つて」

「領主館のお嬢さん、莫迦な」とを口走つてゐる?

男の黒緑の瞳が面白そうに揺らめく。

やがて意地の悪い表情に変わり、少女のふわふわと揺れていの金色の髪を指に絡めた。

「叔父上の屋敷はおまえにとって居心地が悪いか?」

「……そんなことは無いわ。年の近いメイフューラーとは喧嘩もあるけれど、仲直りだってすぐするし。でも」

「でも、なんだね？」

少女は思いいつめたような視線をあげて、ひたりとその翡翠の眼差しで男を見返した。

「あなたが好きよ、ラドック・ベイリル」

思い切つてその肩に手を掛けて背伸びをして口付けた。

目測を誤つて、歯ががちりとあたる。

それが、リルファ・ディラス・デイラの初恋で、そして初めての家族以外との口付けだった。

「大丈夫ですか？」

心配気な声に肩を揺さぶられ、リルファは翡翠の瞳を大きく見開き、目を覚ました。

労るように覗き込んでいるのは、ハウス・メイドのサーラ。そばかすの浮いたかわいらしい少女の案じるような様子に、リルファは大きく息をついて微笑んでみせた。

「うなされているようでしたけれど……」

「悪夢だつたわ」

リルファは言いながら差し出されたハンカチで眦に浮かんだ涙を拭つた。

「ありがとうございます、起こしてもらえて助かったわよ」

「はい、あの　枕が低かったのでしょうか？　今夜は気をつけますので」

戸惑いを浮かべた少女に微笑みを浮かべ、リルファは寝台から足をおろした。

少し硬い寝台は確かに未だに慣れるものではない。郷里の自室の寝台は優しくやわらかく自分を受け止めてくれたものだ。

といつても、この新しい寝台もすでに一月あまり使用している。それが悪夢の理由ではないことは、リルファ自身が良く知っていた。

「新しい任務におつきになるとかがいましたけれど、帰宅時間はお変わりにならないのでしょうか？」

朝食の席、紅茶を用意しながらサーラが口にしたのはおそらく「場を和ませる」という目的があつたことなのだろう。だが、リルファは思わずもつていたスープ用のスプーンをかしゃんっと小さく鳴

らしてしまつた。

「さあ、今のところひょつと……判らないのだけれど」

「あの、何かご心配が？」

サーラが心配気に声をかければ掛けるほど、リルファの口元は引きつてしまつた。

十四の年齢で軍属の道を日指し、専門の寄宿舎に入り士官学校へと進んだ。この夏に人事異動を受けて中央に転属。そこで一月を経て辞令を受けたのが昨日のことだつた。

「まつたく問題ない」

言い切ると、リルファは席を立ちあがりナップキンで口元を拭つた。世話係として郷里からついてきてくれたサーラには感謝しても足りない。軍人など自分の世話はあるか上官の世話までするのが当然のところを、サーラが手をかけてくれるのだから随分と楽をさせてもらつてゐる。

そう、だからこれもきっと、叔父であるカドラスの肉親としての配慮なのがもしかなかつた。

* * *

未だ年若い軍歴の者たちが暮らす古い官舎を出て、近隣に建つ真新しいつくりの上級仕官用の建物が並ぶ一角に入る。

軍士公用の建物の区画は幾つかに別れていて、その中でも最上級の建造物。建物内に入るのにチェックを受けて、自分と入れ替わりになる軍人と引継ぎを済ませる。

書類にサインをする間、どこか哀れむような視線を向けられたがそれは完全に無視した。この視線はもう何度か遭遇していたものだ。そう、この辞令を受けてから。

「リルファ・ディラス・ディラ参りました。

失礼させていただきます」

軽くノックをし、応えを待たずに扉を開く。

つんつと、薬草の香りが鼻についた途端、ふいに泣きたくなつた。

広い部屋は雑然としていた。

本独特のにおいと、混じる薬草の香り。

寝椅子の上で寝ているその姿すらも変わらない。

「そりと溜息をついたのは、この上級官吏用の為の部屋には、奥に執務用の部屋もあれば別に寝室も用意されているところにこの部屋の荒れようがすさまじい。

「わう、きつと 神様は随分と意地が悪い。

昔、おそらく初めて恋した男の警護など。

そつと窓辺に近づいてカーテンを開く。

「これでは警護とは名ばかりの小間使いみたいだ。

「光は書物をいためる」

突然の言葉に、どきりと心音が跳ね上がつた。

「だからといって、湿気やカビも本を傷めます」

リルファはそ知らぬ顔で言つと、窓を開いて新鮮な空気を室内に招き入れた。

夏とも秋とも判らぬ風が室内に入り込み、よどんでいたよつた薬草とカビのようなにおいを一瞬さらつていぐ。なぜかほつと息をついた。

「朝食は食堂に行かれますか？ それともこちらにて用意したほうがよろしいでしょうか」

「お前は護衛官だらう。下働きのようなことはしなくていい」

「前任者にもそのようにおつしゃったのですね。」

「ですが、この部屋の有様もひどいものがありますし ほつておくと貴方様は寝食をお忘れになるとお聞きいたしましたが」「死ないかぎり生きている」

「また阿呆なこと言つてる。」

リルファは嘆息し、「貴方様は宮城の薬師様でいらっしゃいます。」「自身の健康のことをお考え下さい」

言葉を繰りながら、リルファは乱雑に置かれた本をとりあえず整え、丸められた紙くずを「ごみ入れに放り込み、書きなぐられた書類をまとめていく。

その間にこの部屋の主であるラドック・ベイリルは大きく息をついて立ち上がり、乱れた前髪をかきあげた。

「随分とつまらない女になつたな」

鼻息混じりの冷めた口調を、リルファは無視した。

「ラドック・ベイリル。

年齢不詳の青年は、相変わらずの様子でそこにいる。そこだけ切り取ったように以前とあまりにも変わらない。

九年という歳月すら、無かつたかのように。

だが、ただ一点は違う。

リルファの記憶のなかの男は、老人のような白い髪を確かにしていたというのに、現在の彼は瞳と同じ黒緑の髪をさらしていた。だから初めに彼を見た時、それがラドック・ベイリルだとは判らなかつた。

何より、黒い髪の青年は以前よりずっと年若くすら見えるのだ。

「本日のご予定は？

どちらかに行かれる予定でしたら馬車の手配を

「邪魔くさい。俺に警護などいらぬし、死ぬ時は死ぬ」

まるきりつまらないことのように口にするラドックにリルファはゆっくりと呼氣をつき、できるたかぎり冷静に「申し訳ございません。それが私の仕事で」とさいますから」とつげた。

「職務熱心なことだな。ならば扉の前で警護に励めばいい

『氣難しい薬師。』

数年前に妃殿下の産熟が悪く命も危ぶまれたときに窮地を救つたのは医学ではなく薬学だった。

その薬学を操る「薬師」ラドック・ベイリー。

腕の良さもさることながら、その薬学の為に影ではヒトコにはばかるような実験をも繰り返しているといつ噂がある。

黒い薬学師。

リルファは薬師の命令に一礼すると、そのまま部屋を出て扉の前で警護に立つた。

任命を受けた時、これは「栄誉ある職」であると言われたものだが、言つてしまえば「厄介払い」かもしれない。

「ラルは 扱いづらいからな」

いまさらほやいたところではじまらない。

軍務につきたいと望んだのは自分だし、中央勤務を喜んだのも自分だ。

まさか、古馴染みの警護が仕事だとは思いもしなかつたが 中央に来ることによつて、彼と再び顔をあわせるかもしれないと、ちらとも思わなかつたといえば嘘になる。

リルファは部屋の前で直立不動の体勢を取りながら、自分の中できりきりと痛むものと戦つていた。

あなたが好きよ、ラドック・ベイリー。

精一杯の勇気を込めてそう告げた。

相手の年齢も、外見の異質さも。その全てを認めて好きだと告げた。だが、ラドック・ベイリーはそれを一笑に付してリルファに突きつけた。

「おれを好きだつて?」

くつくつと肩を揺らし、それでも間に合わないのか腹を抱えて、

そうしてラドック・ベイリルは幼い少女に手を差し向かた。

「ならばお嬢さん、おまえが俺のものだという、その証をおれにく
れないか？」

彼が好きだった。

その想いは真実だけれど、その想いは間違った。

傷つけられた十一の娘は、その口全てを失つたのだ。

* * *

ゾクリと背筋を這い登る寒氣に、リルファは自分の内にある忍耐力を試されているような感覚を味わつた。

「これは、この任務は。

拷問に近い。

いや、拷問意外のなものでもない。

ラドックの仕事はいくつかの場所で行われる。その一つが敷地内にある薬草園、図書館、官舎内にある研究室。そして、刑務所。

中央に犯罪を犯した者達がとどめられた牢獄には、さまざまの人々が押し込められている。

ラドックはその虜囚を使い、薬の実験をしているのだ。

幾つかの薬を合わせ、それを死刑囚に投与する。

その日のうちに命を落とすものもあれば、それまであつた病状が完治することもある。

それを目の当たりにし、見つめ続けることは リルファの精神を少しづつ侵して行く。

「看守」

その日の薬の投与を終えたラドックは消毒薬で手を拭いながら、

監視の為にいる看守に視線を向けた。

「明日は女の囚人を用意してくれ」

「は」「

「できれば健康な二十歳前後」

「現在刑が確定されている女の中で該当するトスレバ、十七くらいの娘がいますが」

「ではそれと、五十代の病弱な男」

「それならいくらでもいます」

「どれでもいい、と軽く手をあげて牢官舎を離れるラドックの後ろをついて歩きながらリルファはわななく唇を押せんよついにしてその背に声を掛けた。

「……女性を、どうするつもりです」

「あんたには関係がない」

「そつけない口調が返される。

「ラルフ」

思わず昔のように声を掛けてしまった。

かつんっと、ブーツの足が止まる。

振り返った黒縁の瞳は冷たくリルファを見たが、やがて嘆息交じりに切り替えた。

「おれはおまえの上官だ」

「若い女性にどんな薬を投与するつもりですか！」

「いくら貴方が陛下に数々の権限を与えられているとしても……」

「では、お前が代わりに飲むか？」

睨み付けられたまなざしに、リルファは凍りつくような恐怖を感じた。

「俺がやっている実験はすべて陛下の命令だ。

それに口を出すことは、陛下への反逆にとられると知れ」

はき捨てられた言葉に胸元で手を握り締めた。

「……お前は明日、来なくていい」

ふいに、ラドックの口調が少しだけ柔らかなものになつた気がした。

それを頼りにするよつてリルファが言葉を重ねる。

「 私で良いのであれば、私が」

歩き出しかけた青年の足がまた、止まる。

その冷ややかなまなざしがひとりとリルファを射抜き、馬鹿にするかのように鼻を鳴らした。

「俺の仕事に耐えられないのであれば、せつせと郷里にでも戻つて嫁に行くのだな」

悔しそうくつと唇を噛んだ。

「安心しろ。明日の実験は命にかかる」とはない。

だが、明日は来なくていい。休暇のつもりで体を休めていればいい

「 私は……」

「命令だ。リルファ・ディラス・ディラ」

毅然とした口調で命じられ、それ以上リルファは口を開くことができなかつた。

遠ざかる背中も追いかける気力がない。何かをつかむよつて伸ばした手が、空をつかんでぱたりと落ちた。

新しい任務を命じられ、一月と半がかりうじて過ぎた。だが、その時間はただ過ぎただけで、リルファの中に新しい何かを築くことはない。

尻尾を巻いて帰れ。

そう言われたこともすでに一度や一度ではない。

この一月と半分で、自分の中に膨らんだものがあるとすればラドック・ベイリルに対する憎しみや恐怖ばかりだ。

あの男はこの一月と半分の日々すでに片手では足りない程の罪

人の命を奪つてゐる。

リルファは軍人だ。命じられれば他人の命を奪うこともあるだろう。だが、実際に誰かの命を奪つたことはただの一度もない。

自嘲気味に笑みを落とし、泣きそうな自分をごまかすように空を見上げた。

うつすらと星が瞬き始めた肌寒い空を

「リルファ様？」

肩を揺さぶられて目を覚ました。

「大丈夫ですか？」

心配気に覗き込んでいるのは、ハウス・メイドのサーラ。そばかすの浮いたかわいらしい表情にそつと息をついた。

「うなされていたようですけれど……あの」

「ありがとう」

リルファは言いながら差し出されたハンカチで眦に浮かんだ涙を拭つた。

もう何度も同じ朝を迎えていた。

滑稽なデ・ジャ・ビュ。

だがそれが最近の現実。

「本日はお休みどうかがいました、もう少し横におなりになられますか？」

サーラが労わるように言ひ、「ううつて悪夢にうなされて目を覚ますことが、この一月半で増えた主に、サーラは悲しそうな眼差しを向けてくる。

牢獄で耳にする悲鳴やなにかが自分の中に濁のように溜まって行くようになった。人々が影で黒の魔術師、黒の悪魔とののしるラジックのことを、リルファは實際擁護できない。

彼が育てている薬草園の大半の薬が毒草と呼ばれるものであることも、噂ばかりではなくほぼ事実だ。

彼は　この華やかともいえる国の暗部だった。

「いや……もう起きるよ。シャワーでも浴びてくる。朝食は、そうだな……たまには食堂で食べる。今日はサーラも体を休めなさい」

来なくていい。

ラドックの言葉がずしりと腹部に突き刺さる。

自分はあなたの護衛なのだと切ってしまえば良かつた。

シャワーを浴びて軍服に身を包む。

今日のラドックはいつもと同じ時間に部屋を出て、薬草園で薬草の世話、その後は薬草の調合室で薬をつくり、その後はおそらく監獄に行く　ならばその間に部屋を片付けてしまおう。

リルファはパンとスープだけの簡単な食事を喉の奥へと流し込み、ふと人の気配に顔をあげた。

「ああ、そのまで」

慌てて立ち上がり敬礼をしようとしたところを、どぞめられる。相手は人事部の総長であり、リルファにラドックの警護を任命した当人だった。

「君はよくやつてくれているようだね」

と、微笑まれ　リルファは胸にずしりと痛むものを感じた。

「……いえ、あまり役に立てず」

「いやいや、一月と半分もあの男についてもつているのは君くらいのものだよ。

あれで敵も多いから護衛官はつけないといけないのに、一週間ももたずに誰も彼も逃げ出す始末だ。

あれも底意地が悪いからな」

「

「それに、身近に人がいるのを嫌がる男だから、君が来てくれて良かったよ」

にこやかな上司の言葉に、リルファは複雑な表情を浮かべた。

自分が何の役に立っているのか、正直判らなかつた。

毎日ラドックの後をついて回つているだけだ。護衛といったところで、ラドックはもともと官舎敷地内からあまり出ない。何者か

に狙われるといつことも無いし、荷物もちのよつにただただついて回つてゐるだけだ。

上司の言葉に空返事をいくつも返しながら、リルファアはそつと自分の腹部を撫でた。ストレスで胃が痛む。

それとも、この痛みはラヂックに幼い頃につけられた傷跡が痛むのか。

上司を見送り、食事を終えたりルファアは嘆息し　すべてを払うよつこぶるつと首を振り「仕事だつ」と自分を奮い起しこじした。

絶対に今日はあのかび臭い部屋を片付けてやる。
埃をたたき出してやる。

あのごみだけの部屋を倒してやる。

それはあのラヂックをこてんぱんにしてやれるよつで氣分がよさそうだった。

リルファアは鼻歌を歌つよつとしてラヂックの自室に行くと、わつそく薄闇に閉ざされた陰気な部屋のカーテンをすべて開け放ち、窓を開く。

「ふふふ、合鍵がこんなときに役に立つのか」

憎しみを込めて室内を乱暴に片付けていく。

本に積もつた埃を叩き落とし、本棚に順番に並べて戻す。

カビが発生した床をモップでふき取り、わつすらと色をえかわつているような窓をふき、机を拭く。

捨ててよいものかどうかわからない書類はひとまとめに箱にいれ、明らかに捨てて良いと思われる丸められたものは捨てる。

昼食まで抜いて片付けていたリルファアがやつと一息ついたのは、太陽がゆつくりと沈み夕焼けで空が滲んだころあいだった。

埃と灰で一杯になつていた暖炉に火を入れ、要らないものを燃やしその熱で湯を沸かして、ふと　リルファアは棚の中にある小瓶に

手を伸ばした。

「大丈夫、だよね……」

黒いペースト状の物体。おそらく、これを見て一目で判るものはいないだろう。それでもリルファはそれが何か良く知っていた。古そう、そう咳きながらもその中身をカップの中に入落とし込む。

力カオ。

まさがあるとは思わなかつた。

子供の頃はラドックの小さな小屋に行けば必ずそれを飲んだ。甘くてちょっとだけ苦い優しい飲み物。

本来の力カオはむしろ苦味の強いものだが、これには砂糖を練りこんであることも知つてゐる。

子供の頃のラドックは、自分にとつてこの飲み物だつたのだ。

出窓はないが、窓辺に腰を預けてカップを傾ける。疲れた体に甘い液体をゆっくりと流し込んだところで、ザツとリルファは血の気を引かせた。

何の気配もなかつた。

それは突然自分の面前に突き出された。

ぐいっと窓の向こうから腕を差し入れ、リルファを背後から引き寄せその顔に銀色の細剣を突きつける。

「ラドック・ベイリル　じゃ、ないな」

語尾はあせるようなものだつた。

だから相手が間違えたのだと知るとリルファはすつと冷静になれた。持つていたホットチョコをためらわずに自分を背後からひきつけている相手になげかける。ひるんだところで身を沈め、床を転がるようにして距離をとり、胸元に入れている小さなナイフをそのまま投げる。

うろたえた男はそのまま窓辺から立ち去つていた。

「な……に？」

考えるより先に動いたリルファは、肩で息をつきながら慌てて窓に行くが、その姿はすでにはない。

そもそもこの部屋は三階なのだ。

遥か下に地面に叩きつけられたカップが粉々に砕け散り、ホットチヨコの黒い染みがひろがっている。

ソレを確認し、そこにきてはじめてぞくりと身が震えた。

敵の多い男だから。

自分ではなく、狙われていたのはラドックだ。

舌打ちしてリルファは自分をのしつた。自分は、ラドックの護衛官という立場であるといつたのに、その身から離れていい訳がない。血の気が引くような気を味わいながら、リルファは身を翻しあそらべラドックがいるであろう監獄へと足を向けた。

だんだんと暗くなる道を走り、敷地内の一一番はずれにある監獄塔へとたどり着く、門前にいる看守が声を掛けてきたが、リルファはそのまま普段彼が実験に使っている部屋へと足を向け 突然、腕をぐいっと引かれた。

「どうした？」

低い声にすうっと腹部のあたりから血の気が引いた。怪訝な顔をしたラドックが前髪に隠れる眉間に皺を寄せてこちらを見ている。険しいまなざしに泣き笑いの顔でリルファはほうと息をついた。

「あ、ああ……御無事ですか」

「お前は無事じゃないようだがな。なんだ、その怪我は？ 軍服も汚れている」

そう言われてはじめて、リルファは自分の軍服を見た。

黒く汚れているのはチョコレート 肩越しに投げつけたので、左肩がチョコで汚れてしまつたらしく。これはきっとサーラが困る

だろうな。とほんやり意味の無い思考がよぎった。

不愉快そうなラドックが左手首をつかんだまま、もう片方の手でぐいっとリルファの顎をつかみあげてくる。

「首、切れてるぞ」

「え、ええ？」

思わず間抜けな声を上げてしまい、慌てて捕まれたままの腕を動かし、指先で切られているという場所を確かめようとしたがラドックは舌打ちしてリルファを睨んだ。

「触るな。なんだその埃っぽいナリは？ 汚れが入ると破傷風になつたり リル……？」

ふいに、視界がぶれた。

体がぐくりと前に倒れる。それを感じながら、リルファは自分の馬鹿さかげんに小さく笑つた。

自分が暗殺者なら、細剣に毒の一いつも塗る、きつと……そうする。

力が抜けた体をラドックの腕が咄嗟に力を込めて支える。それを感じながらリルファは白い霧に包まれるような感覚に意識を手放した。

「莫迦な話だ」

つまらなそくな男の声が部屋に響いていた。

「俺を毒で殺せると思うのが浅はかだ」

「……」

ぐりぐりと頭がいたい。天井がぐるぐると回つていての感触。吐き気がする。

リルファはふいに口の中に冷たい水を差し入れられ、すうつという清涼感と共についでこみ上げる吐き気に身をよじって体内のものを

吐き出した。

そこまできてやつと、ゆつくじと視界がクリアになる。

「ラル？」

ぱろりと出たのは、昔、彼を親しげに呼んだ愛称。

彼は決まって、人の名前を縮めるなど名前を訂正させたものだった。

「見えているか？」

覗きこんでいる黒緑の瞳にこくじとつなづく。だが体がしびれた
ようになんだか動きが弱い。

「どこからでも入手できる植物毒だ。もともと致命傷を与えるつもりはないのか、遅効性の弱いものだ。どこにでもありすぎて出所をつかむことは無理だが、幸い毒を抜くのは楽だ　後遺症も残らないだろ？」

つまりなそういういきる男に、リルファは瞳を伏せて「すみません……」と小さくわびた。「護衛官だというのに……情けない」つひと、涙が伝って落ちた。

「この程度で泣くくらいであれば、さつさと郷里に戻ることだな」

「　その方が、いいのかもしませんね」

そう言葉にすれば、涙があふれてつぎつぎに頬を伝った。

ラドックは瞳をすがめ、近くのタオルを放り投げた。ばさりとそれが顔の上に落ちる。

それを抱くように顔を覆い、声を殺して泣いた。なぜ涙が出るのか、なぜ声を殺すのか判らない。

自分が情けないからか。

弱いからか。判らない。

自分がなぜここにいるのか判らない。

自分ほど役立たずなものなど地上のどこにもいない気がする。

自分の中のじろじろとしたものがあふれるように、涙があふれる。

隣にいたラドックの気配が遠のいていくのを感じ、さらに孤独を感じ

じた。

自分は 何のためにここにいて、何のために存在しているのだろう。

ちっぽけでどうしてよいのか判らない。

ひとしきり泣いた頃、ふいに鼻腔がくすぐられた。

甘い、ホットチョコの香り。

そつとタオルを顔からはずすと、面前に決してきれいとはいえないカップがずいつと差し向けられた。

「

どうして良いか判らないリルファに、ラドックは溜息をついてカップを寝台の横のテーブルに置き、未だ体がしびれた感じで動きづらいリルファの肩口に腕を入れて起こしてやる。

その手に、カップを押し付けた。

「いま、お前が気を弱くしているのも涙がでるのも薬の影響だ。それを飲んでゆっくりと休め いいな？」

忌々しいという様子の青年の姿に、涙で赤くなつた目元を和ませてリルファはぎこちなく微笑んだ。

「ありがと、ラル」

「ラドック・ベイリー おれの名前をへんに縮めるな」

もう何度も聞いたフレーズを耳に入れ、リルファは子供のように両手でカップを持ち、じぐじぐと温かで甘いホットチョコをゆっくりと飲み込んだ。

それから三日の間、リルファは寝台から出ることは許されず薬師としてラドックもそれに付き合つた。日々を重ねる「」とに、リルファは自分がどれだけ迷惑を掛けてしまつているかで恥じ入るしかない。

ラドック・ベイリーはこの中央聖都で有数の薬師だ。その薬師を

二田もの間本来の仕事から引き離してしまったといつのは 護衛官として許されるべきでない。

護衛

だから、動くことを許されたその田リルファはそのまままつすぐに人事部へと足を運んだ。

「おや、元気になつたようだね」

「にこりと、人事総長であるシリル・ドゥナは微笑んだ。普段から細い眼差しが、よりいっそう細く柔軟に下がる。

「申し訳ありませんでした」

「なにか？」

「護衛官でありながら傷を負つて二田もの間を無駄にいたしました。守るべき相手に看護までされでは面田のしだいもありません」

「ああ、そんなこと。

いいんだよ。ようはあの男が無事であるならね」

「つきましては、ラドック・ベイリル氏の護衛の任を解いていただきに参りました」

静かにじつべをたれるリルファに、シリルは、んーっと小さな声を出した。

「だが、当の薬師殿から解任願いは出でていよいよ」

「ベイリル氏の問題ではなく、私の問題です」

「困つたね。こっちにも色々と事情といつやつがあつてね。君には是非ともこれからもあの男の護衛官を勤めてもらいたい」というか。

「護衛官でいてもらわないと困る訳なんだが」
ぼやくように言って、大きく息を吐き出すと背筋を伸ばしますぐにリルファを見た。

「君が今回の件を恥じ入るといつのであれば、どうだらう。
君には罰を与える それで今回は帳消しにしよう」

「罰ですか？」

「というか、当然何らかの罰則は与えられるものと思つていたリル

ファは怪訝気に眉をひそめた。

「かといって減法とか罰金はぼくの趣味じゃないから」

ふふふんとシリルはにんまりと微笑むと、よこよことを思いついたといつよつにぽんと手を打った。

「あの薬師殿を毎日風呂に連れて行き、宮廷仕官とこいつ意識の低い男をちりよつとは身奇麗にしてやつてくれ」

それは無理！

思わず声をあげてしまい、そんなほどの暴挙。

だから自然とかされた声が漏れてしまった。

「無茶な……」

「そりや、罰則だからね。簡単なことをやらせても面白くない」

面白いとか面白くないとかの問題ではない気がするのだが。

「まあ、せいぜいがんばってね」

ひらひらと手を振るシリルに、半ば追に出されるようなかたちで部屋を出たりルファは頭を抱え込んだ。

身奇麗とは縁遠いのだ。

子供の頃もそうだった。あの男は汗とか垢とかと友情とか協定とかで結ばれているかのようにそれらを放置するタイプだったのだ。

そう思つと、そんな男を好きだと思っていた自分に「田を覚ませ」ところこんと説教をたれてやりたい気持ちになる。

そうだ。あの男は最低最悪な男だ。

十一歳の小娘の体に、こともあろうに一生消えることのない傷をつけた……そこまで考えてふるつと首を振つた。

「くそつ」

はき捨てた言葉に、廊下を歩いていたほかの軍人達がびくつと身をすくませていたがそんなことはかまつていられない。

黒の薬師4（前書き）

今回の話には「牢獄にて死刑囚使って試薬実験つてどうなのや？」的なエグイ内容がちょっとばかり含まれます。

駄目そうだというひとはさくりと回避して下さい。Rで言えばR1
2程度ですが、嫌いな人はきっと凄く嫌いです。ご注意。

リルファアはなえてしまいそうな自分の気力を鼓舞し、自らの護衛対象がいる部屋へと足音も高く向かつた。

たかが三日で陰気を取り戻した部屋に入ると、朝の弱いラドックはいつもと同じように自分の寝椅子でキルトに包まっていた。

よく見れば、彼の汗と垢協定は立派に健在らしく、黒緑の髪は艶やかさという言葉とは無縁になんだかべつとりと額に張り付いているようだし、近づけば薬草とは違ひ異臭すら感じてくる気がする。あくまでも気がするだけだが……

面廷官吏として間違つてゐる。

確かに……

顔にはうつすらと髭が生えている。だがもともと髭に関しては薄いほうなのだろう。毎日そつている様子はないが、さほどほかのことにくらべれば、むさくるしくはない。

自然と大きく息をついた。

「人の顔をみて溜息つくとはいひ度胸だな」

低い唸るような声に、けれどすでに慣れているリルファアは「おはようござります」と声を掛けた。

この男は身じろぎして起きたりしない。
突然その目がぱちりと開くのだ。

ある意味不気味。

「人事に辞任を申し入れましたが、却下されました」

「だから?」

「今回の不始末に罰を言い渡されました」

「で？」

「といふことで、浴室の準備が整つておりますのでどうぞ」「何がといふことだ？」

不機嫌そうな桐喝氣味の声。だがこの程度でひるんではいられない。リルファはてきぱきとクロゼットの中から着替えを引き出した。

見事に黒い衣類ばかりだが、幸いなことにきちんと洗濯はされている。当然だ。それは小間使いの仕事だから、浴場で衣類を置いておけば洗濯女が洗濯し届けてくれるのだ。

問題は、ラドックは毎日着替えないし毎日シャワーを浴びたりしない。

「はい、着替えです」

「意味が判らん」

「お風呂です。髪も伸びていますし、髪も汗でべつたりしています。もしかしてと思いますが、私が寝込んでいた三日の間シャワーも浴びてないのではないかですか？」

「それがどうした」

素でいばられてしまった。

「汚いです」

「……」

「不潔です」

「……」

「病気になりますよ」

「病み上がりにいわれても説得力がない」

確かに

「とにかく、つるとい。お前は護衛らしく外で立つてろ」
強い口調で怒鳴られた。

リルファはひきつりそうになつたが、ふとテーブルの上に放置され

たカップを見つけた。中身はホットチョコではないようだったが、粘度は高い液体のようだ。リルファはすかさずそれを手にすると、力いっぱい相手の頭からかけた。

「……」

「まあたいへん。浴室にござ案内いたしますね」
リルファは自分の演技力の無さに眩暈すら感じたが、今のが故意であろうといふことくらいどんな愚か者であつとも理解できることだらう。

「このつ、くそ莫迦娘つ」

憎しみのにもつたまなざしで射すべめられたが、ぼたぼたと謎の液体をかぶつた顔では迫力も半減だ。

忌々しそうにぎきりりと歯軋りし、ラドックは勢いをつけて立ち上がりつた。

だがリルファの思惑からはずれ、彼は浴室になどいかずにクロゼットにあるタオルを引き抜き、それで乱暴に髪を拭うことにじどまつた。

「……」

「出て行け」

「……」

「リルファ・ディラス・ディラ！ 外で立つていろ」

まるで悪いことをした学生に命じる教師のように怒鳴りつけられ、リルファはすぐと退出を余儀なくされた。

護衛官らしく扉の前で剣に手を掛けたまま、考える。

どうやればあの男を風呂にいれることができるか。そう、なおかつ毎日だ。

毎日身奇麗にわかるところのは実に荒業だ。

もつとべつたりとしたものをぶちかけてやれば否が応でも風呂に入るかもしない。それとも背中にやもりでもいれてやろうか？

まるで子供の悪戯のようなものを考へてゐる、一人の男が部屋の前で足を止めた。

軍舎では見慣れない官邸服は、宫廷貴族のものだつた。初老を感じさせる男はちらりとリルファを一瞥すると礼儀正しく一礼した。

「ベイリル氏はいらっしゃいますか？」

「滞在してござりますが、どうこつたゞ用件でしょうか」

これではまるで門番だ。

「グロウスと言えば」理解いただけましょう

その言葉に来客を待たせ、中にいるラドックに声を掛ける。

ラドックはまだ怒つてゐるのだろう、せつこまなざしでリルファを睨んだがすぐに相手を通すように命じ、「お前は外で立つていろ」と、更に命じた。

リルファは嘆息してしまつ。

自分がやつたとはいゝ、あの謎の液体をふいただけの格好で来客を迎えるのはどうしたものか……

いや、自分が悪いのだが。

いやいや普通あそこで浴場にいかないといつ選択肢はないはずだ。

外で真面目に立つてそんなことを考へていたら、さほど時間をたてずに来客は去つていつた。それを追つよつてラドックが部屋を出る。

この時間ならば次に行くのは食堂 もしくは薬草園だつたふんでいたといひに、その足は調剤室へと向いた。

何か薬を依頼されたのだつた。

いろいろした様子で棚の中の薬草をいくつもプレートに入れ、それを石臼でつぶしたりしながら作業してゐる。

出て行け、とこう指示が無いのでおとなしく室内でその様子を見

ていたが、ふと リルファは窓の外が気になつた。

そろりと身を動かし、カーテンが揺れる窓に近づく。人の気配がある気がし、ざつとカーテンを開くと驚いた様子の洗濯女達と目があつてしまつた。

「そう殺氣だつな。邪魔くさい」

「失礼しました」

「……調剤室は人の目が多い。阿呆な暗殺者といえどもそつそつこで狙おうなどとは思うまい」

いいながら作業を続ける男を眺め、リルファは顔をしかめた。自分は確かに護衛官だが。このままでは守ることなどできないのではないか？ 自分の腕に 絶対の自信などない。

「ラル

思わずそう呼べば、いつもと同じように「ラドック・ベイirl」と低い声が返る。

「ラドック…… さま」

「なんだ」

何事かを口にしようとして、リルファは口を閉ざした。

ぶるりと首を振り、なんでもありませんと応える。ラドックはいぶかしげに眉をひそめたが、何事もなかつたかのようにその作業を進めた。

リルファには彼がどんな薬を調合しているのか判らない。

ただ精密に重さを測り、いくつもの薬草を練り合わせたり火に掛けたりするのをただ静かに眺める。

昼を過ぎるまでそうしているから、リルファはふと彼の食事が気掛かった。小さく息をつき、

「ラドック様、お食事をお持ちいたします。
しばらくお側を離れますが

「かまわない」

「はい、ではどうぞこちらにいらしてください」

一礼してリルファは部屋を出ると、大きく息を吐き出した。

ふわりと柔らかな空気が肺に入る。中にいる間は気づかないが薬剤の香りで頭が少しほうつとするようだった。

かつんかつんとブーツを鳴らし、別塔にある食堂へと足を向けてた。

消化によさそうなものを幾つか頬み、プレートに乗せて戻るトーラ・ラックはちらりと視線の一つも向けることなく、短く命じた。

「先に食べている」

「いえ、これはラドック様の分です」

「おまえは？」

「私は結構ですので」

「病み上がりは栄養を取れ。食わないなら流し込むぞ」

黒縁の瞳に睨みつけられ、仕方なく「では食堂で済ませてまいりますので」と頭を下げる。だがラドックは何を思つたのか「ここにもつてこい」と命じるのだ。

食べないとでも思われたのだろうか？

信用がないな。

苦笑したが、命令であるなら仕方ない。言われたとおりに食事を運び、なんとも食べずらくも護衛対象を前に食事を済ませる。

当然、一緒に食事をしたところで、会話がある訳ではない。

もぐもぐとした味気のない食事。

ふと、手についていたリゾットを面前の人間にぶちかければ、さすがに浴場に行くのではないかとちらりとよぎった。

どろりとしたリゾットならばかけられればきっと相当気持ちが悪いに違いない。

左手で支えるリゾットの皿とラドックとをちらり見ていたら、ふいに下を向いていた面があがり、険しい視線を向けてきた。

三白眼を更に険しくし、口元には引きつるような笑み。

「それをかけたら殺す」

「しませんよ、そんなこと」

「ほう。そう願いたいな」

「でも、体は清潔にしたほうがいいですよ」

思わず勇気をふりしぶってしまった。

「薬師として説得力がありません」

「別に必要だと思つていない」

「でも、いつまでも結婚もできないですよ。そんなんじゃ」
言つてしまつてから、しまつたと思い浮かんだところで後の祭り。
そんなことを面前の相手が思つてゐるか、と聞えれば 欠片ほども
思つていらないに違ひない。

ちらりとも女性に興味があるのであれば、もう少し身なりを氣
にするだらうし、髪型をきにするだらうし、髪を放置したりしない
はずだ。

「ほおおお

低い声が這い登るように聞こえてくる。

「やうだつたな。どこかの誰かは俺が好きなんだつたな」

「いつの話ですか、いつのー

生憎と十一歳に一生残るような傷をつける変態下劣男など願い下げ
です」

「誰が変態下劣だ」

「一人の間に史上最悪の空気が流れ出したといひで、リルファアは食
事の終わったプレートを一枚、とりあげた。

「戻して来ますから、ここにいて下さ」ね

「 戻らなくていい。この後は人体実験に入る。お前は行かなく
ていい」

その言葉に一瞬血の気が引いたが、リルファアはこくつと喉を鳴ら
して意思の強そうなまなざしを相手へと突きつけた。

「いいえ。貴方の警護が私の仕事ですから」

そして、人体実験がラドックの仕事だといつのであれば、それ
を見るのもまた自分の仕事だ。

ラドックは目頭に皺を刻み、

「必要ない」

「私はラドック・ベイリルの護衛官です。貴方のいく場所に私は立ちます」

「勝手にしろ。

だが、俺のすることに口出しすることは許さん。いいな」

はき捨てられた言葉につなづく。

それ以降、ラドックは口を開こうとしなかつた。黙々と監獄塔までの道程を歩み、なじみの看守に声を掛ける。誰を連れてくるかの支持を出すと、看守の視線がちらりとリルファへと向けられた。

「何か？」

今まで何度もこの実験には立ち会つてきただが、今のよひに咎めるかのような視線を向けられたのははじめてのことだ。

「いや、あんたも中に入るのか？」

「そのつもりですが」

「悪いことは言わない その、外で待つていってくれないか？」

いじらしくに言葉を探り、視線をそらす男にリルファは毅然としたまなざしを向けた。

「私はラドック様の護衛官ですから」

「いや、しかし……」

「ほうつておけ。そのうちにイヤでも逃げ出す」

ふんつと鼻を鳴らし、冷たいまなざしで一瞥を送つてよこすとラドックは看守を促した。

看守とラドックの不信な様子に、さすがにリルファの心にも不安感がつのる。だが、この場に留まると言悟したのだから

実験用の部屋に入り、しばらくの間奇妙な沈黙が落ちる。ラドックは置かれている皿にもつてきた薬ビンを置き、グラスを用意してそれらを分けていく。と、看守が一人の男を連れて來た。

どんな罪を犯したのか判らないが、頬のこけた痩せた男だ。

看守はその男を椅子に座らせ、足首と手足とを固定した。

その瞳には「これからどんなことが起るのか理解できず」とわざわざしている。

毒、だらうか。

きちんと見届けようと覚悟したものの、そう思つてたまれない気持ちになつた。

軍人らしく出入り口に立っていたところで、背後の入り口から女の悲鳴が聞こえた。

「やめてっ、いやよつ、いやああつつ」

力任せに暴れる女を、一人がかりで看守が押さえつけて連れてくる。どきりと心音が上がつたのは、それが未だ年若い娘だったからだ。悲壮な様子で首を振り、「やめてっ、離してっ」と叫ぶ。金切り声のその聲音に、我知らず自分の腕をぎゅっとつかんでいた。

救いをもとめるかのようにラドックへと視線を向けるが、その視線はどこまでも冷めていた。

ラドックの姿に女の顔色が蒼白になる。

だが、そこにリルファの姿を見つけると、女は瞳を大きく見開き声を張り上げた。

「助けてっ。ねえっ、あんた女でしょう！
助けてっ、こんなひどいことつゝ、もうこやつ！」

心臓が早く鼓動する。

女の声は悲鳴のように響き、切羽詰つていた。その女の動搖に、さきに連れて来られていた男ががちゃがちゃと戒めを鳴らす。

恐怖が伝染しているのだ。

看守は無表情に女を所定の場所に固定した。それでも諦めない様子で彼女は全身で悲鳴を上げ続ける。

「押さえろ」

ラドックは冷たい声音でそう命じた。

「やめて、いつそ殺してつ」

「お前は死刑囚だ 安心しろ。やがては自由の手に乗せられる」
ラドックはいいながら、看守が押さえ込む女に近づいた。
あまりの痛しさにリルファは自然と唇を噛んだ。顎を固定されて
液体の薬が流し込まれる。女は涙を流して首をふって抵抗しようと
していたが、看守一人に抑えられて抗うことは許されなかつた。
やがて、ラドックの手にしていたグラスの中身が彼女の口に流し
込まれ 唇の端から流れ落ちる。

リルファは皿をざゅっと皿をつむぎてしまった。
もづ、すでに後悔している。

見なくてよいと言われていたものを、見ると決意したのは自分
だというのに。

やがて抵抗をしなくなつた女に、看守一人が離れる。
新たなグラスを手にしたラドックは、その冷たい視線を男へと向け
た。

男は恐怖でがくがくと震えている。だが、そんな男を前に、ラドッ
クは静かに口を開いた。

「この薬は媚薬だ。

これを飲むことで命を奪われたりはしない 飲むことによつて
お前は本能のままに女が欲しくなるだろう。生殖反応が現れれば、
その欲求のままにこの女を抱けばいい。

これはそういう実験だ」

飲め

男はどうして良いかわからないという様子で辺りを見回していた
が、やがてちらりと薬によつてとろんとした瞳になつてしまつた
女を見て、ごくりと喉を鳴らした。

女ほどの抵抗はなく、男は薬を飲む。

リルファはこの様子を呆然と見詰めた。

ラドックは一人に薬を投与し終えると看守に命じて一人の戒めを解いた。

女はとうりとした瞳をしてはいたが、それでも身の危険を感じているのだろううずりうずりとあとじたる。男は何度も喉仏を動かし、欲望の瞳を女へと向けた。

それを 観察者のまなざしでラドックは静かに見つめ、ペンを走らせる。

吐き気が、した。

やめなさいと叫んでしまった。

だが、やけに乾いた喉が言葉を失うように音を出さない。わななく唇と、ぎゅっと握りこんだ手だけが、小さな痛みを与えた。

女の瞳が涙に濡れ、自分の体を抱きしめて息を乱す。

頬が高揚していくのと、男が女の肩に手をかけるのは同時だったかつんつと、リルファのブーツが音をたてる。

一瞬だけ、ラドックの視線がリルファを見た気がする。

莫迦にする、さげすむ視線。

だがリルファは無言で背を向けてその場を離れた。

無力な自分にも吐き気がする。

五十過ぎの体力の落ちた男。

そう、それはおそらく……この国の主を想定しているのだ。この実験を止めることが、軍人である自分にはできない。

だが、どうしてもあの娘があんな形で汚される理由になりはしないというのに。

汚い。

何もかもが汚い。

あんな実験を平氣でやるラドックも、そんなことを命じる人間も、

それをとめることもできない自分も、なんて汚い！

監獄塔を出て、リルファは感情のままに壁を殴った。手の痛みも、

表面が裂けて血が流れることも厭わずに力任せに殴る。

悔しいのかつらいのか、もう自分でも判らない。

悲鳴を上げて涙を流す、身を崩すようにずるりと地面に膝を折った
ところで、血に濡れた手を、ふいに？まれた。

「何をしてるの？」

「ほんやりと視線を上げると、同じように軍服に身を包んだ青年がいぶかしむように自分を見下ろしていた。

本来であれば人懐こいと思わせる茶色の瞳を細め、不快そうに顔をしかめてみせる。護衛官であるリルファとは違う、一般兵卒の制服はどこにでもあるものだ。

穏やかそうな顔立ちとは違い、その手は固く強い力でリルファの手首を掴んでいる。

掴み上げた腕をみずからに引き寄せ、血に濡れたそれを眇めて更に眉を顰めてみせた。

「これは……相当痛いだろう。」「

おいで、傷の手当てくれるにはしてあげるから」

「

リルファは唇を噛んだままふるりと首を振った。

こんな痛み、あの娘に比べればどうということはない。

殺してくれとまで言つていたあの子は、きっと今日一度だけあの薬を使われた訳ではないだろう。経験があるからこそ、あれほど恐怖して拒絶したのだ。

リルファの腕をつかんだままの青年は困ったような微笑を浮かべた。

「何があつたのか判らないけれど……早く手当をしたほうがいい。大丈夫、言いたくないことなら無理に聞いたりしないよ。ただ、この怪我や泣いてるのを放置していくる程、人間終わってないつもりだから」

まあ、ぼくの自己満足に付き合つて。

軽い口調で言いながら、ひょいと引き上げるよつとそのまま立ち上がらせられる。

「歩く気がないなら、横抱っこするよ?」

さすがにそれは恥ずかしく、リルファはしゃくりあげながらゆつくりと足を動かし始めた。

ラドックの護衛としてこの場にいなければ、とは……ちらりと浮かんだ。だが、ちらりとだけで、まるですべてを拒絶するよつてリルファは一度瞳を開ざし、歩き始めた。

口を開く気力のないリルファに、青年は困ったよつた微笑だけを浮かべ、リルファを近くの部屋に連れて行き、手を洗い消毒して包帯を巻きつけた。

衛生兵だろうか。やけに手馴れた様子で包帯を巻き、微笑む。

「しばらく痛むかもしれないけれど、すぐによくなるよ。

まあ、風呂はしみるだろうけれど　あれ、君つてば首も怪我があるの? 怪我だらけだね」

怪我、といつても薄い切り傷だ。

今は包帯も巻いていない。軟膏だけはぬつてているが、もともと薄皮とほんの少しきられただけなのだからリルファは気にもしていかなかった。

ただ、傷跡自体は目立たないのだが、その場に痣のようなものが出来てしまつたのは不可解だつた。田々薄れしていくようなので、ほうつておけばこのまま消えてなくなつてしまいそうなのだが、サーラが何故か視線をそらしたのは気がかりだつた。

面前の青年は痣ではなく、その下に隠れている傷が気になるのか消毒液で首筋を拭い、微笑んだ。

「大丈夫?」

「……はい。お世話をおかげいたしました」

「いや、別にいいんだけど　まあ、自分を大事にしなよ?」

青年は微笑むと、包帯を片付けて立ち上がつた。

「じゃあ、ぼくはいくけど。大丈夫?」

話し相手が必要なら、もつ少し一緒にいようか？

「いえ、あの、名前、教えてもらつてかまいませんか？」

さつさと立ち去りうとする青年に、慌てて名を尋ねると彼はくすりと微笑んだ。

「次、会つことがあつたら教えるよ。

別に恩にきてもらうようなことじゃないからね。ではね」

ひらひらと手を振つていかれてしまい、リルファは丁寧に巻かれた白い包帯をそつと撫でた。

「……」

ゆづくつとそれをなで、浅い呼吸を繰り返す。

心が泣いているのをなだめて、先ほどの牢獄塔へと戻つた。中に入ることはできなかつた。彼らの嬌声を耳にしてしまえば、その動搖はもっと大きなものになつてしまいそうだったから。だからただ、ひたすらにラドックが出てくるのを待つた。

静かに、心を空にして。

やがて半刻程もたつた頃、ラドックは幾つかの書類を手に出入り口から顔を出した。その三白眼がちらりとリルファを一瞥し、何の言葉もかけずに歩き出す。

リルファはただ静かにその背後に従つた。

研究室も薬草園にも寄らずにラドックは自室に戻る。リルファは暮れしていく時間を前に、一礼してそのまま退出しようとしたがラドックに室内に入るようだと命じられた。

「座れ」

示された寝椅子は、彼が普段から寝台がわりにつかっているものだ。

乱雑におかれたキルトをよけて座る。ラドックは持つていた書類を机に放ると、溜息を落としながらふいにリルファの左手を取つた。びくんっと、体が震える。

そんな動搖などラドックは気にも掛けなかつた。

丁寧に巻かれた包帯を、乱暴に解いていく。それを解かれると、真新しい傷がさらけだされてしまつ「」とになぜか羞恥を感じて手を引込めようとした。

だがそれは適わない。

思いのほか強い力で手首を押さえ込まれ、一定のリズムでするすると容易くそれは解かれてしまった。

さらけ出された傷口は、ひやりとした外気に触れ、リルファは思わず視線をそらした。

「だから見るなと言つたのに それでも利き手ではないといふは褒めてやる」

ぼそりとラドックの口から出た言葉に、唇を噛んだ。
キツツと一度はそむけた視線を向ければ、ラドックの黒緑の三白眼がすぐれのような髪の間からリルファを睨みつけていた。

「 あれが、あんな非人道的な実験が、必要ですか？」

言葉にしながら理解している。

あれは、必要なのだ。

地位ある男のために。

世継ぎの君はいる。だが、何かあつたらと思えば更に子を成したいと思つただろう。

なんてくだらない。

「俺のやる」と口を出すなと言つた

「あの子はっ。私よりも年下じゃないですか！」

それがあんなふうに汚されるなんて許されない

ただの愚痴だ。

言つても仕方のことだ。

ラドックを責めて 責めても、何も変わらない。

「所詮死刑囚だ。死を待つだけのものを利用して何が悪い」

「だからって！」

「だから何だ？ 誰かがやらなければいけないものだ。だれかで実験して献上される薬だ。

えらそうことを言つたところで、誰かが犠牲になることに代わりはない」

ラドックはえぐるようなまなざしで口をつけてくる。

「あの娘を哀れんで、お前がその身を差し出せるのか！」

それができないのであれば、お前にどうやかく言つ権利はない」

「私が！」

とつさに出了言葉に、リルファはびくりと身をすくませたがそつと首を振つてひたりとラドックを見た。

「私が、実験体になればあの子はもう使わないのですね」

「莫迦か、お前は」

ラドックは心底あきれたという様子で息をついたが、リルファは小刻みに震える体を抱きしめて不安に揺れる瞳を叱咤して言葉をつむいだ。

「私が」

ラドックの言つ言葉は正しい。

非難したところで、誰かがその身を差し出さなければこの実験は終わらないのだというなら、汚いだの何だと叫ぶ前に、自分が身を投げ出せないのであればそれはただの偽善だ。

ラドックはぎりっと歯を鳴らし、はつと息を飛ばした。

「いい度胸だな、莫迦娘」

ラドックはがんつと乱暴な音をさせて席を立つと「半刻、よく考えろ。頭を冷やせ 僕が戻った時にまだその考えが変わらないのであれば、お前を実験体にしてやる」

リルファの身が、震えた。

時間をおけば今の考えは簡単に覆つてしまいそうだった。

勢いが、といわれればきっと勢いは大きい。時間がたてばたつほどにきっと自分は自分の発言に身を震わせて無様に動搖して自分の言葉を後悔し覆し、またのたうつ。

いつそ今このときに薬を渡されてしまつまづがマシだ。
ラドックは憎むような眼差しを呻きつけ、ふいと身を翻して自身の部屋を出て行った。

半刻。

それがこんなに長いことを、リルファははじめて感じていた。

頭の中が沸騰してしまいそうなほど、さまざまなことが頭をよぎつていぐ。あの娘が哀れだと、あんなあつかいは不当で非道なのだと訴える自分とともに、だからといって自分がそれを成せるのかと罵倒する声が頭で響く。

身を縮め、外界からの声を遮断するように耳をふたたびふたと強く耳を瞑る。

あの娘は未だ十七だらう。自分はそれより四つも年上で、何より陛下に仕える軍人だ。この身は陛下の為に存在する。

あの子が汚されたというのであれば、自分はなんだ。この身はすでにラドックにより傷つけられた。

リルファは自分の左腹部をきつく押さえた。

その時の証は　今も失われることはない。

ならば、ならば

ダンッと、音をさせて扉が開かれた。

ハッと身をすくませて顔を上げれば、ラドックが自分の頭をタオルで乱暴にふきあげながら、普段はすぐれのような前髪に見え隠れる黒縁の瞳をむき出しにしてさげすむような眼差しをこちらへと向けた。

ほんわりとただよう石鹼の香り。

リルファは小さな振るえを必死に押し込み、冷え切った男の言葉を耳に入れた。

「決ましたか？」

「私は軍人です。この身はもとより陛下の為に……」
言うほど、勇ましい音にはならなかつた。
小刻みに震えるからだのように、言葉も多少頼りない。
だが、それでも必死に自分を奮い起こした。

「ふん。立派な軍人魂だな。莫迦らしい」

ラドックは言いながら一旦リルファの横を通り過ぎたが、すぐに棚の中から小さな薬瓶を取り出し、グラスの中にそれを落としこんだ。

「ずいっと 差し出される。

「飲め」

「……あの」

手を差し出しながら、かたかたと手が振るえ、つま先がグラスを一度はじいた。

「ここで、ですか？」

相手は？

戸惑う声に、無表情の監察官の声で男は「見知らぬ囚人に抱かれ
るのに記憶を持つていたいか？ 薬が利いてきたら入る手はずにな
つてる」

と素つ氣無く返される。

リルファはすっと血の気が引くのを感じながら意を決してグラスを受け取るとその中身を吐き気と共に飲み込んだ。

* * *

激しい頭痛が眠りを妨げた。

夢を見ていたは覚えている。いつもの悪夢だ。

子供の頃、森の中にある小屋で暮らしていた青年の夢。牢獄で数多の薬を投与されて命を落とす囚人の悲鳴。

いつも中心にいるのは、黒い悪魔のような男だ。

冴え冴えとした眼差しですべてのことを淡々とこなす。人の命を救う為の薬を作る為に、数多の人を犠牲にできる男。

「ラル……」

泣きながらその人を呼んだところで、目がぱちりと開いた。

一瞬焦点の合わなかつた瞳が、だがすぐに薄暗い天井を寫す。見慣れたものではなかつたが、それでも知らないものではない天井。高官が暮らす寮の天井だ。

涙でこわばつた瞳に手をあてて、はりついた目元をそっともむように撫でた。

むき出しの腕が、目に入る。

ぼんやりと記憶をたどつても、なぜここで眠つているのかは出なかつた。記憶をもつと深く手繰ろうとして 辞めた。

思い出したくなかった。

そろそろと寝台を出れば、下着だけの姿の自分。リルファの軍服は室内にある椅子に掛けられていた。

皺になる。

そんなことを思つて、自嘲氣味に引きつった笑みがこぼれた。意図もせずに、つつと涙がこぼれてしまう。

自分の身に何があつたのか、理解したくなかった。

ただ莫迦みたいに、笑いたくて泣きたくて、吐き出したかつた。けれどそんな自分の頬を一発殴りつける。

自分で選んだ道だ。

後悔ならしている。いっぱいしている。

だが、それがどうした。

あの娘は自分で選ぶこともできなかつた。相手を面前にしていた。自分のように記憶しないように顔を合わせないという配慮すらなか

つた。

そう 少なくとも、それはラドックの配慮だろつ。リルファは昨夜の出来事を記憶していない。

激しい体のだるさも、頭痛も ただそれだけのものだ。唇をかみ締めて頭を振る。痛みに顔をしかめたけれどそれだけで、リルファは寝台をぬけだして軍服に身を通した。

寝室を出れば、こちらこそ見慣れた本と書類だらけのラドックの私室。その主は珍しくすでに起きだし、何かの書類を作成していた。

「おはよう、ござります」

声が震えたが、それを隠すように瞳を伏せて笑った。

「ああ

不機嫌そうないつものラドックの声。こちらを見ようともせずに、ただ黙々と書類を作成しつづける。

「あの

昨夜は、と言葉を続けようとして飲み込んだ。じつ口にしてよいのか判らない。

昨夜は、良いデータがとれましたか？

というのは激しく間が抜けているような気がする。

それに自分から掘り起こして楽しい話題ではない。

どうしようかと迷つていて、ラドックはちらつとリルファを見た。

「朝食を運んでくれ。二人分」

「あ、はい」

「湯を用意して行け」

命令口調に、リルファは慌てて暖炉脇に置かれている水入れの中身を薬缶ケトルへといれ暖炉に掛ける。そしてそのままの勢いで部屋を出た。

食堂 ああ、その前に朝の身支度をしていないじゃないか。

手洗いに出向き鏡の前で身支度を整える。はじめの気だるさなど

『こにいったものか、十一分に睡眠をとつた時のようにすつきりとした顔立ちに泣きそうになつたが、頭から水を掛けるように顔を洗つて首を振つた。

仕事だ。何事も。

嫁に行けない？

そんなものは知つている。傷のあるこの鳥を求める者など元よりありはしない。

『リル、軍なんて行かなくても……俺の妻になればいい。そんなことでリルが変わる訳じゃないだろ？』

ふと脳裏によみがえるメイフェアーの兄の言葉をふるりと振り払う。従兄弟であるジェイコブはリルファアが嫁に行けない身になつたのだと承知して、そんなリルファアの救済の為に自らを犠牲にするような言葉さえ掛けてくれた。

愚かで、優しい人。

たとえその道しか無いのだとしても、その手にすがるなど出来よう筈がない。

リルファアは自嘲の笑みを浮かべながらそつと自らの腹部を撫でた。

このままオールドミスになつて軍人として果ててやる！！

新たな決意を胸に抱き、食堂でプレートを手にラドックの部屋に戻るとしたところでふとその笑顔に気づいた。

「お、はようござります」

「おはようございます。昨日の怪我はもう大丈夫ですか？」

と、手の怪我を消毒してくれた青年が首筋のタイを閉めながら微笑む。

両手が一人分のプレートを手にしているリルファアに「持とうか？」と声をかけてくれるがそれは辞退した。

「上面と君の分？ 仲良しなんだね」

てらいなく微笑まれ、リルファは微妙に引きつった。
仲良し？ これほど似合わない単語もないだろ？。

食つか食われるか、そういう関係かもしれない。

「じゃあ、またね」

と、手を振られ、慌ててリルファは声をあげた。

「あの、わたくしはリルファ・ディイラス・ディイラと申します。ラドック・ベイリル様の護衛官を勤めております。あなたのお名前を頂いてよろしいでしょうか？」

「ああ、じゃあ、もう一度会ったらにしていい？」

もう一度顔を合わせたら結構運命的じゃない？」

なにが楽しいのか笑いながら彼は立ち去つた。なんだか不可思議なものを見送りながら、リルファは肩をすくめてしまった。

いくら長い軍官舎といえども、顔くじりのうちはまた会わせるだろ？。

運命なんて大げさだ。

だが、そんな軽口にほんの少しだけ心が軽くなつた。

運命？

運命論など信じていない。ラドックとの腐れ縁も、この出会いも、あつと意味は無い。

自嘲氣味に、苦笑がこぼれた。

黒の薬師6（終）

「お待たせしました」

器用にプレートを支えて扉を開き、ソファの前のテーブルにプレートを並べる。湯が煮えていたので棚から茶葉を出して紅茶を準備する。一瞬ホットチョコをいれようかと思ったが、朝食には向かないだろうと結論づけた。

ラドックはぱたりと書類を閉ざし、朝食を取るためにソファに座る。

静かな朝食だった。

わずかな食器の音が静寂の室内に響くだけの、味気なさばかりの。その静寂を破ったのは食後の紅茶をゆっくりと喉の奥に流し込んだ男だった。

「おまえ、郷里に帰れ」

「は？」

リルファは真剣に驚いた。

先ほど軍人として果てる決意を新たにしたところでそう言われてしまつとは思わなかつた。

「試薬実験をするたびに身を差し出すのか？」

到底おまえのような脆弱な精神ではこの仕事は耐えられない。そうなる前に郷里に帰つて叔父上の膝で身を丸めていろ

「お断りします」

リルファは身を整え、意思の強い翡翠の眼差しで相手をねめつけた。

「私は軍人として生きる決意を固めたところです。

貴方の指図は受けません」

「まったく結構な決意だな。

そうやって囚人が哀れだと泣いては薬の投与を受けていくつもりか

？」

「それが軍人としての仕事であれば。

もとより私の身は陛下のものです。陛下の「命令」、陛下の御為とあれば私が受けれるのも辞さぬ考え方です」

こんな風にいえるのは、きっと昨夜の出来事を記憶していないからだ。

どんなに吐き気がしても、どんなに恐怖に身を震わせても、記憶がないからこそこうしていられる。

だれとも知らぬ男に犯された記憶を持つて、果たして毅然とした態度でいられるかどうかは正直判らない。

だからこれは、ラドックに言わせればただの上つ面だけの言葉なのかもしれないけれど。

「本当に下らない。

貴様など軍人以下だ」

ぐつと唇を噛む。

ラドックは憎しみに満ちた眼差しでリルファを射抜いたまま、乱暴に立ち上がると、薬棚に足をむけ、そのまま彼女の面前に薬瓶を置いた。

「飲め」

「命令ですか？」

「命令だ」

その薬が何か、問うこととはしなかった。

心は凍っていた。ラドックへの感情が、憎しみなのか恐怖なのかも判らない。ただ、命令だといつのであれば、もう従つしかない。

小瓶を手に、ためらい一つ見せずにひとりにリルファは煽つた。

苦い味が口一杯に広がり、喉の奥が拒絶するように吐き気がこみ

上げた。それを押さえるよつて慌てて冷めてしまった紅茶で飲み込んだ。

厳しいラドックの瞳。

それを睨み返してこくつゝ、たゞじと体が変化していく」とにリルファは息を詰めた。

まるで熱病のよつて、体に熱が生まれて、時折ふつとその熱が冷める。

その奇妙な変化は、何故か身を震わせる。つゝと汗が流れて、心音が耳元で響くよつてなる頃には、我慢できずに自分で自分の体を抱いていた。

ラドックはゆつたりと反対側のソファにすわり、ただ傍観者の瞳をしてこぢりを見ている。その視線が怖くて、リルファの瞳は伏せられた。

歯が振るえてかちかちと小さな音をたてる。

口の中に溜まつた唾液に、慌ててそれを喉の奥へと流し込んだ。

「どうした

「いえ……」

声が震える。

両腕で自分の体を抱きしめ、ぎこちなく視線が泳ぐ。熱いのか寒いのか判然としない。上半身は熱いのに、下半身が冷たいような気がする。

血の氣が漣のように引くよつな頬りなさ。

下げていた視線が、不安に揺れてつゝと上がる。

戸惑つそのまま瞳を、ラドックの冴え冴えとした黒縁の瞳が貫いた。

「あ……」

心の中を無理やり踏みにじるよつた瞳に、リルファの眦から何故かつつと涙がこぼれた。

その手にしがみついてしまったい衝動に愕然として、身を叱咤する。すがりついて泣いてしまいそうな自分を 叩きのめす。
必死に自分を抱いているリルファアに、ふとラドックは溜息をついた。

乱暴に席を立ち、リルファアの面前のテーブルにどさりと勢いをつけて座るから、リルファアは体を震わせて背中を向けた。

触れてほしいという思いと、触れられる恐怖。

ラドックは苛立つように手を伸ばし、リルファアの顎を無理やり上向かせた。

小刻みに震え、赤く潤む瞳から涙がこぼれる。

「つらいか？」

「 いえ」

強がるよつに小さく応えた。

ぞくぞくと身が震えて何かにすがつてしまいそんなのを必死にこらえているのに、それを出すのは彼女の矜持が許さない。

ラドックに負けたくない。

ただそれだけで睨み返した。

たとえ、リルファアが必死に毅然とした態度をとっているつもりだとしても、ラドックには到底そっぽ見えなかつた。

「誘うな」

だからにやうと口元をゆがめて意地悪く男の口は言葉を囁いた。

潤む瞳も、小刻みに揺れる唇も。男の心をぞくぞくとなで上げるには十分な所作だろう。だが、ラドックは余裕のある態度でリルファアを眺め、口角を引き上げる。

「莫迦なことを、いわないで下さい」

「 そつか？ 誘っているようにしか見えないがな」

「侮辱するつもりですか」

「どこまでそうしていられるのか、実に見ものだな」

ラドックは顎にかけていた手を乱暴に離し、観察といつよりも樂しみかのようにゆったりと椅子に腰を下ろした。

「これ……昨日の、薬と……おなじ?」

あえぐように言葉にすれば、ラドックはクツクツと笑う。

昨夜の薬はすぐに意識を失つてしまつた氣がする。それとも、この奇妙な感じをただ忘れているだけだろうか?

その疑問に、ラドックは耐え難いとでもいうように口角をゆがめた。

「莫迦か? 昨日飲ませたのはただの睡眠薬。

今おまえが飲んだのが正真正銘の催淫剤 実験の様子では、男を知つてゐる女程おぼれるのは早いぞ?」

とじめどばかりに告げられた言葉に、氣力が萎えたかのように、体を支える力が奪われ、がくりと身が沈む。からうじて寝椅子の背もたれにもたれるようにして状態を建て直し、必死にラドックの黒縁の瞳を睨み返した。

「この変態下劣男!」

内心でののしつても、すでにその言葉が口からこぼれない。

息の荒くなつた唇は、氣を緩ませると涎を落としてしまつやうで、リルファは必死だった。

体が熱い。

体に触れている軍服が、自分が動くたびに皮膚を刺激して小さな悲鳴をあげそになる。

大きく体を動かせば、ふいにテーブルや寝椅子の縁に体が触れて身が縮む。

全身の神経がむき出しにされたように冴え渡り、まるで蛇にいたまっているかのように身動き一つできない。

ラドックは実に悠然とそんなリルファを見下ろし続ける。

「……ら、る」

耐え難い苦痛だった。

救いを求めるように、声が漏れる。絶対に屈服しないと心は強固に訴えていた。頭が震がかるように何かすがれるものを求めていた。

「良く耐えているが、もう黙日か？」

楽しそうに言われ、意識がふつと浮上する。

悔しかつた。

いつたん堰を切ったように声をあげれば、きっともうそれはどうめなく嬌声となつてあたりを満たしてしまいますだ。

殺してやりたい。

腹のそこからそう思った。

この面前の男が憎くて、憎くて仕方が無い。なぜこんな苦痛を強いられなければならないのか判らなくて、なぜこんなに非道なことができるのか判らなくて、ただ純粹な殺意がリルファの腹部に溜まつていく。

「どうした？」

樂になりたいならそう言え。俺も悪魔じゃないからな
くすりと笑う男を睨み付ける。

「だが、その時はとつとと郷里に戻るんだ。
まったく田舎の小娘がいるような場所じゃない」

肩をすくめて言われる言葉が、果てしない侮蔑や侮辱に聞こえる。
確かに自分は田舎の小娘かもしれないが、そこまで言われる必要があるのか？

リルファは脂汗を流しながら、唇を噛んだ。

意識が奇妙な薬じきに支配されそうになる。それを許せず、リルファは咄嗟に胸の脇に仕込まれている小さなナイフを引き抜き、そのまま自分の足に突き刺そうとした。

とたん、だんつとナイフだけが弾かれる。

恐ろしい程の正確さで、ナイフの切っ先をよけて小さなグリップを蹴られたのだと気づくのは随分と後になつてからのこと。

呆然と手元を見つめた。

ナイフを跳ね上げたのは、ラドックの足で　弾いたナイフは少し斜めにあがつたものの、ぐるぐると回つてラドックの手の中に納まつた。

ナイフを持たない手が、物凄い勢いでリルファの胸倉を？みげ、ナイフを受けた手は力任せにソレを壁へと投げつけ、その勢いのままにリルファの頬を容赦なく、打つた。

「つたく　予想外の動きばかりするお嬢さんだ」

激高した声が憎々しげに吐き出され、頬を強く打つた手はもう一度　今度は逆の頬を打つた。

痛みに気が遠のく。

ついで腹部に容赦の無い一発をいれられ、目元が震むままに力を抜いた体を、ラドックはものよにどさりとソファに投げつけた。

ひんやりとした手が頬に触れる。

熱を持つたそこに、冷たい手が　ひとりと触れる。

もう何度もそうされたから、リルファはなんだかうれしくてすりつと頬を摺り寄せた。

「リルファさま？」

優しい声に名を呼ばれた。

瞳を開くと、手と思つた冷たいものは絞られたタオルだった。タオルをそつとリルファの頬に寄せてくれていたのは、ハウス・メイドのサーラで、リルファは自分が自室にいるものと一瞬勘違いした。

質のよい寝台はラドックの私室のものだ。

また、ここに泊まってしまった。

溜息が落ちた。

「熱をおだしになつてお倒れになりましたのよ。病人を移動させるのはおかわいそうだとおっしゃつて、ベイリル様がこちらのお部屋を使わせてくださつたんですよ。

お優しい方でいらっしゃいますね」

にっこりと微笑むサーラを、思わず人外生物を見るような眼差しで見てしまった。

「ラドックが優しい？」

それはどんな勘違いだ。

「ラドック……様は？」

乾いた喉で告げると、サーラは微笑みながら水の入つたグラスを差し出し「薬草園に行かれました」と告げた。

「今日はいつ？」

乾いた舌をゆつくりと動かして問いかけると、自分の記憶の中の数字から一日変化していた。

「そう、一日眠つていただけなのね」

まったく護衛官として情けないにもほどがある。

「リルファ様、まだお休みになつていらしたほうが……」

「サーラ、私は大丈夫」

きつく言い、寝台に押し留めようとする手を払い、壁に引っ掛けられている自分の軍服に袖を通していった。

「お前は部屋に戻つていいから

「はい」

鏡を見てそつと頬に触れてみる。ほんの少しだけ頬が赤くなっているが、さほど見苦しいこともないだろう。慌しく寝室の扉を開くのと、廊下の扉が開くのはほぼ同時だった。

「仕事が溜まっている。来い」

「はい」

一瞬立ちくらみを覚えつつも、ラドックの命令に体は素直に従つた。室内の椅子に立てかけられていた細剣を腰に吊るし、足速にその後に続く。

ラドックは室内の薬瓶を幾つかトレーに載せて歩き出したが、部屋を出る数歩手前で足を止めてすっと壁に向けて手を伸ばした。

何だ？

と首を傾げるよつ先に、ラドックの手が突き刺さったナイフを引き抜いてこぢらへと示した。

「リルファ・ディラス・ディラ

「はい」

「命令だ。おまえは俺の為に怪我を負い、俺の為に死ね。

馬鹿の一つ覚えのように、その身は陛下のものだと言つていたが、間違えるな。おまえはおまえの身をそれ以前に俺に差し出している。おまえは俺のものだ。俺意外の理由で傷を負つつもりなら、俺がおまえを殺す」

手渡されたナイフを胸の横の小さな隠しに滑り込ませながら、リルファは顔をしかめた。

意味は判りかねるが、どうやらどうやら死ぬのが前提らしい。

「……ラドック様

「なんだ」

苛立つような視線が振り仰ぐ。

不満そうな音。

「私は、貴方の護衛官として任官する」とが許された、と云つてよろしいのでしょうか？」

ラドックは背を向けた。

「勝手にしろ」

その背に静かに従いながら、リルファはどこか静かな心に触れていた。

いつか、自分はラドックを殺すかもしれない。
いつか、自分はラドックに殺されるかもしれない。
それはきっと、ありえない話ではないはずだ。

黒の薬師6（終）（後書き）

「黒の薬師」はこれにて終了。もともと長い物語の序章部分です。連日お世話になりありがとうございました。

カチリと首筋のホックをはずすのを合図に、ふと心の緊張が緩んだ。

特別護衛官という任務を賜つたのは新任地について一月。着任して三ヶ月。

歪む窓ガラスに映りこむ自分をみれば、なんとなく……痩せた気がする。

いや、やつれたというべきか？

胸回りに手を当てて確認しながら、自然と眉根が寄ってしまった。「どうしたね？」

「はあ、いえ もう少し筋肉をつけるべきかと思いまして」直属の上司に当たるマデイル・コーリアス大佐に背後から声を掛けられ、リルファ・ディラス・ディラは乾いた微笑みを浮かべた。まさか仕事のストレスでやつれたなどとは言えない。

あまり訪れることのない軍舎はリルファにとつてはなじみのない場所だ。

新任地に訪れて一月、その後数度だけ報告の為に訪れただけの場所。名ばかりのリルファの机は、誰のか判らない荷物が我が物顔で占拠している始末だし、とうてい居心地が良いとも思えない。

自分の机である筈のそこ いくつか備え付けられている引き出しの中に男性向け風刺雑誌（ロボ）を発見し、見なかつたフリをしてそつと閉ざし、リルファは自分よりも幾分高い場所にあるマデイルの顔を見上げた。

「それより、一週間も護衛任務からのはずされたのは、何か私の落ち度ということでしようか？」

このさい、この本が自分に対しての嫌がらせであるのか、それともただ他の隊員が隠しただけのものであるのかはどうでもいい。リ

ルファが気になっていたのはソレだった。

今朝方、突然リルファが寮の自室で休んでいると従卒の青年が一通の命令書を持って現れたのだった。同じ部屋で寝泊りしているハウスマイドのサーラがおろおろと主への突然の命令に慌てていたのが氣の毒で仕方ない。

リルファの視線を真っ向から受け、マティルは唇をペロリと舐めた。

「何か失敗の覚えがありますか？」

「まあ、細かいことをいえばきりはありませんが」

彼女が自分の護衛対象者と喧嘩もどきの怒鳴りあいをするのは、一日にいつぺんはあることだつたし、護衛官としてはあまり役に立っていないのではないかと思われる点は多々ある。

もとより、ほっとでの田舎兵卒如き、突然中央転属というだけでも破格の出世だとのうに、更に研修終わりで専任護衛官など明らかに叔父が心配した挙句に裏から手を回したのではないかと危惧している程だ。

地方領主のコネ程度、結構簡単にまた飛ばされてしまいそうな気すらしている。

「いや、以前の報告の時に言つていたでしょ？」

少し体を鍛えなおしたいと、護衛の任務をこなしながら体を鍛える時間を作るのは至難だろうから、一週間程離れて専念させようと思つたのですが、問題でも？」

その言葉に、沈んでいた表情が一気に明るいものになった。

やはり自分の仕事に問題があれば、叔父に迷惑が掛かることになるのではないかと思つていただけに、その杞憂がぱあっと見事に霧散した。

「いえ、何か問題を起こしてのことではないのであれば、一週間といわず一月でも一年でも大歓迎です」

あまりの明るい言によつて、マティルは苦笑を落とした。

「あ、でもその間の ラドック・ベイリル様の護衛任務は……」

「安心しなさい。ほかの者を当てている。といつても、いつ戻されてくれるか判らないですがね」

最後はぼやくように苦笑を零され、リルファも乾いた微笑みが張り付かせた。

ラルは我慢だから とは飲み込んでおく。

噂でしか知らないが、今までの護衛官も一週間と持つのはマレだつたのだという。

確かに我儘で残虐で意味不明な男ではあるが、だからといってただ護衛するだけならばうろちょろと動く訳でもないし、本人の奇行など無視し続ければいいと思うのだが そのてんにおいてリルファは自分が多少の免疫と豪胆さ、そしてずぼらさを持ち合わせていることを気づいていない。

「嬉しそうですね」

あまりにもこやかになつてしまつたリルファの様子に、マティルは呆れた様子で眉を顰めた。

「そりやあ、一週間もあの腐れ頭と離れていられる訳ですからつと、素直に感情を吐露してしまつたのは愛嬌ということで許して欲しい。

だが、マティルは片眉を跳ね上げ「ラドック・ベイリル薬師殿は我が国の重要人物だということを忘れてはいけませんよ」と、静かに諭した。

「この一週間、好きに使ってかまいません。

他の隊に入り、鍛錬してもいいです。一人で鍛錬してもいい。官舎内の誰かに師事するのであれば私に言うといい。書類を作成してあげますから」

あまりに至れり尽くせりぶりにリルファは上機嫌になつてしまつた。

中央の机につき書類仕事へと戻ろうとする上官に頭を下げ、リルファはこの日からはじまる一週間の自由に口元が緩むことが止められなかつた。

まず、何をするべきか。

護衛官としても少し体力と筋力をつけるべきだろ。」
と、リルファは自分の手のひらをじっと見つめてくいくいと開いたり閉ざしたりを繰り返した。

女である自分は、どうしたって力でもって男性に劣る。それは努力でどうにかなる問題ではないのだ。ならば違う道を切り開くべきだ。

「まずは、アレだな」

リルファは自分の机の中、棚の中をじしゃしゃと探し始めた。

「……なんですか？ 何をしているんです？」

あまりにも不審な動きをしづらめたりルファに、マーティルは首をかしげた。

「あ、ロープが無いかと思いまして」

「ロープ……？」

がさごそと荷物をあさる手はそのままに「数日前にラドック・ベイリル様の私室の様子が変わつておりまして。どうやら窓から不審者の侵入があつたようなんです。ですが、ラドック様の私室は三階なので　いやと言つときに三階から階下におりられるように訓練を

「報告を受けてないですよ」

「はあ、室内進入だけですから」

「莫迦ですか？ 私物に毒物でもいれられたりしていたらつ」と、慌てる上官に、リルファは「毒程度で死ぬ人じゃないんで」と実につまらなそうに言つた。

「……あなた、豪胆すぎやしませんか？」

「ああ、あつた！」

「ちょうどよさげな太さ。長さは大分足りないが、なんとかなりそうだ。

リルファは強度を確かめるように引つ張った。古いものではなさそうだし、リルファの体重くらいは楽に支えてくれそうだ。
嬉しそうに笑みすら浮かべ、リルファは今度は窓辺へと近づくと近くの机の足部分にロープの先端を括りつけ、ひょいと窓からロープをたらした。

「……デイラ護衛官、もしかしてこじでやるつもりですか？」

不信に満ちた上官の言葉に、リルファは少しも頓着しない。

「だつて、この部屋丁度三階ですから。
さすがに屋上から飛び降りるのは想定してませんけれど、三階から飛び降りるのにはちょうどいいでしょ？」

言葉と同時にロープの先端を手に窓から身を躍らせる。

一度壁に足を当て、ロープの反動も利用してスピードを殺す。だがタイミングがずれたのか思つたよりもがくんと大きな衝撃を受けつつ、じろりと地面に降り立つた。

「　なんとなく、あなたがあの人の下で平気な理由が見えます……」

リルファは顔をしかめながら自分の肩口、尻についた泥汚れをはたき、少し壁から離れた地点に立つとおもむろに助走をつけ、二階までしかおりていないうちロープの先端をつかみ、そのまま三階へ壁伝いに駆け上った。

「デイラ護衛官、つらそうですが？」

「ふ、ふふふ　腕の力がちょっと足りないだけです。

十回も繰り返せば少しあはマシになりますから

「十回も繰り返すのでは、さぞその壁は足跡だらけですね。最後にはモップで綺麗に洗い落としておいてくださいよ」

リルファは上司の言葉を励ましの言葉と受け止め、せつせとその

田一田壁おり、壁下りを繰り返した。

夕刻、地面に転がったリルファを、二階の窓から紅茶のカップを片手にマデイルが眺め「生きてますか?」と声を掛けると、すでに筋肉痛に苛まれた娘は乾いた笑みしか浮かべられなかつた。

「生きて、ます」

「壁掃除は終わつてゐるのですか?」

「……明日でいいですか?」

マデイルは嘆息した。

明日までこの奇怪な足跡を残しておく趣味が、彼はない。それに、階下の部署からはすでに苦情もきていた。

窓の向こうを人が降りたりのぼったりを繰り返しているのだから、確かにたまたものではないだろ?」

「グレン、グレンドル」

マデイルは自分の仕事を終えて戻つてゐる部下をちらりと見やつた。軍人らしく短い髪、左額に小さな火傷跡あるいかつい男はとたんに嫌そうな顔をした。

「言つておきますが、自分は壁歩きしながら壁拭きなんて器用な真似はできませんから」

その体重も、おそらくリルファの一倍以上ある男だ。

マデイルは「使えない」とぼやくと、持つていた紅茶のカップを机におき、部屋の隅にあるスポンジを濡らして窓辺のロープをつかむと、軽々と窓から滑り降りておりる過程で壁をふき、一階の窓枠に足を引っ掛け壁をふき、地面に降り立つて壁をふく。

リルファは筋肉痛で転がりながら、内心でうわあっと悲鳴をあげていた。

上官に掃除をさせてしまつた!

「で、そこで討ち死にしている阿呆な護衛官。
動けませんか?」

「はあ……最近めつきり鈍つてたようにして、面倒しだいもありません」

言いながら、それでも腕に入れて立ち上がるうとする。筋肉が悲鳴をあげるが、それでもあまりにも無様なので必死に力を入れる。

「グレン」

マディルは声を張り上げ部下を呼んだ。

「はい」

「綺麗に洗つてしまつておいて下さい」

と、マディルは持つていたスポンジを三階に向けて投げ込むと、頬りない小鹿か何かのようによろよろと立ち上がつたりルファの腕を引き、肩下に自分の腕を入れて支えた。

「つ、すみませんっ」

「腐つても部下ですからね。丁度いい、薬師殿のところに行つているクラウスの様子も確認ができるだらうし」

「つて、行く気ですか？」

「あなた、擦り傷だらけですよ？ 打ち身もあるでしょう。軟膏なりいただいたほうがいいでしょ。

それともまさか、薬師殿の護衛官であるあなたが、医師の治療を受けるつもりですか？ それはそれでイロイロと問題になりそうですよ」

ぐつと、リルファは言葉に詰まつた。

確かに、それではまるきり「この薬師は信用できませんよ、ヘボですよ」と護衛官が吹聴しているようなものだ。

それはそれで楽しそうで心からやつてみたい」との一つだが、あの護衛対象にネチネチと恨まれそうな気がする。

ネチネチというか、ネチャネチャとそれはそれは執拗に。

リルファは眇めた眼差しで虚空を睨みつけた。

せっかく一週間もの間顔を見ずにするむかと思っていたのに、どうやら怪我や病気を煩うと、自分は強制的にあの顔の前に突き出され

るよつだ。

まさか訓練の怪我で罰せられたりはしないだろ？けれど……ふと浮かんだ思いにリルファは更に深い溜息を吐き出した。

ラヂック・ベイリーの仕事部屋へとひきずりれるよつて到着する
と、部屋の前でマデイルの部下であるクラウス・ヒューがほつとし
たような表情を浮かべて敬礼した。

「お疲れ様。一週間がんばれそつかな」

マデイルはよいしょっとリルファを抱えなおし、その衝撃にリル
ファは喉の奥で呻いた。

上官からの言葉に、クラウスは苦渋の混じるような奇妙な表情で
「 善処、いたします」と短く応え、リルファは打撲の痛みに顔
をしかめながらクラウスを盗み見た。

何度も挨拶を交わしてはいるが、元々部署でやる仕事ではない為
に付き合いは無い。

つんつんと少し癖のあるブランウンの髪を無理矢理撫で付けているが、
髪質が固いのか寝癖のようにはねている。少し垂れ目な為にリルフ
アより幼くさえ見えるが、確かに年齢で言えば四つ近くは上に当たる。
善処、いたします　とは、また微妙な返事だ。

リルファなどはそう思つたが、マデイルはそれを良いほうへとと
つたのだろう。

「薬師殿はおいでだね。この怪我人の治療を頼みたいんだが、とり
つてでおくれ

「はい、少々お待ちください」

護衛官は門番でも部屋番でもないのだが、ここではそういう扱い
になつてしまつのだ。リルファは見慣れぬ自分の同僚に深く同情し、
また 普段の自分の任務がそれだと思うとえらくへこんだ。

中の応えに、リルファは上官の手を断りそろそろと見慣れた室内
に入りこんだ。

薬を調剤する為の部屋であり、また問診などをするその部屋で黒

い薬師はそのうつとうじやうな前髪の奥にある黒縁の瞳を細めた。

「なんだ、おまえか」

「はあ、失礼します」

「どう口にすれば良いだろう、と思案する矢先、マテイルは丁寧に胸元に手を当てて頭を下した。

「薬師殿、お忙しいところを申し訳ありません。

私の部下のかすり傷の治療と 本田より任務につきました護衛官の様子をお聞かせ願いまして構いませんでしょうか？」

「護衛官など誰でも同じだ」

あんまりさうりと言われたため、リルファは一瞬息をつまらせた。そりや、確かにそうだろうが 自分の専任護衛官を前に言ひ台詞ではないだろ？ 思い切りへこむ。

「まあ、そうかもしませんが」

マテイルは苦笑した。

その瞳がちらりとリルファを見たのは、少しだけ哀れんだのかもしれない。

ラドックはつまらなそうに顎をしゃくり、リルファに座るようになると命じた。リルファはおかげでいる椅子に座り、ロープでされた白手を引き抜いた。

幾度もロープをつかみ、滑つたりもしていた為に本来白いはずの手袋は土で汚れ、それで穴が開いている。穴があいている場所には、見事に擦過傷がのぞき、指の付け根下は固くなっていた。

繰り返せばそれはそれは見事なタコになりそうだ。

手首をつかみ、その傷を検分していたラドックはおもむろに手近にある消毒薬をつかみ、何の躊躇もなくぱりと傷の酷い手に掛ける。

「うぐうひゃあううう」

予想だにしない痛みに思いのほか高い悲鳴が上がる。途中で耐えようとした為にその声は奇妙に裏返った音になつた。

思わず体が拒絶するように逃げようと跳ねたが、ラドックの手はしっかりと手首を押さえ込んでいてそれが適わない。

マデイルは医療とみるには容赦のない攻撃に視線をそらした。
ひくひくと引きつるリルファに、ラドックは冷たい眼差しを向け、「しばらくそのまま放置しどけ。消毒薬が乾いたら薬を塗つてやる」「って、このままですか？」

まるで手首に輪をはめられた罪人のような格好で座つているリルファは情けない声を上げた。

手は消毒液でぐつしょりと濡れているし、それがひりひりと痛む。「ああ、打身もあるんですねが」

と、思い出すよつにマデイルが言つが、むしろそれは余計な世話だつた。リルファは泣きそうな顔を自分の上官に向けたが、それは取り合つもらえない。

「どこだ？」

「腕や臀部 訓練の過程で何度も転がつていたので、間接部には多く。筋肉痛も厳しくなりそうですので、それに合つ薬があつたら出していただけと……」

まで、今、臀部とかいつた？

リルファは心底、この優しげな口調だけの上官をこらみつけたくなつた。

「わかつた」

ラドックはいいながら、いつもと変わらぬ無感動な視線をひとりとリルファに向けた。

「自分で脱ぐか、はがされるか选べ」

「いや、あの。

軟膏だけいただければ、自室でハウスメイドに塗つてもらいますから」

及び腰になつて、まるで言い訳のように訴えてみたのだがラドックは感知すらしない。威圧だけで脱ぐように命令する男に、さすが

にマテイルは間に手を差し入れるようにしてさえぎつた。

「えつと、当人もそういうっていますから薬だけいただければ」

「患部を見ずに薬が出せると思うのか？」

軟膏くらいおとなしく出してくれ。頼むから。

嘆息交じりに肩を上下させ、リルファはふと手が乾いていることに気づいた。ひらひらと手を動かし、

「では、薬は結構です。お忙しい薬師様のお時間を無駄にいたしまして申し訳」

逃げよう。

そう思つた矢先、ラドックはおもむろにリルファの腹部をぐつと押した。

「いいいい」

「これは擦過傷かな、それとも打撲か？」

面白いくらい怪我人だな 訓練場のことによかつたな

言いながらそのまま肩を押され引き倒される。筋肉痛と打撲によってリルファの体が悲鳴をあげる。

「ちよつ」

抗議の声をあげるより先に、軍服の胸の脇 隠しナイフがすら

りと抜かれ、そのまま首筋、軍服の襟口に引き入れられた。

リルファも彼女の上司もあまりの速さとその行動のとっぴに腹を飲み込み、判断がおくれてしまった。

「このまま引き裂かれるか、自分で脱ぐか選べと言つている」

ホックにナイフの刃が引っかかり、上着の生地がぴんと張るのを感じて、リルファは目を閉ざして觀念した。

「自分で脱ぎます」

「まったく手を焼かせるな」

つまらなそうに鼻を鳴らし、ラドックは手にしていたナイフを手首のスナップだけで壁に突き刺した。

タンツと小気味良い音をさせたナイフの響きの中、リルファは

情けない思いを覚えながら自ら襟口に手をまわし、カチリと音をさせて第一ホックをはずし、ゆるゆると上着を脱いだ。

上着、シャツ　さすがに薄い下着は大丈夫だろうと一枚の上着を椅子の上に放った。

外気に触れてはじめて、左の腕の擦過傷がひりひりと痛むのに気づいた。はじめのうち、きちんと着地できずに幾度か転がった時ものだろ？　右側をかばつた為に左側に負担がかかっている。

「利き腕は良くかばつてますね」

おそらくそれは上官のほめ言葉なのだろう。

リルファアはふいっと右手にいる上官をみあげ、乾いた微笑みを返した。

「まあ、今日のような阿呆な訓練は一日続けるものではありませんけれど」

としつかりと釘もさされる。

リルファアの腕を掲げもち、その怪我の具合を見ていたラドックはふんっと鼻を鳴らし、先ほどと同じように無造作に消毒液をその腕にかけた。

「くひああああ」

予想できただはずだが、上官との会話に気を取られていたリルファアは何の心構えもなく消毒液の洗礼を受け、跳ね上がった。

「おまえは本当に拷問には向かないな」

冷ややかなラドックの言葉に、思わず上官がいるといふのも忘れてリルファアは声を張り上げた。

「貴方は本当に拷問官に最適ですね！」

「人を痛めつけて楽しいですか？」

「俺の適正などどうでもいい。おまえ、骨は大丈夫なんだろうな？」

言ひや、触診しようと手を伸ばされる。リルファアは避けた。

「大丈夫です！」

骨は無事です

だから触らないで。骨の異常は無いと断言はできるが、何より触られるのが痛い。

リルファは自分の隣に無造作に置かれている軍服を掴み、痛む足をすばやく動かしマディルの腕をつかんだ。

「大佐！　帰りましょう」

「え、ああ　　はい」

「失礼しました。ちよづなひ」

半ば逃げるように部屋を出たリルファを見た代替護衛官クラウスはぎょっとした。

それも当然で、上半身だけとはいえ下着姿の若い女性が慌てた様子で出てきたのだから、誰だとも同じ反応を示すに違いない。

「デイラ護衛官、上着、上着」

「はい」

リルファは慌ててシャツと上着とを着るが、どうにもぴしりといかない。

マディルは大きく息をついた。

「確かに、薬師殿のやりようは誉められたものではありませんが、デイラ護衛官　貴女の態度も少し問題ですよ？」

「は、はあ……」

「の方はあれで陛下の覚えもめでたい方です。

薬師としての腕も研究者としての腕もわが国で並びなき方なんです。その方に対しても怒鳴りつけたり、よりもよつて拷問官に最適などと……」

マディルは額に手を当て、大きく息をつくとひとりリルファを見下ろした。

「場合によつては、貴女の任務を考えなければなりませんね」

ぴくんっと背筋が伸びた。

「ちょっと、と待ってください？」

そうすると僕は、まさか……」

その場で警護任務についているクラウスは驚愕に瞳を見開いた。

「まあ、その場合は君にそのまま任務についてもらいうのが一番妥当だとは思いますが。

なんです？ 何か問題が？」

問題があるのは十分に理解しているだらうに、マティルは相手に口を挟ませない威圧を向けてくる。

クラウスは一瞬悲壮な顔を浮かべはしたもの、がくじりと肩を落としつつも「いえ、問題ありません」と小さく応えた。

ラドック・ベイリルの護衛から外れる。

それはなんと甘美な誘惑だらうか。

だが、ふとリルファは顔を曇らせた。

それは、許されるのだろうか？

ラドックは以前リルファに言つたことがある。

自分の為に死ね、と。

もちろん任務なのだから。軍人なのだから、勤務からはずされればそれは仕方ないことなのではないか？

「デイラ護衛官？」

マティルの問いかけに、リルファは口を閉ざした。

任務だから仕方ない。

それが通じる男であれば問題は無いのだが。

専任護衛官として外される。

ちらりちらりとそれが脳裏を掠める。

掠めたところで何が変わるわけでは実際ないのだが。リルファは軍人で、ラドック・ベイリルの護衛任務を外れたとしても他の誰かの護衛官として任命を受けるだろうし、またまったく違う軍務につくことだとして考えられる。

それは人事の領域で、一般兵にどうとできるものではない。

「何を余計なことを考えている！ やる気があるのかつ」

激しい一喝に、リルファはびっくりと身をすくませた。

面前に刀剣が振り下ろされる、慌てて地面を蹴つてそれを避けた。

「つたく、ちゅうちゅうとつ」

剣戟の講師として紹介された騎兵隊体長の一撃は重い。リルファにしてみればそれを受け流すのも苦労だった。だから自然と足を使い、体を動かす。

胴を屈ぐように剣が動く、それを身を沈めてかわして地面に手をついたところでそれを軸にして足を回す。咄嗟にやつてしまつたことだつたが、剣戟にこれはもちろんタブーとしかいいようがない。隊長であるダグラスは持つていた刀を地面に突き刺し「この小娘つ」と怒りをあらわにした。

「剣戟の訓練に来ているのか、曲芸をしにきているのかどっちだ！」

「すみませんっ。

ですが、ダグラス隊長の剣を素直に受けたは私の体が持ちません」「すでに体力も磨り減つてしまつた。

腰に細剣を戻し、リルファは汗に濡れた前髪をかきあげた。

「おまえは剣が向かないな。ナイフやムチを師事したらどうだ？ 体は軽いしよく動くから組み手もいいかもしねないが、あがいても女の腕だからな」

リルファはそつと細剣の柄を撫で嘆息した。

確かに、剣は自分にはあまり向かない。

「鞭……ですか」

「武具庫に行けば幾つかあるだろ。」
「そうだな、離れた場所に目的をおいて試しに打ち付けてみたらどうだ？」

「どうやらダグラスはすでにリルファに教える気が無いらしい。せっかく上官であるマティルにわざわざ書類を作つてもらつたというのに申し訳ない。」

それでもそのまま放置するような真似はせず、ダグラスはリルファを連れて武具庫へと赴くと、壁に飾られている鞭を幾つか引き出し、その長さを確認した。

「意外に重いですね」

「重心がしつかりとしているからな。だが鞭部分は皮製だ。軽いぞ。先端に重石が付いている。」

たとえば

ダグラスはふいに鞭を振るうと、部屋の入り口付近にある無造作に立てかけられている棍棒へと鞭をうつた。

鋭い音をさせて鞭はしなやかに伸び、鞭の先端から数十センチ離れたところで棍棒に触るとそこが軸となり重石部分を有する先端がくるくると巻きついた。最後までそれを見定めず、くいっとダグラスが腕を引く。

立てかけられていたそれは、その勢いでもって空を飛び、たちまちのうちにダグラスの元へとそれを運んだ。

パンと音をさせて棍棒を受け取るダグラスはニヤリと笑った。

「面白いだろ？..」

「……面白い、といふか、すごい」

「相手の武器を奪うこともできるし、相手を傷つけることもできる。ただ、これはコントロールが難しい。やってみるか？」

「ずいと手渡されたのは、ダグラスが使つたのとは違うものだつ

た。重さと長さが違うよつだ。

リルファはためしに同じようにふりあげてみよつとおもつたもの、ダグラスに慌てて止められてしまった。

「とりあえずは外でやれ。

室内でやるには十分にコントロールできるよつになつてからだ。それに、これはそもそも室内でやるには無茶な武器だぞっ。」

「では覚えてあまり……」

難色を示すと、ダグラスは笑つた。

「これでコントロール能力がつくと、ナイフを投げるのも巧くなる。もちろんナイフは投げるものじゃないが、そういう使い方もできるようになる。いろいろ覚えるのは悪いことじやない。そうだろつ？」

その言葉にリルファはうなずいた。

自らに最適な武器を見つける。

それは軍人であるリルファにとつて急務だ。

十四の年齢から軍人になる為の訓練を受けてきた。それなりに腕には自信があるものの他の者より卓越しているとはどうしても言いがたい。

ラドック・ベイリルの護衛官でなくなつたとしても、必要なものであるのに変わりはない。

リルファは中庭に出ると、言われたよつに的を用意して離れた場所に足を固定した。

「その鞭は8メートルだ。

つまり、的との距離を把握しなければいけない。相手が人間であつたとしてもそれは代わらない。体にしつかりとその距離を覚えこませろ。そして大事なことは、相手は動くといつことだ。相手の動きを見極める。先を読み、超える」

少し離れた場所でダグラスは腕を組んで楽しそうに眺めてくる。

リルファは多少息を整え、手にした鞭をぱらりと垂らし 振り上げた。

「あれ？」

パシンっと地面の土と雑草とを削り取り鞭の先端が落ちた。

思いのほか離れた場所を鞭は打ちつけ、置かれた的 グラスはものともしなかった。

「肩に力が入りすぎだ。もつとやわらかくていい」

「そういいますけど、先端の動きが把握しれない。意外に重い」

「重からうがもつとゆつたりと打ちつける」

がははっと笑いながらダグラスは言つ。どうやら楽しんでいるらしい。

リルファアは内心で溜息をつき、ちらりと鞭の握りの部分を見た。

先日のロープの豆もどきから未だ四日。

「こりゃ完全に豆になるな。つぶれたら痛いだろうなあ」

思わずぼやいたが、ダグラスに「なんだ?」と問われて慌てて首を振つた。

「いいえ、いきます!」

大きく息を吸い込んだ。

* * *

新しく与えられた鞭を護衛官室の自分の机 未だ誰のか判らない荷物が載っているが で手入れをしていると、室内に上官のマディルが舞い戻つた。

大きく息をついて肩を上下させる様子は「疲れてます」と書かれているようだ、リルファアは鞭をベルトで纏め上げ、

「お疲れ様です。お茶でもいれましょうか?」

本来護衛官としては必要ではないスキルが磨かれているリルファアだった。ラドックの元にいると、まるきり自分がただの茶組みにでもなった気持ちになれる。

「……ああ、デイラ護衛官」

乾いた微笑みを浮かべたマディルの背後、続いて現れたのは更に顔色の悪いクラウスだった。

「あれ？」

クラウスはリルファアがいることに気がつくと、まるで長年の親友にでもそうするように、突然駆け寄りリルファアを抱きしめたのだ。

「もう勘弁しろっ」

「はい？」

「あの人酷い。酷すぎるー」

「まあ、あんまり人としてどうかとは思いますがけれど

これは何事？」

リルファアが救いを求めるように上官へと視線を送ると、上官も参つたというように額に手を当て、

「デイラ護衛官は、あの人の……まあ、刑務所内での仕事を知っていますね？」

鎮痛な面持ちでそう口を開いた。

ああ、あれか。

リルファアはうなずいた。

「いわば人体実験だ。確かにあれは悪辣が過ぎる。

ラドックは死刑囚を使って薬の試薬実験をしているのだ。それを護衛官として身近に見続けるのは確かにつらい仕事の一つだ。

ラドックに言わせると「どうせ死ぬなら役に立て」ということらしいのだが……

「俺だつて仕方ないとと思うさ。これが仕事だ。

だからただ見ているだけならここまで嫌がつたりしない！」

と、リルファアに抱きついたまま半泣きのクラウスは叫んだ。

「あの人、俺に毒を飲ませやがった！」

「あ、あああ……？」

「なんだ？」

と疑問を抱くリルファアに、マデイルは嘆息交じりに説明してくれた。

おそらく、本来であれば説明してはいけないようなことだったが。

「つまり 実験、といつか今日は確實に死刑執行だつたらしいのです。

相手は8人の子供を犯して殺した残酷非道な輩だったわけですが、それを相手に新しい丸薬の実験をすることになつていていたようですが、男は口を開こうとしなかつた。

毒を飲まされると感じていたのだらう。ただの薬だと呟つてもがんとして口を開けない。

「そこで、薬師殿はクラウスを呼び、口の中を診察して丸薬状態になつていた薬を放り込んだそうです」

「……」

ぶるぶるとクラウスが震えだす。

「意地でも飲まなかつたけどなつ」

それでもラドックの目は「飲め」と威圧していたが、クラウスは飲むフリだけで通した。

「相手の男はそれに安堵したのか、やつと薬を飲んだ」

「そうしたら！ 突然目がむき出しになつて首をかきむしって、血や泡を吐き出してつづ」

お願いですから力説しないで下さい。

「俺がどれだけ恐ろしい思いをしたか！」

「まあ、口の中に傷や口内炎がなければ害が無いといふことらしいんですけど」

「そんなこと説明されなければ判らない！ それより飲ませる気満々だつたつ。俺飲んでたらあぶねえじやんつ」

あんまりにもクラウスが哀れで、リルファはぽんぽんとその背中を撫でながら、おそれく自分がその場にいたら自分も同じことをされていただろうことを想像し、更にクラウスに同情を寄せてみた。

「もう駄目です。もう耐えられませんつ。俺はあの人を守るなんて金輪際イヤですから」

「ううう、不憫な。

自分が口に含んだものと同じ薬で目の前で悶死されたら、それはさぞ恐ろしいことだらう。

クラウスは慌ててそれを吐き出しだが、口中が痺れるな気持ちに

ぞつとしたという。

「それ以前の問題ですよ、クラウス」

ひんやりとしたマデイルの言葉に、クラウスの振るえる体が一瞬こわばった。

「あれ、では今は誰が？」

「一応今はグレンンドルに任せてありますが グレンは元々他に仕事もありますし」

大きく嘆息し、

「リルファ・ディラス・デイラ護衛官」

「はい」

「通常任務に戻つていただいてかまいませんか？ もちろん、私としては貴方の護衛対象への無礼を思えば個人護衛はまだ早いのかもと思いますが……少なくとも、代わりに用意する者が現れるまでの間は、貴女に頼るよりないようだ」

マデイルは更に深く息をつき、

「まあ、ラドック・ベイリル様から苦情はきていませんから……ああ、胃が痛い」

「あのお

「なんですか？」

ただの興味で聞いてみた。

「私がもう絶対にいやだーっという状態になつた場合は、考慮してもらえるのでしょうか？」

「三ヶ月の人とやつていける豪胆さは素晴らしいですよ。デイラ護衛官」

引きつったような微笑をマデイルは向け、リルファに張り付いたままのクラウスを引き剥がし、外へと引き立てていってしまつた。

豪胆さなど褒められたところで嬉しい訳はない。

リルファはせつかくの訓練期間が終わりを告げたことにがくりと肩を落とし、嘆息した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9858o/>

詰め合わせギフトパック

2011年11月26日19時47分発行